笹本祐一
ハレー・ジョン・ゴースト
妖精作戦 PART II
新装版
ソノラマ文庫

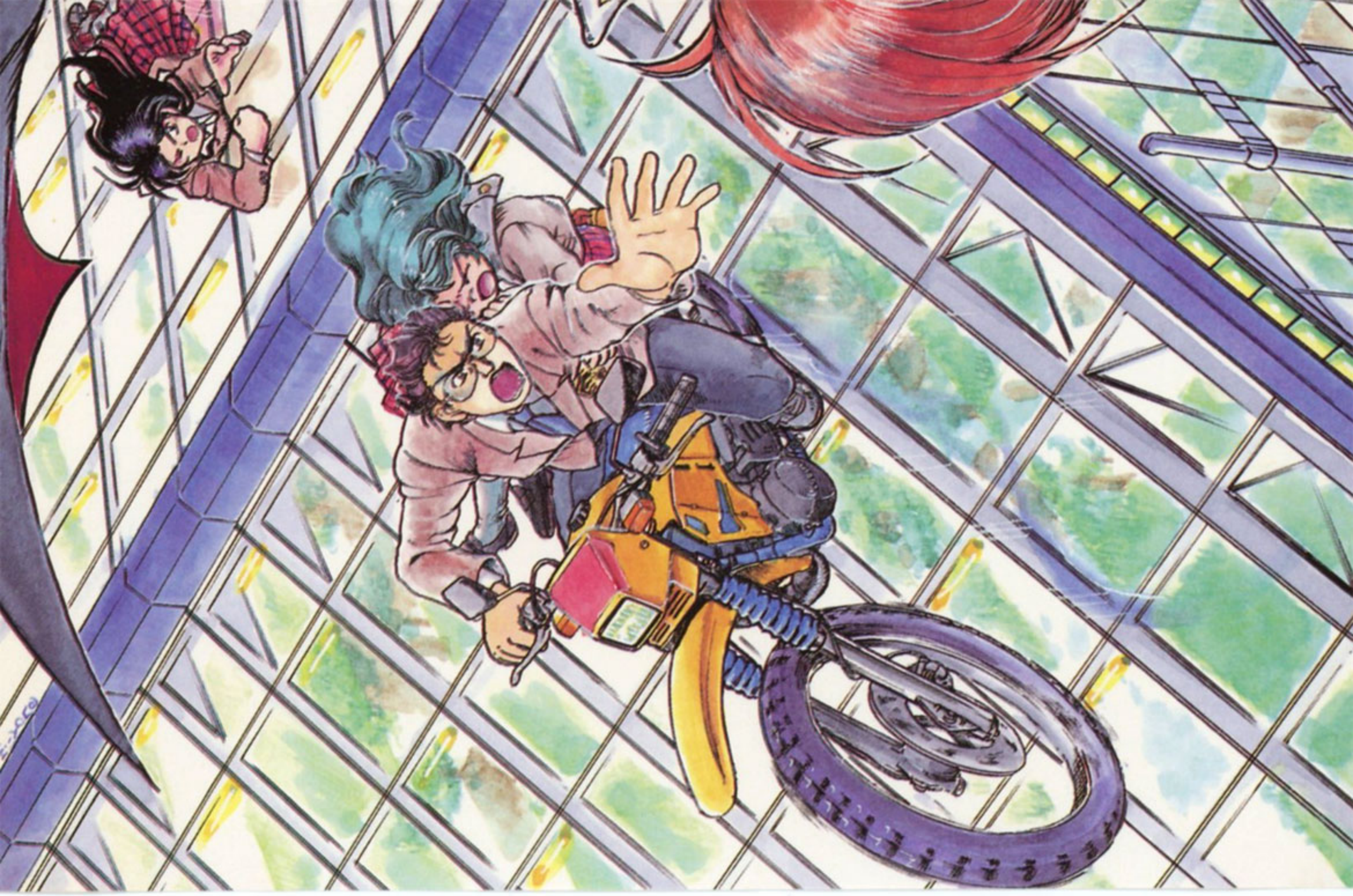
創元SF文庫版　2011年12月刊行

学園祭のその日、世界は変わる。

歴史を変えた四部作を
一九八五年オリジナル版で贈る

カバーイラスト＝D.K
カバーデザイン＝岩郷重力＋WONDER WORKZ。
解説＝小川一水

ハレーション・ゴースト　笹本祐一　創元SF文庫
◆詳しくはこちら◆



ソノラマ文庫

ハレーション・ゴースト

笹本祐一

朝日ソノラマ

椎　米御／ストラ

目次

パターンA　ハレーション・ゴースト　5
パターンB　YOU MAY DREAM　119
ACT・1　予兆――爆発前……120
ACT・2　爆発――目覚めれば悪夢……222
ACT・3　修復――夢の終わり……247
あとがき……277

レギュラー紹介

沖田玲郎　今回の主人公。星南高校の二年生で、文化祭上映用の自主映画の監督もしている。

榊　裕　沖田の同室者。映画のシナリオは彼の手になるものらしい。

真田佐助　十三代目・戸沢白雲斎を自称する沖田の同室者。小柄である。

鳴海つばさ　星南高女子部新聞部部長、学校新聞の鬼編集長で目一杯凶暴である…うわっ、やめろ！　何をする…

小牧ノブ　つばさの同室者。実はエスパーなのだが思い通りに能力が使えず、今回は一度も使わない。

平沢千明　私立探偵。今回は出番なし。

「……！」
声にならない悲鳴が聞こえた。沖田は振り向いた。
「ん？」
額に手をかざして目を見開く。国立（くにたち）駅前の大学通り、寮への帰り道に女の子が一人、立ちすくんでいた。
周囲に黒服の男が数名。統制のとれた動きからしてプロに類する集団であることはまず間違いない。
「誘拐か？」
沖田はつぶやいた。
「この街中で堂々とまあ」
夕刻、そろそろ帰宅や下校する人々で道が込みはじめる時間帯である。沖田はまわりを見回した。
「さて、どーしよー」
だが二度目の悲鳴が響いた時、沖田は買ってきた本の袋を街路樹の根元にほうり出して駆け出した。身を低くして、とりあえず女の子だけかっさらっていこうとした時――
「あ!?」
おかしな具合に風が吹いた、と思う間もなくでかい石が落ちてきた。
「うわあ!?」

沖田は声をあげて急ブレーキで退がった。高度三メートルくらいに出現したひとかかえもありそうな岩は、まるで狙いすましたように正確に三人の男たちの上に落下した。

「……」

大音響とともに、歩道のコンクリートブロックに大岩がめりこむ。

軽く肩をすくめてため息をついた女の子は、何事もなかったかのように歩き出した。状況を理解できずにいる沖田の目の前を横目づかいに見て通り過ぎる。

沖田はものも言えずにその後ろ姿を見送った。女の子は、夕暮れた町へ消えていった。軽い足取りで、まるで踊るように――

通りがいつもの喧騒を取り戻してから、沖田はやっと落ちてきた岩の方へ振り向いた。

「…どうなってやがんだ…」

岩の下敷きになって潰れているはずの男の姿は、いつの間にか消えていた。血のあと一つない。

花崗岩らしい岩は、はじめからそこにあったように歩道に突き立っていた。

沖田は首を振って、投げた本の袋を拾い上げた。ふと思い出して腕時計を見る。

「やばい」

門限寸前。沖田は走り出した。

「遅い！」
寮の４０５号室のドアを開けるなり、一文字手裏剣が尻向きに飛んできた。
「どこで油売っとった！」
「るせー」
上へはじいた手裏剣を受けとめた沖田は、机に背を向けて椅子を回した真田へ投げ返した。
「かーいー女の子がいたんでね」
ついでに買ってきた本を袋の中から一冊抜きとってほうる。
「ったく、ややこしーもん買わせやがって」
「おー我が愛しの戦闘姫よ」
「またしょーもない……榊（さかき）はどした？」
同室のはずの榊の姿が見えない。真田はうれしそうに写真集のページをめくりながら、
「ロケハンで学校の中うろついとる。大温室か女子部にいるんでないか」
「まだ場所決めてないシーン、あったか？」
「それでもカントクかや」
真田がため息をついた。榊の机の上に開きっ放しのレポートを沖田にほうる。
「シーン一八と二四……わざわざ出掛けてった所じゃねェか」
「ラストシーンもだそーな」真田が付け加えた。「原因はＮＧだそーでカントクの命令待たずにスタッフだけで撮り直し決めたよーよ」

「人にラッシュも見せずに…」
「見せる間も与えず消えちまったなー、どこのカントクでしょーね」
「あらま…」
背後からからかけられた声に沖田が振り向いた。
開け放したドアに、榊をはじめとしてカメラをかついだ和田、スクリプト用のノートを持った南部などの映画スタッフ一同が現れていた。
「文化祭まで、あと何日かご存じですかカントクよ」
南部が目を細くして沖田をにらむ。
「ひのふの、あと一週間と二日」
「しかるにフィルムはあと何パーセント必要だ、ん？」
「上映予定四十五分中、あと七、八分てとこだろ？」
「たわけー！」
南部が怒鳴った。和田が続ける。
「新聞部（ぶんぶん）の部屋にまだラッシュの用意してあるから、見るならどーぞ。この前のロケのフィルムがすごくてねー…」
「まァ、シナリオがシナリオだったからな」
「うちの宮崎とお姫さまが笑いすぎて腹痛おこした。内輪受けには最高だがなカントクよ、あんなの上映するんならオレたちゃ夜逃げするほう選ぶぜ」

「で？」
榊がぴらっと一枚の紙を出した。
「校舎の夜間使用の許可とったんだ。使える場所は見つけといたんで夜間撮影に突入しよーとゆーところで意見の一致をみたんだけれども？」
「夜間撮影ね…」
沖田は額に手をあてた。
「ヒロインのご出演は？」
「OKとっといた。九時から正面玄関で」
「終了予定は何時？」
「十二時」
「どーせ朝までかかるんだろーよ」
沖田はイスに腰をおろした。
「また徹夜か…」

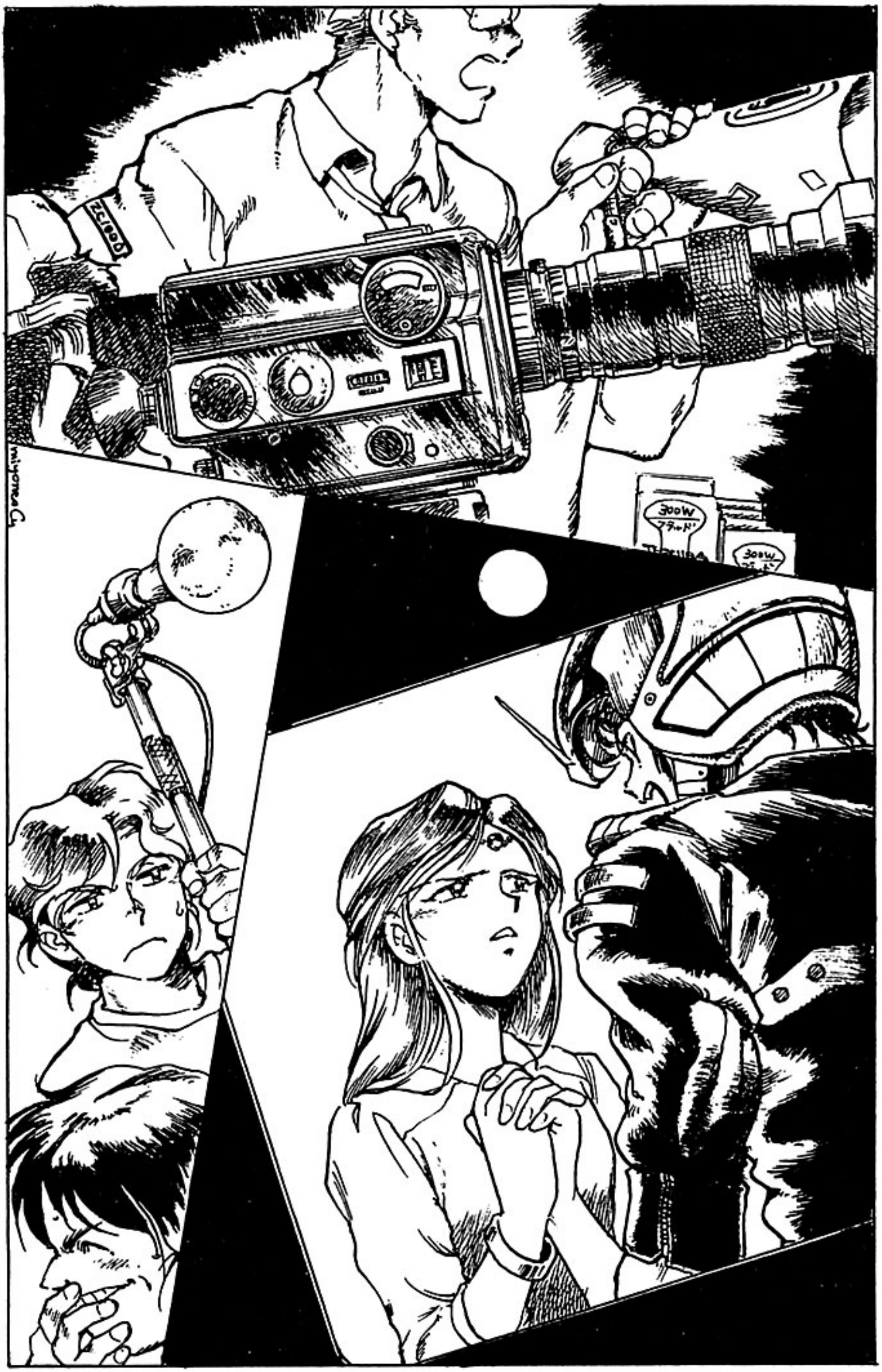
「シーン三二カット4、撮影回数（テイク）……いくつだ？」
「三四だよ、さんじゅうよん！」
「テイク三四、アクション、スタート」
照明を全部つけたうえに自動車部のガレージライトまで持ち出した、女子部寄宿舎、桂木荘の

正面玄関である。和田の8ミリカメラの前で沖田が手製のカチンコを鳴らした。
「ぼくは行かなくてはならない！」
B組きってのハンサムだが、その性格の軽さで有名になっている主演俳優、宮崎が首を落としてカメラに背を向ける。
「ほい、ヒロインさん、フレームイン」
おざなりな沖田の合図で、苦労して女子部からスカウトした姫ことと霧野深雪が宮崎に駆けよった。
「あたしも行く！」
「まだテレがあるな」和田の後ろで榊が勝手なことをぬかしている。「恥を捨てきれてない」
「黙ってな」
カチンコ片手にディレクター・チェアについた沖田が榊をこづいた。
「これ以上、フィルムをパーにするわけにはいかん」
「テイク三四だぜ」ノート片手の南部がシャーペンで耳をこすった。「はじめの十六はフィルム入れ忘れてて、そのあと四つは回し忘れてたけど、それにしても新記録」
「記録ばっかのびても困んだよ」
宮崎の背中にしなだれかかるヒロイン霧野の動きに合わせてカメラごと回りこみはじめた和田を目で追いながら、沖田は頬杖をついた。
「本編かなりカットしないとあかん」

「なーに、いざとなればNG特集で時間かせぎ…」
「とっくにNG特集の方が本編より長くなってんだ。由紀ちゃーん、NG出すんじゃねぇぞー」
「キャー宮崎くん、かっこいー！」
映画撮影だというので見物に出てきた無責任な女子生徒が声をかける。音入れはオールアフレコなので雑音は関係ない。
「帰ってくるさ、必ず」
向きなおった宮崎が、うつむいている姫の両肩に手をかけた。
「あと二十秒」腕時計のアナログ式ストップウォッチを見た沖田は身を乗りだした。「ドジるなよー」
「その間、待っていてくれるかい？」
「何年、待てばいいの？」
姫は顔をあげない。
「二年？　三年？　それとも百年？　時の彼方にいってしまうあなたを、どうやって待てばいいの？」
「くー…」
真田は笑いをこらえて太極拳を踊っている。
「だめだ。何度聞いても耐えられない」
南部は現場に背を向けた。

「姫、よくあのセリフしらふで言えるわ」
「しらふじゃないもん」
榊のそばでシナリオを置いた譜面台に腕と顎をのせて撮影を眺めていた、同室のノブが口をとがらした。
「来る前につばさのナポレオン、アメリカンで飲んだよ」
「へー、あいついい酒もってやがんな」
沖田が感心してうなずく。
「さー由紀ドジるなよー」
「どこからでも、必ず君のところへ戻ってくる」
セリフ棒読みで、宮崎はアゴをひいた。
「たとえ百万年前の原始時代からでも、最終戦争の後からだって、ぼくは君を目指して帰ってくるさ」
姫が、ぬれたような瞳をあげた。アルコールが入っている分、色っぽい。
「あいあい愛しているよ」
「あ、NG」
「かまーねェまわしちまえ！　続けろ由紀！」
どもった宮崎は演技を続ける。
「だから、待っていておくれ」

姫がゆっくり目を閉じた。思わず顔を近づける宮崎――
「カーット、由紀このばかやろう！」
途端に吹き出した姫が、ひょいと身をひねって宮崎の腕から逃げ出した。
「セリフ二つもぬかしやがって！」沖田は、コピーをとじたシナリオを丸めて宮崎に投げつけた。
「何考えてんだ！」
「悪い！」
宮崎が片手でスタッフ一同を拝(おが)む。
「つい本気になってしまった、ははは…」
「あーびっくりした」
姫がくすくす笑いながらクセのない長い黒髪を指ですき流した。
「だいたい由紀由紀ってうるせー」
「だってそうでしょ由紀ちゅわん」
「おれの名前はよしのりだ、ゆきじゃねー！」主演俳優宮崎由紀(よしのり)が喚(わめ)く。「毎度毎度、男一匹つかまえてゆきちゃんゆきちゃん……ん？」
どこからか聞こえてくるカタカタいう音に、一同があたりを見回す。
「なんだ？」
「やだ、地震？」


300W
300W

「地震だこりゃ、見てみ」沖田が廊下に下がっている蛍光灯を指さした。「ゆれてる」
来客用のロッカータイプの下駄箱がカタカタ鳴り出した。
「震度2……3くらいかな？」
フィルムの残りの尺数を見た和田が天井を見上げた。
「長びくかな？」「うわ」「どわ」
本格的にゆれだした。正面玄関が床ごとゆれはじめる。
女生徒から悲鳴があがった。建物全体がきしむような音が聞こえる。玄関の上がり口の隅に置いているダンボール箱から、ほうり込んであったスリッパの大群が踊り出た。
「何だァ!?」
震動音と悲鳴が重なる中で、正面玄関の左側に並んだ下駄箱の扉が軒並みばたばたと開閉する。どこからか地下鉄のような轟音が聞こえる。
「何だ、何が起きた!?」
「地震じゃないのか!?」
「これが地震かアホ！」
ディレクターズチェアから立ち上がりかけた沖田は、二、三度点滅した正面玄関の間接照明を見上げた。
「や、失礼」
廊下でキャーキャー騒いでる女学生たちの間から黒服の男が飛び出してきた。沖田にぶつかっ

て、そのまま玄関から人気のない外へ走っていく。
間接照明があっけなく消えた。のみならず、バッテリーを使っているはずのガレージライトまで消え、瞬時にしてあたりが闇に閉ざされる。
「うっせー」
女の子のカン高い喜んでいるような悲鳴と騒音に、沖田はこめかみに指をあてた。
「動くなバカー！」「キャー、えっちぃ」「誰だこの！」「わあ、さわるな」「こら足ひっかけた」
「おー、誰!?」「ただ今照明故障のため、画像をお伝えできません」
だしぬけに轟音が途切れた。まるでスイッチが戻ったようにガレージライトが眩(まぶ)しい光線を照らし、蛍光灯がいっせいに点灯する。
「何だ？」
玄関一杯にスリッパが散乱していた。下駄箱の扉が半分くらい開いたままで、女の子も床にへたりこんでしまったのがいる。
「結構でかかったな、今の地震」
沖田の後ろから南部がぽんと肩をたたいた。沖田はひとわたりあたりを見回した。
「一応無事か」
「うん、一応…」
玄関の真ん中に立っていた霧野深雪が振り向いた。
「由紀の奴はどこ行った」

「ここ」
玄関の外から血の気の失せた顔で宮崎はよろよろと現れた。
「おれ地震てだめなんだ、外ゆれてなかったから」
「情けない奴。他は？」
「大丈夫でしょ」
倒れた譜面台の横の榊が、しっかり背中にしがみついているノブに首を回した。
「ツメたてないでおくれ、終わったから」
「ほ、ほんとに？」
ほとんど体を硬直させたままノブが顔をあげた。
「あー、びっくりした」
「ったく何て地震だよ」記録（スクリプト）ノート片手の南部がガレージライトへ歩いていく。「地震くらいで停電しやがって」
「バッテリーが停電するか」
「接触ズレたんだろ」南部はざっとライトとバッテリーをチェックした。「おーし、異常なし」
「そんでは」
沖田は足元に散らばったスリッパを拾い上げて、横になったダンボール箱の口へ放りこんだ。
「早いとこ片づけて残り撮（と）っちまおー。しかし……」
ダンボール箱のそばにいた真田が箱を元の位置に戻す。沖田はあらためてあたりを見回した。

「見事に散らばったなー」
たかが地震なのに、まるで箱ごとばらまいたように備品のスリッパが散らばっている。
「困ったもんだ」

「オーケー、本日の分上がりー！」カスタネットみたいにカチンコを鳴らして、沖田が言った。
「おつかれー」
「終わったー！」
妖怪のホルマリンづけだの人体標本や色褪(あ)せた剝製(はくせい)、骨格標本エトセトラが雑然と並ぶほこりっぽい理科標本室に、スタッフ一同のときの声があがった。
「何時だ今。四時？　すぐずらかって寝よう」
「後片づけしてからねー」
さっさと自分のディレクターズチェアをたたんで標本室から出ていこうとした沖田の襟(えり)に、南部が手をかけた。
「ライトとバッテリーと反射板、しっかり格納庫に戻そーね」
「……」沖田はげんなりした顔でメガネをはずした。「オッケー、やりましょ」
「おら野郎ども始末にかかれー」南部が声を張り上げる。「早くせんと今日も眠れんぞー！」
「あ、女の子すぐ帰っていい」
ヒロイン役の霧野深雪をはじめとするエキストラや付き添いのグループ(やじうま)が身の回りのものを持

って、あいさつしながら次々に退却していく。
「こら、コードを踏むなー」「早いとこたたもーぜー」「眠いよー」
午前四時を過ぎて軽くなった脳みそを振りつつ、男どもがだらだらと作業をはじめる。
女生徒と入れ違いに、白衣を着た、いかにもマッドサイエンティストという雰囲気を漂わせた細身の男が入ってきた。去年の冬に人工地震の実験と称して学園の裏山にちょっとしたクレーターを作って以来有名になった自然研大幹部の一人、マッドの仇名(あだな)で知られる松田である。
「こっちはやっと終わりかい」
「そだよ」
隣の第二、第三実験室をぶちぬいて文化祭の準備をしている自然研のマッドのグループのおかげで標本室に入れた沖田が軽く手をあげた。
「そっちは？」
「まだしばらくかかるよ。ぼくはコバルトの試料を取りに来たんだ」
「コバルトね。原爆でも作るのかい」
「コバルトでは原子爆弾は作れない。ちょっと失礼するよ」
あっちこっちにぶつかりながら、マッド松田は映画スタッフのガレージライトのスタンドをたたんでいた南部が声をかけた。
「さっきの地震でここ無事だったか？」
「地震？　何のことだい？」
間を歩いていった。

いつも通りのおっとりした物言いで、松田は訊き返した。
「知らない？　うそだろ、十一時ごろえらいのがあったろが」
「知らないなあ、そんなに大きい地震だったのかい？」
「かなりすごかったよ」と榊。「停電するわ、スリッパは散るわで」
「お得意の地震計は？」沖田がライトをよっと肩にかついだ。「女子部にも、校舎と寮に設置してあるって聞いたが？」
「そんな地震は聞いていないなあ」松田は首をひねった。「すぐ地学班から連絡が来るはずなんだけどなあ」
「自然研も意外に鈍いんね」真田はたたんだスタンド類をまとめて立ち上がった。「あんな地震気がつかないなんて」
「先、上がってっぜ」
和田は沖田がかついだスタンドの下をくぐりぬけた。沖田は呼び止めた。
「今日の分、いつごろ現像できる？」
「朝一番で写真部にほうりこんで、放課後には見れる、多分」
「学内で写真屋開業してると便利だな、ほんではドクトル松田、使用許可あんがとよー」
「どういたしまして」
松田は大仰に胸に手をあてて軽く頭を下げた。
そのとき、どこかで羽音がした。

「…ん？」
半ば無意識に音の源（みなもと）を見上げた沖田は、大きな鳥が羽ばたいたのを見て納得して、標本室から出ていこうとした。
「…え？」
棚の上の始祖鳥かハーピイみたいな大型の鳥の剝製（はくせい）が動いたように見えた。沖田は振り向いた。
「…ああ？」
寝不足の眼が、鳥が飛ぶのを見ていた。おい標本が逃げるぞと言いかけて、沖田は正気に戻った。
「うわあ！」
台のはずれた剝製が、松田と沖田の間に落ちてきた。
奇妙な静寂の中で、二人は顔を見合わせた。変色した羽根が二つ三つ、ひらりと落ちていく。
沖田は額に手をあてた。
「いかんな、寝不足がたたってるらしい」
「うん、相当疲れてるようだ」
と、これは松田。
「ろくな置き方してなかったんだろー」真田は剝製ののっていた年代物の棚を見上げた。「早いとこ帰ろう」

「えーっと、どうするこれ？」
沖田は足元の剝製を指さした。
「やっとくよ」
松田は腰をかがめて剝製の鳥をとりあげた。
「そんでは、おあとよろしく」
沖田は理科標本室を後にした。

「……」
「起きろっての！」
「すぴー」
「何かすぴーだこの！」
「すかー」
「たァけー！」
一時間目の休み時間、前の授業だった数学の教科書を顔にのせて窓ぎわの席で寝ていた沖田は、真田に本を飛ばされてうす目を開けた。
「ここはどこ？　わたしはだれ？」
「あのな…」真田は頭をかかえた。「ここは江戸城中、大奥にございまする、お姫（ひい）さま」
「さよか」沖田は目を開けた。「して何の用じゃ、じい」

「市中に面妖なうわさが流れておりまする」
「やってろ」
沖田の前の席の榊は、つまんなそうに前向いて肘をついた。
「如何なうわさじゃ、ゆーてみ」
「は、実は昨夜の地震でございますが」
「どったの？」
「和田から聞いたんだけどね、桂木荘だけしかなかったんだと」
「なんだそれは」
沖田はやっと真田に体を向けて座りなおした。
「学内に大学もあわせて九つ地震計あるけど、十一時二十分に震度3の地震記録してんのが桂木荘のやつしかなかったそーだ」
「なんだそれは」沖田はわずかに身を乗り出した。「あの地震があったのは桂木荘だけってことか？」
「そう。記録には確かに残ってんだけど、昨日は震度0のがちょぼちょぼあっただけで……えーと」
「シロートが情報屋やるんじゃないの」
真田の背後からカードの束を持った和田がぬーっと現れた。
「不覚、バックとられた」

「ほれ、忍びは情報収集だけやってるの」
「拙者はお庭番か」
「校庭番とゆーべきだろーな」
「地震はどうした」
沖田が訊いた。
「えーと、これだ。桂木荘玄関脇の地震計によると二十三時二十分十一秒の地震はP波だけで、震度3を記録、これが一分七秒続いた」
「P波って何？」
「あっ、拙者、理系苦手」
「初期微動の縦ゆれだけで本当の地震がなかったってことだろ」
沖田はひざに肘をついて額をのせた。
「ただの地震じゃねェな」
「なにせ地震を計測してるのが桂木荘だけなんで、震源地の割り出しもできないって自然研が悩んでるぜ」
「そら悩むわ。桂木荘だけの地震ねェ」
「そんなのあんの？」
「あんでないかい、たまには」
「あるか！」

沖田は榊と真田を一喝した。榊は肩をすくめて、
「んじゃ、ありゃ何だったんでしょーね」
「…由紀ちゃん妙なこと言ってたな」沖田が考えこむ。「外ゆれてなかったとか…」
「何それ」
今度は榊が沖田に向いて座りなおした。
「玄関が地震になったから、外がゆれてないんで飛び出したって言ってた、確か」
「そんなのあるかよ」
「本人に訊きゃいい、おーい由紀ちゃーん」
「うるせーっての」
ほどなく、本業の演劇部の台本を片手に宮崎が来た。
「なんか用か？」
「昨日の地震だが…」
「あーっ、やなこと思い出させないでくれ、おぞましい」
宮崎が頭を押さえた。
「震度3、ぐらぐらーっと」
「うわあ〜〜〜」
「電気停まって、スリッパが飛びまわって」
「やめてくれー！」

榊と真田が面白がって机をゆらす。沖田が宮崎の腹に軽くストレートをくらわした。
「のるなアホ」
「いや精神外傷（トラウマ）がねー。で何？」
「お前、昨日の地震で玄関から出たろ」
「うん。外ゆれてなかったから」
言ってから宮崎自身も自分の言ってることのおかしさに気がついたらしい。顔をしかめて、
「玄関の外はゆれてなかった……どういう訳だ？」
「知るか」
沖田はくるりと体を回して窓に向いた。空を見上げる。
「あの地震…P波だけで終わったおかしな地震は、桂木荘にしかなかったってことだ。ここの地殻どーなってんだよ」
授業開始を告げるチャイムが鳴り出した。
「次の授業何だっけ」
榊が幾分低い声で訊いた。
「古文」
空を見上げたままの沖田の返答で、集まっていた一同がのろのろと自分の机に戻っていく。
沖田はため息をついて、机の中をひっかきまわしはじめた。
「…ん？」

視野の片隅を人影がかすめた。沖田は視線を外に向けた。
窓の外を、見覚えのある横顔を見せて女子部の制服の子が通り過ぎた。
「サボリか」
手もとに視線を落としてから、沖田はあわてて顔をあげた。
――岩落とした女の子だ！
ぱっと外を見る。今度は黒服の男が一人、帽子を押さえて窓の外を駆けていった。
「うわあ!?」
沖田は思わず立ち上がった。血の気が音をたてて引いていくのがわかる。
「どうしたね、沖田君？」
いつの間にか教壇に立っていた骨董品級の古文教師――のみならずクラス中が沖田を見ていた。
「あ…いえ…」
沖田は頭を振って腰をおろした。
――この教室、校舎の三階だぞ…。

『最終戦争の後からだって、ぼくは君を目指して帰ってくるさ』
宮崎の横顔から横にPANした画面が姫の長い髪にふちどりされた愁眉を捉える。回りこんで姫の正面アップ。

『あいあい愛してるよ』
画面に背中の一部だけ入っている宮崎のどもったセリフが入った。申し訳程度に同録した音なので、録音状態は悪いわ雑音は入っているわ私語は聞こえるわで、かなり賑(にぎ)やか。
「うーん、やっぱりお姫さまカメラ映りいいわあ」
撮(と)った当人の和田がうっとりと画面をながめている。
「由紀ちゃんさえいなければ、ソフトフォーカスに紗かけて、瞳キラキラ、バックに花しょわせるところよ」
「少女マンガじゃなあい！」榊が喚く。「これは絶対バックにプリズムかけて、ビデオ処理でコマ撮りしてモノクロ画面にするべきだ」
「似たよーなもんだ」沖田が手を振る。「ようするにガキ映画じゃねェか…ん？」
画面が妙な感じにブレた。入れ替わるように玄関内の全景(ロング)になる。
「なんだこりゃ？」
ゆれる蛍光灯、開閉する下駄箱、乱舞するスリッパなどが次々に横ＰＡＮで画面に入ってきた。あわてるスタッフ、悲鳴をあげるギャラリーの女生徒たち。
「なんだこれは？」
言ってる間に画面が白くなり、映写機のリールがからまわりをはじめた。
スイッチを切った和田が、４１２号室の蛍光灯をつけた。白い無機質な光が、闇に慣れた目にまぶしく入ってくる。

夕食後、映画制作のメインスタッフを集めた前日撮影分のラッシュ上映である。
和田が十五センチリールを映写機から外した。
「最後のはフィルムが余ったんで謎の地震の実況撮影」
「またしょーもないことを…」
「ちょい待ち」
映写面に使っていた白い壁を見たまま何か考えていた榊が、和田に声をかけた。
「今のラストの、スロー再生できる？」
「ビデオじゃないっての。…できるけど？」
「んじゃ、やってみて。おかしなもんが映ってた」
「南部あかり頼む」
「あいよ」
「んとに、めんどいことやらせて…」
ぶつぶつ言いながら和田がフィルムをわずかばかり逆転させた。
「どれくらいだ？」
「ラスト二、三秒でいい」
「んじゃいくぞー」
再び暗くなった412号室の壁に、地震の実況撮影の静止画面が映し出された。フィルムが終わる寸前の、玄関に後ろ姿で佇(たたず)む姫の全身である。

「いくぞー」
かったるそうな和田の声とともに、姫がコマ送りでゆっくり振り向きはじめる。腰まである長いストレートヘアが首の動きをゆっくり追いかける。
しばらくして榊は声を上げた。
「ストップ！　……やっぱり。オーケイ、いって」
「何だよ、一体」
斜め左でとまっていた姫がぎこちない動きでカメラに顔を向ける。
「うえ」榊が妙な声をあげた。「もういいや……これ何コマ撮り？」
「秒二四コマ。どした？」
「逆転できる？」
和田は映写機を止めた。
「写真部や映研の奴ならできんだけどね、これはできない。どーすんの？」
「じゃ、もう一度頼む」
「めんどいって言ってんのに…」
ぶつぶつ言いながら和田が映写機をいじった。
「何だってんだ？」
南部が訊く。榊は暗い中で肩をすくめた。
「今度教えたげるよ」

「いくぞー」
映写面に霧野深雪の横顔が映った。ゆっくりこちらを向きはじめる。
「ストップ！　ここだ」
「うわあ!?」
沖田が声をあげた。
「なんだ？」
なんだなんだとばかりに、一同が画面に身を乗り出す。別に変わったところは――
「霧野さんのバックの玄関、ガラスの右側…おわかり？」
女の子が一人、ガラスの向こう側からひざに手をついて中を覗(のぞ)いている。
「あ…あ…」
沖田が後ずさりするように椅子にかじりついた。
「あれがどーかした？」
「和田、ゆっくりフィルム進めて」
「あいよ」
女の子はゆっくり立ち上がった。肩をあげて――
次の瞬間、全員が絶句した。
「何だ今の？」
「撮影のミスじゃないんか？」

「ライトが反射しそこねて…」
「和田、もう一度だ。今度はノーマルスピードでやってくれ」
沖田がかすれたような声で言った。
画面に、姫の横顔を見せた後ろ姿が映った。それがなめらかな動きでこちらを向く――
コマ落としのような形で、注意して見ていた画面の一部分に女の子の残像が一瞬だけ映った。
「消えた…」
「榊よく気がついたな」
南部が感嘆する。
「あんな少ししか写ってないの」
「写ってるのは三コマだけ、1/8秒だけだよ……最近の速いアニメ見慣れるとねー」
「〇・一二五秒……何者だあい？」
沖田は白い光だけになった画面を、息を殺してにらみつけていた。
「岩石落としに三階の窓の外通りすがって……今度は一瞬だけ現れやがった」
「幽霊だあー」榊が裏声をあげる。「和田のカメラにゆーれーがとりついたあー」
「幽霊なわけあるかー！」
和田はカメラのスイッチを切るなり、リールを取ってフィルムをひっぱり出した。南部が乱暴にあかりをつける。
「ちょっとルーペ貸して」

細いフィルムを空にかざした和田が手を出した。
「見えるか？」
南部が和田の机の上のバカでかいルーペを渡してやる。
「いるわ」
ルーペごしにコマを拡大して見た和田が手をおろした。
「三コマだけ写ってやがる……ホントゆーれーかよ」
「幽霊だとすれば、あの訳のわかん地震も説明できる」
もはや確信しきった顔で榊が納得する。沖田がぶっきらぼうに言った。
「ゆーてみ」
「あれポルターガイストだったんだ」
「何？　ドクターポルター？」
「ポルターガイスト！　騒霊現象、映画にもあっただろう？」
「何それ？」
「よーするに幽霊が騒ぎまくるんだよ。誰も触ってないのにスリッパが踊ったり、下駄箱がバタバタしたのもそのせいだ」
「…なんだそれは…」
沖田は顔をしかめた。
「心霊現象の一つでね、幽霊のイタズラみたいなもんだけど」

ドアがいきなり乱暴に開いたのはその時だった。
小柄な影が疾風の如く部屋に飛びこんでくる。あっけにとられている男どもを見回して叫んだ。
「やっとみつけた！」
「出やがった」
低い声でつぶやいた沖田は、両手をたらして椅子ごと背を向けた。窓から星空を仰ぐ。
「何の用だ、つばさめ」
「何の用だじゃない！」
喚いたつばさと沖田の一直線上を避けて、４１２号室内の榊らが両側の壁ぎわへ逃げる。
「ちょっとお邪魔するわよ」
「は、どうぞ」
ちらっと和田を見て言ったつばさに、和田は思わずうなずいていた。
軽く部屋にあがったつばさは一直線に沖田の方へ歩いていった。
「ちょっとこい、この野郎」
そっぽむく沖田の右耳を、むんずとつかんで引っ張る。
「あたっ、何しやがんだこのやろ！」
「顔貸せって言ってんのよ、ボケ！」
つばさは沖田の耳をつかんだまま引っ張っていく。

「何が起きたんだ？」
無理矢理ひきずっていかれる沖田を見送った榊が訊いた。真田は首を振った。
「さあ」
「あんたのおかげでえらいことになってんのよ！」
つばさは叫んだ。
「黙ってついて来なさい！　大温室で姫がひどいことになってんだから！」
「事情を説明しろー！」
つばさの右手を振り払うなり、沖田は逆にその手をねじり上げた。
「来りゃわかるわよ！」
スカートも顧(かえり)みずに、つばさは沖田に回しげりをくらわした。色気もくそもない。
「うは」
手をはなした沖田が、身を沈めてよける。
「夕食終わったら大温室で撮影するはずだったんでしょ！」
体を回したつばさは、今度はローキックを繰り出した。
「それがどーした！」
沖田はひょいとジャンプしてよける。
「あんたらがぐーたらしてたおかげで、姫がさらわれちゃったんだから」
「さらわれたァ？　ウ…」

思わず動きの止まった沖田のみぞおちに、思いきり深く踏みこんだつばさの右ストレートがめりこんだ。
「おい」沖田がきつく片目をつぶって顔をしかめる。「まさかまたヘリでも飛んできたんじゃ」
「んなんじゃないわよ」
右のこぶしをしげしげと眺めながら、つばさが言った。
「とにかく早く来いー！」
「和田カメラ忘れんな！」
ひきずられだした沖田が、片手で腹を押さえたまま指示をとばす。
「南部ライト持ってこい！　榊、航空部からサーチライト借りてあっただろ、あれ持ち出せ」
「はあ…」
「つばさ！　誘拐犯人どこにいる!?」
「まだ大温室にいるわよ！」

星南の大学部と高等部の境にあたる位置に、大温室がある。
学祭準備期間中のため灯が入っているので、ばかでかいガラスの城が夜空にあざやかに浮かびあがっている。暖房完備のその中はスポーツ部が雨天のロードワークに使用するほど広く、熱帯から温帯くらいまでの植物が所狭しと詰まっている。
最大樹高四十メートルに達するジャングルには、怪花ラフレシアからマンドラゴラ、食肉植物

トリフィドまであるという。その間をそれこそ縦横無尽に通路や空中回廊、キャットウォークが三層から四層、場所によっては六層くらいまで駆け巡っている。うそかホントか、毎年五、六人の行き倒れや行方不明が出るというその大温室の輝く壁面を見上げた沖田はため息をついた。

「その誘拐犯人とやらはどこにいるんだ、あん？」

「ノブやミアが追っかけてるわよ！」

背後のつばさは一枚ン万円のガラスの壁を見上げている。

「追っかけてるのはいーけどな、つばさ、おまえ大温室（ここ）の別名ご存じない？」

「ぐっちゃぐちゃと何が言ーてーんだ、てめェは！」

「迷宮っての、有名でしょ」

「早く行け！」

「へーへー。んではヤローども、いざ討ち入りじゃあ！」

「うおーっ」

ときの声をあげて一行は大温室内に突入した。

「んで、現場はどこだ？」

「こっち！」

先に立ったつばさが、カンなのか確かなのか、入ってすぐの細い螺旋（らせん）階段を駆け上がっていく。

もわっとした緑色の空気と温室内の昼の余熱で、あっという間に真夏の炎天下のような汗が吹

き出す。
目的地に向かうというより、追っ手をまくような道を通って三層目あたりの回廊に出た。
「場所わかって走ってんだろうな」
「当然でしょ！」
大きな枝を張り出したマングローブの角を曲がった所で、つばさは急ブレーキで止まった。後に続いていた男どもが止まりそこねて次々に追突する。
「急に止まるなバカー」
「やっと来てくれた」
顔を上げた沖田の眼に、何人かの女生徒と、その向こうの人影が映った。
「！」
妖怪じみた殺気が、暑いはずの空気の温度まで下げている。沖田は女の子たちを突き飛ばすようにして前へ出た。
「下がってろ！」手で後ろの女生徒に指示する。「こいつ並の奴じゃねェ」
ベルトにさして来た特大サイズのモンキーレンチをかまえる。幅二メートルくらいのキャットウォークの突き当たりに立つ男に、沖田は一歩踏み出した。
「何者だ！」
失神しているらしいぐったりとした霧野深雪をわきにかかえた長身の外人らしい男は、ぞっとするような青い目で沖田を一瞥した。二言三言、バリトンで何か喋る。

「なんだ？」横にきた南部が視線をはずさずに沖田に訊く。「英語か？」
「さあ？」もっぱらブロンクスなまりの米語（スラング）専門の沖田は首をひねった。「よくわからん」
長身に黒マントを羽織った男が、また何か言った。血の気のない、銀髪をオールバックにした年齢のよくわからない男である。
「どーせ外人の中年ロリコンだろ」
脚をたたんだライトスタンドを片手に、南部が体を低くした。
「早いとこ片づけて終わらせよう」
「そうしよ、真田」
「ほーい」
「手裏剣持ってんな。適当に狙ってやってくれ。んで投げると同時に…」
「飛び出してぶちのめす、と」
背後でそれぞれ得物を持って控えてる連中に南部が飛びかかるジェスチャーをした。
「では、用意（レディ）」
沖田はレンチをひいた。
「スタート！」
深雪をかかえた右手と肩、それに脚を狙った真田の一文字手裏剣が飛んだ。同時にマントめがけて男どもが一斉に飛びかかる――
次の瞬間、マント男は信じられないような素早い動きを見せてジャンプした。片手に深雪を抱

いたまま五メートルも飛び上がって、一階層上のキャットウォークの手すりに片手でぶらさがる。
「何ィ!?」
体をゆらしてはずみをつけて、手すりを越えてキャットウォークへ降り立つ。男は靴音も高くマントをひるがえして駆け出した。
「何だあれは」
沖田はばかみたいに口を開いて見送った。榊がこれも唖然としたまま、
「どっかのサイボーグか？」
「…まさか…」
真田が自然に言い淀む。沖田はきっとなって真田をにらみつけた。
「言いたい事はわかる。けど絶対その言葉ゆーなよ。もーあんなのと事構えたくねェからな」
「何ボサッとしてんのよ！」
つばさの叫び声で、男どもは我に返った。
「と、とりあえず追っかけろ」
沖田が靴音の方向を指さした。
「あれだけ派手な奴なら簡単には見逃せない、どこでもいいから追いつめろ！」
わーっとばかりに男女あわせて十数名が駆け出す。沖田は一緒に行こうとした南部の袖をつかんだ。

「自動車部（おまえんとこ）ＲＨが入ったって言ってたな」
「ＲＨ２５０？　あれがどかした？」
「貸せ」
沖田は南部を引っ張って走り出した。
「女の子抱えてあんなジャンプする化け物だ、生身の人間が追っかけたって逃げられるに決まってる」
「じゃ、おまえ、あのモトクロッサー大温室（ここ）ん中乗り入れるつもりか!?」
「俺が勝手に乗り出したことにしとくから」
「おもしれー」南部も走り出した。「つきあうぜ。今度ＲＺにニトロ装備したんだ、テストついでに行こう」
「ニトロだ？　３５０Ｒにニトロ組み込んだのか？」
「なんたって一六〇キロから前輪が浮くからねー」
「……」

自動車部のアジトになっている男子部校舎脇の大倉庫――通称〝格納庫〟から、二台のバイクが飛び出した。派手なウィリーで校庭を突っ切り、大温室に向かう。
かたやスズキＲＨ２５０、百キロちょいの車重に、レース用のエンジンを申し訳程度にデチューンした三五馬力を積んだ、ほとんどモトクロッサー。操るは沖田である。

もう一台は南部のＲＺ３５０Ｒ。あみだでとはいえ自動車部の部長（アタマ）をやっている南部の愛車で、当然ノーマルではない。外観で目立つのはクロスチャンバーとタンデムシートの脇の小型ボンベくらいなものだが、エンジンを中心にフレーム補強までお手製のチューンがしてあるというカッ飛びマシン。これにホットロッドが使うような加速力強化用のニトロボンベを積んだのだから速いことは速いが、パワーがありすぎるためにフレームが負け気味でかなり怖い。南部本人はニコバッカーのアルミフレームを切望しているがもう一台新車が買えそうな高価なフレームに手が出るわけがない。

パワーでＲＨを大きく上回る南部のＲＺＲが、先に大温室の車椅子用スロープを駆け上がった。正面入り口でたむろっていた連中がカン高い二ストエンジンの金属音に驚いて左右に散る。

「さーてどこだ」

手袋（グラブ）はしているものの、ヘルメットはかぶっていない南部が、大型の太陽灯がついている天井の梁（はり）を見上げた。

どこからか、悲鳴と怒号の入り交じった声が聞こえる。

「こりゃいいや」

南部の隣にバイクを止めた沖田が、これもノーヘルで声のする方を見上げた。

「あの騒いでるの、うちの連中だろう」

沖田はフロントを大きく上げてバイクをスタートさせた。手近の広い階段へ加速して腰を浮かせて登っていく。

「おーなんとステキなサスペンション」
「よっはっとっ」
もろ舗装道路用マシンの南部は、むりやり車体をおさえこんで登ってくる。
上がりきった所でのアクセルターンで居合わせた女生徒に悲鳴をあげさせて、沖田はせまい回廊を騒ぎのする方へ走り出した。
「待てこの！」
南部はブレーキかけすぎの二輪ドリフトで沖田を追う。グリップの悪い金属製の床面でバトラックスが空転する。
「えーい、食いつきの悪い！」
ホイルスピンで尻を振りながら回廊を加速する。
大温室の外周の回廊から、沖田はカウンターをあてて直交するキャットウォークに突っこんだ。
「どけー！」
「うわっ」「キャー」
キャットウォークにつまっていた映画スタッフ、エキストラ及びその付き添いにどたばたやってるうちに加わったヤジ馬どもをかきわけて、沖田は前に出た。
「BGMが欲しいとこだな」
「どこ遊んでたのよ！」

脇の手すりにしがみついたつばさが息をきらして喚いた。沖田は正面の黒マントをにらみつけて、

「拍手くらいしてくれ、せっかくのヒーローの登場だぜ」

「同じく南部君登場」

クロスチャンバーの排気音も高らかに、沖田のＲＨの後ろに南部が現れた。

「またえらいもん持ちこんできたのー」手裏剣片手の真田がＲＨとＲＺＲを交互に眺める。肩を上下させながら、「まあこれくらいでないと、あのおじさんまともに相手にできないけど」

キャットウォークの先に、この暑い中で汗ひとつかかずに黒マントが立っている。

「あんなむさくるしータキシード着てさ。深雪さん体重いくつ？」

訊いた真田に、つばさが思わず答えかけた。

「四十……バカ！　知らないわよ！」

「四十何キロの女の子抱えて走り回って息ひとつきらしてない。あれ化け物だぜ」

「化け物ね…」

沖田はエンジンを吹かした。

「ではミスター化け物、覚悟！」

いきなりクラッチをつないで急発進した。

「〜〜〜〜〜！」

また何か訳のわからない言葉を叫んで、黒マント氏は飛び下がった。

「待ちゃーがれ！」
南部が後を追う。後に残るは排気煙ばかりだ。
「お達者でー」
真田が手を振って黒マントを追う二台のバイクを見送った。スタッフ一同がどっと休む。
「おい」
榊が真田の背をつついた。
「今ドラキュラって言わなかった？」
「何！」
「カウントドラクラって聞こえた」
「ドラクラ数えんの？」
「カウントって確か伯爵って意味だ」
顎（あご）に手をあてて考えこむような姿勢のつばさが、手すりにもたれかかった。
「…と、ドラキュラ伯爵？」
二スト単とパラレルツインの排気音が遠ざかっていく。
榊と真田のジト目に気がついたつばさは、はっとして顔をあげた。
「うそ！　忘れろ、何にも言ってない！」
「ドラキュラねー」
「ひっひ、いーこと聞（き）ーた、校内新聞の現実主義編集長（リアリスト）が吸血鬼ドラキュラだって」

榊が笑い出した。
「誰が言い出したのよ！」
「だって、そー聞こえたんだもん」
「じゃ、どーして平気な顔をしてあんなに動きまわれんのよ！化け物だって言ったの真田(てめえ)だろ！」
「はい、確かに人間離れした体力ではございますけど」
笑いを無理にこらえた真田がうなずいた。
「女の子抱えてこの大人数の追跡平気でかわしたもんね。今だってバイク二台から逃げ回ってるし」
「確かに人間離れはしてる」
三人は顔を見合わせた。つばさが、
「やっぱり人間じゃないの？」
途端に榊と真田は吹き出した。
「吸血鬼だって」
「ひー、つばさ最高のギャグ！」
「ふんだ！」つばさはそっぽを向いて走り出した。「こーなりゃ、最後までつきあって正体確かめちゃる！」

「なんて奴だ」
熱帯性のシダ林の中を一直線に延びる通路を走りながら沖田はつぶやいた。
「六〇キロ出てんだぞ、こっちは」
葉や枝が通路に乗り出すように密集しているため、スピードがやけに速く感じられる。その先を、丈の長い黒マントをひらめかせて、男はそれこそ飛ぶように走っていた。もちろん、霧野深雪を抱えたままである。
「あいつ人間か！」
後続の南部が喚いた。
「加速装置でもつけてやがんだよ！」
無責任に沖田が叫び返した。
「核弾頭でもブチ込んだれ。うへ！」
先を走る黒マントが消えたように見えた。
「んなろ！」
左の螺旋階段に入ったらしい。沖田はブレーキをかけてリヤをわざと滑らせながら狭い螺旋階段に突っこんだ。
「うわーい」
腰を浮かしてハンドルを一杯に切る。後を追う南部は寸前で急停車した。
「RZじゃ、ンな所入れんぞー！」

「他回れ！」
震動とともに渦まいて降りる沖田が喚いた。
「挟みうちだ！」
「了解い！」
階段を降りきった所で、底なしアマゾンの別名を持つ湿地帯に出た。最下層の、泥地帯のすぐ上を通るキャットウォークのかなり先を黒マントが走っていく。
「逃がすか、この！」
アクセルターンで車体の向きを変えてウィリー気味の急発進。根と、葉だけが立っているニッパヤシの間を一直線に加速する。
「ん？」
道の中ほどでぽつんと水面を見ている、どこかで見たような女生徒が眼に入った。
「そいつを止めてくれ！」
とりあえず声をかけてから、沖田はまずいかと思った。時速六〇キロで走る人間を捕まえようと思っても、跳ねとばされるだけかもしれない。
声に気がついてこちらを向いたその子は、突進してくる黒マントにびっくりしてあわてて反対側の手すりへ飛びのいた。
一陣の烈風くらいの速度で黒マント氏が駆け抜ける。
「うわい！」

バランスを崩したその子が通路のど真ン中によろけ出てきた。
「ぶつかるー！」
「キャア！」
沖田はとっさに急ブレーキをかけた。車体を横滑(すべ)りさせて寸前でやっと停止する。
「ケガないか」
女生徒が顔をあげてうなずく。
「なら、悪いけど今忙しいからまたあとで…あ――」
沖田の視線が彼女の顔に釘付けになった。いくつかのシーンが頭にスパークする。岩石落とし、三階歩き、三コマ撮り――。
「おまえ、誰…」
「あれ、ドラキュラです！」
彼女はせっぱ詰まったセリフで沖田のセリフをぶった切った。
「何だって？」
「あれ、吸血鬼ドラキュラ。本物！」
「ドラキュラだ？　ドラキュラって、あの……あれか？」
沖田がキョトンとして訊き返しているうちに、黒マントは通路の突き当たりからUターンして戻って来た。後を追うように南部のRZRが出現する。
「追いつめたぞー」

「お、とりあえずその話あとで。ちょっと待っててな」
沖田は女の子をどかしてバイクごと前に出た。
RHとRZRに挟まれた形で、脇に霧野深雪を抱えたまま黒マントが立ち止まる。血の気のない顔の冷たい目の光が沖田を射る。
「はん」
沖田は上を見た。二階層くらい上にキャットウォークが直交しているくらいで、上へ跳んで逃げることは多分できない。
「いーかげん観念しよーね、おじさん」
沖田は男を威嚇(いかく)するようにゆっくりとエンジンの回転をあげていった。
「南部、ゆっくりと前進だ。とにかく姫だけ先に取り戻そう」
「了解」
南部はRZRを動かしはじめた。沖田もあわせて黒マントにじわじわと近づいていく。
「三つ数えたら突っ込むぞ」
「了解(ラジャー)」
「一、二…」
黒マントが、なぜか沖田たちの作戦を読み取ったようにニヤリと笑った。
「三！」
沖田は考えずにRHを急加速した。

「んなろ！」
案の定、マント男は大きくジャンプした。沖田の頭上を越えようとする。
沖田はキルスイッチでエンジンを切ると同時に、ステップを踏み台にしてジャンプした。
「くそ！」
空中で伸ばした手も届かない遙かな上空を跳び越えて、マントをひるがえして男が着地した。
「〜〜〜！」
嘲るような口調の言葉を残し、再び走り出す。
「先行ってるぞ！」
キャットウォークに足をついた沖田の横を、南部のRZRが走り抜けた。沖田はエンストして手すりに倒れかかったRHに駆けよって、エンジンをかけなおした。
フローティングターンで車体の向きを変えたところで、もう一度あの女の子が沖田の目に入った。
「…えーと…」
「本物でしょ？」
沖田の腕をつかんで、女の子が言う。
「本物の吸血鬼だったでしょ！」
まるでそれがキーワードだったように、沖田はニヤリと歯を見せた男の顔を思い出した。乱杭歯の中で、照明に照らされてギラッと見えた犬歯は、まるで牙のように鋭く伸びていた。

「んなはずあるか」沖田は頭を振った。「ドラキュラが出てくるはずないだろ」
「だって…」
彼女は泣きそうな顔で口ごもった。沖田は肩をすくめた。
「後でまたな」
「待って」行きかけた沖田の腕を、彼女は押しとどめた。「ついてって、いい？」
「勝手にどーぞ！」
タンデムに横乗りに乗るのも確かめずに、沖田はバイクをスタートさせた。
「さーて、かなり遅れちまった。しっかり腰つかんでな」
背中に、女の子がしがみつく確かな重量感がある。沖田はオフローダーで二人乗りを許した事を後悔した。
「動きが鈍くなる……南部にバカにされそーだ、うー」
低い階段を四段ほど駆け上がり、中央通路に出る。左へ折れて、通行人をよけて蛇行しながら沖田は後ろの彼女に叫んだ。
「訊きたいことがある。いいか!?」
「はい！」
風やエンジン音に声を消されないように、彼女は声を張りあげた。
「名前は！」
「陽子です。氷島（ひじま）陽子」

風で乱れる髪を梳(す)きながら彼女が言った。
「俺は…」
「知ってます。沖田くんでしょ」
スピードが苦手なのか、彼女はきつく目を閉じて力まかせに沖田にしがみついた。
「おまえは…」
沖田はカウンターをあてながら内周の回廊に入った。彼女の体重は意外に軽いらしく、バイクに心配したほどの挙動変化は出ない。
「何者だ」
「えー?」
訊いてることの意味がわからないらしい。
「じゃ。どうしてあれがドラキュラなんだ」
沖田の背に押しつけられていた彼女の頭の感触がなくなった。
「だってあれ…」自分でもわからないらしい。「…黒マントでしょ、外人でしょ、牙がはえてて姫さらってっちゃって…」
「見事な判断規準だよ」
なんとなく気が抜けたように、沖田は一度バイクを止めて上を見上げた。背の高いジャングルの葉ごしに、ガラス張りの天井の梁(はり)に取りつけられた太陽灯が輝いている。
「また登ったな」

かなり上層の方から悲鳴と怒声、それにRZRのカン高い排気音が聞こえてくる。
「乗り心地は悪いが、がまんしてくれよ」
沖田は首を曲げて背中の陽子を見た。
「まともな道探してるとドラキュラの所行くのに手間食いすぎるんでね」
沖田は上下のキャットウォークを結ぶ梯子(はしご)みたいな非常階段へ向けて急発進した。
「しっかりつかまってろよー！」

ほとんど垂直のような幅の狭い非常階段を立て続けに四つも登った所で、最上層のキャットウォークに出た。
すぐ上には、ゆるい傾斜角のガラス天井がある。強い照明のため、夜空は真っ黒にしか見えない。
下方には、大温室のジャングルが一望できる。目の高さには生長しすぎの巨大高木層が所々に頭を出しているくらいで、他のキャットウォーク全部に見通しが効く。
「さすが最上階ともなると、えらい熱気だ」
下界から立ち昇る蒸し暑い空気に顔をしかめながら、沖田は並行するキャットウォークを走ってくるドラキュラに目を据えた。
「ど、どう…？」
「隅に追いこむ。角にでも追いつめねェ限り、あの化け物止められねェ」

回転を上げて走り出す。わりと情けない音のホーンを鳴らして、ドラキュラを追って上がってきた南部に合図し、左手をまわして追いつめる方向を指す。

南部は了解というようにホーンを二度鳴らした。

沖田はRHのスピードを上げた。狭いキャットウォークの両側の手すりが怖いくらいのスピードで飛んでいく。

「いかんなー」

レッドゾーンのH寸前まで寄った水温計を見た沖田がつぶやいた。警告灯もつきかけている。

「オーバーヒート寸前だぜ。焼きつくんじゃねーぞお」

真夏の炎天下くらいの気温の中で、しかもスピードを出せないからほとんど二速か三速の全開走行である。ラジエーターの水温があがらないほうがおかしい。

沖田はエンジンを気にしながら、点検用みたいな細いキャットウォークへ入った。

先の交差点からこちらに入りかけたドラキュラが、走って来るRHに気がついて反転した。

「そーそ、その調子」

ドラキュラを追って走り過ぎたRZと反対のキャットウォークに入る。

「あれ逆？」

「いいの。ひっかけて追いつめんだから」

「あれでも人間かァー」

アクセル全開で追う南部がこれも大分熱くなってきた水温計を気にしている。

「何キロで走ってやがんだよー、サイボーグか何かか？」
先の交差点を右折しかけた黒マントがたたらを踏んでUターンする。その直後を追いたてるように沖田のRHが駆け抜けた。
南部は先のキャットウォークを見通した。
「ほんでは直進で」
アクセルを開けながら十字路を通過する。
「っかし、タフなおっさんだ」
「うあ、まずい」
突っ走るドラキュラの先、外壁沿いの回廊とのT字路の脇に保守点検用の梯子を見つけた沖田が声をあげた。
「下逃げられる……させるかァー」
後の減速も考えずにギアをたき落として全力加速する。後ろの陽子へ、
「つかまってろ！」
「え？　キャ！」
前輪を浮かしてRHがスピードを上げる。
ドラキュラは裏地の赤い黒マントをひるがえして梯子に手をかけようとした。
「なによこの！」
待ちかまえていたように、間一髪よけたドラキュラのマントをかすめて白木の木刀がキャット

ウォークをたたいた。
「うえ」
沖田はアクセルを戻した。降りそこねたドラキュラが回廊に入り、今度はまた南部のＲＺＲに追われて走り出す。
「新手が出た」
「まだ捕まらないの!?」
黄色い声を張り上げて、つばさがキャットウォークに跳び上がってきた。お得意の木刀を提げている。
「どーせなら白木の杭かニンニクでも持って来てほしかったね」
Ｔ字路めがけてカウンターをあてながら、沖田はつばさの前を通り過ぎた。
「なによそれ？」
「あれドラキュラだってよ」
「あん」
つばさに排気煙をあびせつ加速。後に残されたつばさは、ぼけっとつぶやいた。
「ドラキュラ？　あいつも何言っとるんじゃ？」
首を傾げて肩をすくめてから、つばさは走り出した。
「今度こそ逃がさねーぞ」

クラッチを握ったままの南部は、外周の回廊に立つ黒マントと距離をおいたまま動かなかった。

角に立ったドラキュラの前に、沖田がいる。左には南部、ドラキュラの背後のガラスの壁はまるでマジックミラーのように大温室内の高木層を映しているが、ドラキュラ自身の影はどこにもなかった。ただ抱えられた霧野深雪だけが、まるで宙に浮くようにガラスに映っている。

「どうやら、本物の妖怪だな」

ドラキュラでなく、その後ろの一枚ガラスをにらみつけて沖田が言った。

「マントの影も見えやしねェ。おーい南部、お前十字架でも持ってねェか!?」

回廊の向こう側で南部が妙な顔をした。

「十字架だ？」

南部はギアを抜いてハンドルから手を離すと、スペシウム光線のポーズをとった。

「何に使うんだ、んなもん？」

「何ぼさっとしてんの！」

つばさが南部の後ろから走って来た。

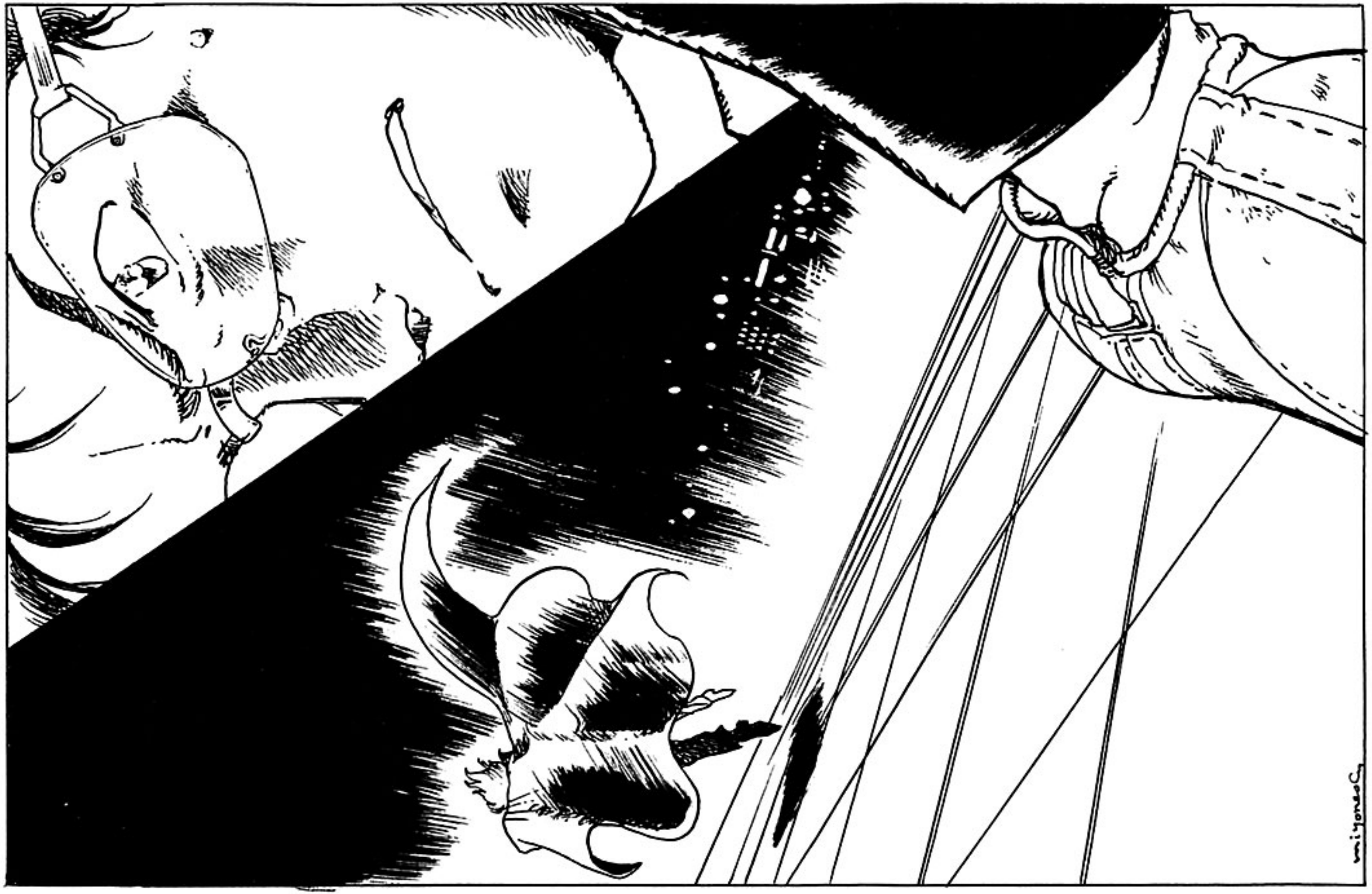
「早く捕まえろー！」

「そー簡単におっしゃりますけどね」

ハンドルに手を戻した南部はギアを一速に戻した。

「女の子抱えて助走もなしに三メートルも飛び上がろーって御仁だぜ。まともな手で…」

「それがどーしたっての」
木刀を一振りして、つばさが前に出た。うわさでは学校新聞の締め切りと追い込み時に犠牲者が出るという北辰一刀流正眼に構える。
「覚悟！」
思いきり踏み出して振りかかる。
「バカよせ！」
沖田が言ってる間に、面を取ろうと打ちこむ。ドラキュラは体をひねってつばさの木刀をなんなくかわした。
「このォ！」
返す刀で胴を横なぎにする。はずされたつばさがたたらをふんで姿勢を崩しているうちに、まるではじかれたロケットのようにドラキュラが跳び上がった。
「うわ！」
ガラスが砕けて、破片が降りそそぐ。つばさはあわててその場から逃げた。
「大したバケモンだよ！」
ガラスの天井にぽっかり開いた大穴を見上げた沖田が、吐き捨てるように言った。
「ジャンプして天井突き破りやがった」
「逃がすもんか」
屋根へ出る点検用の細い階段を、つばさが一気に駆け上がる。ほとんど体当たりするような感



じで、狭いハッチを一気に開いた。
「どけー！」
すでにスタートしていた沖田のＲＨが一気に階段を駆け上がった。
「危ないじゃない、バカー！」
とっさに屋根に転げ出たつばさの横から、ＲＨが切り妻型の大屋根に出る。蒸し暑い温室内の熱気が涼しい夜気に変わって心地良い。
「落ちるなよ！」
後ろの陽子に言いながらガラスの屋根を駆け登る。大温室の照明が屋根全体を、まるでアイスリンクのように光らせていた。その一角を黒い影が疾走している。
「割れんじゃねェだろな」
足元のガラス屋根を気にしながら沖田は棟に上がった。
「あ、あの…」
陽子が後ろから声をかけてきた。
「何だ？」
「いいの、あります」
右手が沖田の腰から離れた。
「これ！」
「何だ!?」
スカートのポケットを探しているらしい。

沖田は肩ごしに彼女を見た。彼女の右手が、細い鎖につながれた小さな銀の十字架を握っている。
「おまえクリスチャンか」
「そうじゃないけど、お守り」
「いいぞ、貸してくれ」
沖田は左手を後ろに回した。しっとりした冷たい手が、ロザリオを握らせてくれる。
「効くかどーかわかんねェが」
沖田はゆるい傾斜の屋根に降りた。左手に鎖を残して十字架を振り回す。
「知っていたら聖書の文句でも唱えてくれ」
「えー？　わ、知らない」
ギアを三速のままアクセルのみでスピードをコントロールしつつ、片手運転で突入する。
軽く車体を傾けて、ゆるいカーブを描きながらドラキュラへ急接近。黒マントが視界内で急速に拡大していく。
「くらえィ！」
追い越しざま鎖の先の十字架をたたきつける。
「――！」
獣じみた叫び声をあげてドラキュラがガラスの上に転がった。
「おー効果あり」

ろくにグリップしないガラス面にタイヤを滑らせて、沖田はUターンした。
「氷島ちゃん、こいつ役に立つぜ！」
「ひぃ」
沖田の無茶な運転のため、体を硬直させてしがみついている陽子の返事はほとんど声になっていない。
「さァ、ドラキュラ覚悟しろ！」
転がったドラキュラは、今度は反対方向へ走り出した。沖田はまだ姫を離さないドラキュラめがけて、一直線に加速した。
ヘッドライトに浮かび上がった銀髪が走りながら振り向いた。かっと開いた牙が妖気じみた輝きを放つ。
「地獄へ帰れェ！」
沖田はアクセルを全開にした。ドラキュラはマントをひらめかせると、大きく跳び上がった。
「逃すか！」
空中のドラキュラめがけて白い光が飛んだようにみえた。それがマントに吸いこまれたと思うと、ドラキュラはまるで撃墜されたように落ちてきた。
棟から白木の杭ならぬ木刀を投げつけたつばさが叫んだ。
「早くつかまえろ、ボケー！」
「うるせェってんだ！」

屋根の端に落ちたドラキュラが、ゆらりと立ち上がった。助走分の距離を開けて、沖田のＲＨが横滑りして停車する。

「地上四十メートルからのダイビング、試してみるかい」

ドラキュラは長いマントを肩から跳ね上げた。沖田は肩ごしに陽子を見た。

「降りな」

「だめー！」

陽子は沖田の背に顔を埋めたまま腰を抱きしめた。

「失敗したら落ちちゃう！」

「どーしてわかんだよ。…あ！」

ドラキュラがいきなり棟の頂上めがけて駆け出した。

「この！」

沖田は後を追って急発進した。ゆるいカーブで屋根の端につき、切り妻型の頂上へバイクを加速する。

まるで空へ駆け上がろうとするように、ドラキュラは大きくジャンプした。

――飛ぶ!?

棟沿いに走って来たつばさは目を見張った。マントを羽根のようにはためかせて、ドラキュラが上弦の月めがけて舞い上がる。

「うお――！」

雄叫びをあげて、沖田のRHが棟から夜空のドラキュラめがけて宙に飛び出した。
ステップに立ってタンクを力まかせにニーグリップした沖田は、ロザリオをドラキュラにたたきつけるように両手を伸ばした。霧野深雪の細い足首をつかみ、ドラキュラごとひきずりおろそうとする。
その瞬間、ドラキュラはまるで煙のように消えた。一匹のコウモリが飛び去るのを、沖田は視界の片端で見ていた。
「つばさ受け取れ――！」
重いバイクと自分の体を支点にして、霧野深雪の体を横なぐりに振り回して飛ばす。反射的に走り出したつばさはすっ飛んできた霧野深雪を受け止めそこねて転倒した。
「ばかあー」
ガラス屋根を転がり落ちるつばさから、大温室の外へ落下していく沖田のRHが見えなくなった。
「こっちがダイビングしちまった…」
着地すべきガラス屋根がなくなり、遙か下方に大温室横の花壇を見た沖田がつぶやいた。
「はん…」
――大丈夫。
まるで頭の中へ滑りこむように、陽子の舌ったらずな声がさやいた。
助けてあげる――

「え？」
沖田は振り向いた。不思議な浮遊感がステップとハンドルを通して体に伝わる。まるでバイクが空を飛ぶように――
地面が急速に近づいてきた。沖田は半ば無意識に腰を浮かせて着地の態勢をとった。
花のついたベゴニアと赤いサルビアの花壇の間に、ＲＨ２５０が着地した。リヤのフルフローター・サスペンションがぐっと沈みこみ、エアアシスト付きのフロントフォークがストロークを使いきって底付き（ボトミング）する。
それだけだった。四十メートル以上の大温室からさらにジャンプしたはずのＲＨは、無事に着地して再び走り出した。
沖田は惚（ほう）けた顔で後ろのタンデムシートを見て、停車した。――誰もいない。
訳のわからぬままあたりを見回す。
「…消えた…？」
葉音をたてて、夜風が人気のない夜の花壇を吹き抜けていった。
沖田が大温室の前の道に戻ってきたのと、南部のＲＺＲが正面入り口の階段から飛び出してくるのとが同時だった。
「無事だったか！」
「一応な」

サイドスタンドをおろしてバイクから離れた南部がＲＨに駆け寄った。
「おまえなんかどーでもいい。ＲＨは無事か!?」
「あのな…」
「見たところ異常なしと、焼き付かせなかっただろうな」
「フロントがボトムしただけだ、安心しろ無事だよ」
沖田もＲＨの細長いスタンドを立ててバイクから降りた。
「で、沖田」南部は親指で大温室の屋根を指さした。「本当は、どうやってあそこから降りたんだ？」
「ジャンプしたんだよ」
沖田は両手を上げてみせた。
「必殺バンザイジャンプ」
「だからどーやって？」
南部はポンとＲＨのタンクをたたいた。
「まともにジャンプしたら、おまえもバイクも生きてるはずないだろう」
「あとで教えるよ」
本当の事を言ったところで信じるはずがない。沖田は話題を変えた。
「それより姫君は？」
「上で女たちが介抱してる。傷もないし、一応無事みたいよ」

「そりゃよかった」
南部はエンジンかけっぱなしのＲＺＲに戻っていった。
「早いとこバイク戻して来ようぜ。ややこしーのにつかまらないうちに」
「オーケイ」
南部のＲＺＲが走り出す。沖田も後を追って、狭い道を走り出した。
「南部よ、俺の後ろに乗ってた奴知ってるか？」
「なに？」
「タンデムに乗ってただろ、一年生くらいの女の子」
「女の子？　いつの話だ？」
「今だよ。一番上のキャットウォーク走ってた時、いただろう」
「どこに？」
「俺の後ろ。乗ってただろう!?」
「乗ってたかな」
南部はうーむと考えこんだ。
「気がつかなかったけどなあ…乗ってないよーに見えたけどなあ。
乗っけてあん中走り回ってたのか？」
「もういいよ」

沖田と南部が格納庫から大温室までマラソンで戻ってくると、映画スタッフ一同は正面入り口にたむろしていた。
「よお、生きてるじゃないか」
榊が手をあげる。
「今、死んだんじゃないかってうわさしてたんだぜ」
「勝手に殺すな」
「どーして生きてんのよ！」
人だかりをかきわけてつばさが出てきた。
「あー悪かったね！」
沖田が喚き返す。
「大温室の屋根からジャンプしたのに傷一つなし!?」
「おあいにくさま」
「相変わらず人間じゃないのね。骨の一本くらい折れってんだ、可愛げのない」
「ホントーにあの上からジャンプしたのか？」
真田が大温室の上方を指した。
「さあね。忘れた」
「正直に言え！」木刀を振りあげたつばさが詰め寄る。「あんたがバカな事するから誰も信じないんだ」

「目撃者、つばさだけ？」
「あ、おれ少し見た」
南部が片手を上げた。
「ちらっと」
「他には？」
「いないから言えってんでしょーが！」
「ほー…」沖田はうなずいてニヤリと笑った。「あんなとっからジャンプして平気なはずないでしょー？」
「そりゃそーだ」「んだんだ」
一同から賛同の声があがる。
「なによ。じゃ、あたしがウソを言ってるっての！」
つばさは沖田に幹竹割りに切りつけた。沖田はとっさに真剣白刃取りで受け止める。
「それじゃお尋ねしますがね、つばさちゃん。あんなとっから飛び降りて、無事でいられると思う？」
「くっぬお〜〜〜」
つばさはぐりっと木刀を回した。合わせた手を横にした沖田は、木刀をもう一回まわされて手を放した。
「ほんじゃドラキュラっては？」

榊が横から訊いた。沖田が逃げ出す片手間に答える。
「そりゃ多分本物だ。コーモリになって逃げやがったぁーっとっと――！」
「待ちゃあれ、こン野郎！」
木刀を振りまわしてつばさは沖田を追って走り出した。
「いやー、タフですなー」
「まったく」
スタッフ一同が二人を見送る。

「ストーップ！　落ち着け！」
「なんだこの！」
「落ち着けっての。鳴海編集長！」
「何が落ち着けってんだ、人の信用を落としやがって！」
鬼女の如き表情で、夜の男子校舎裏を沖田を追いかけてつばさが駆け回っている。
「話があんだよ。仇とるならそれからにしてくれ！」
「あとにしろ。先に仇とってやる！」
「…えーと…」
もう、沖田をぶちのめすことしか考えていないらしい。沖田はしかたなく本題に入ることにした。

「わあったよ。本当に四十メートル飛び降りた。貴様の見た通りだ」
「今さら遅い！　その血一滴残らず抜きとってやる！」
「どうやって説明しろってんだよ！」
いい加減疲れてきた沖田がちらちら振り返る。
「じゃ、どーして無事なのよ！」
「俺にわかるか！　こっちが訊きたい。第一なんでドラキュラなんて出てくるんだ」
「あたしが知るかあ！」
すぐ背後に迫ったつばさが木刀を打ち込んだ。沖田はあやうくよける。
「まいったねこりゃ、交渉の余地全然なしだ。てめェ本気で俺があそこっから飛んだって思ってんのかよ」
「うるさあい！」
「じゃ一つだけ答えろ。俺の後ろに乗ってた女、誰だ」
「何、訳のわかんないことぬかしやがる！」
「氷島陽子！　多分一年だ！」
「知るか！」
袈裟がけに斬りつけたつばさの木刀が、沖田の代わりにコンクリートの縁石をぶったたいた。
「ち！」
すっぽ抜けた木刀がくるくる回転して飛んでいく。振りおろした姿勢のままはあはあ息をつき

ながら、つばさは髪振り乱した顔を沖田に上げた。
「誰だって」
「氷島陽子」
沖田は男子校舎にもたれかかって息を整えようとした。
「底無しアマゾンで俺のタンデムに乗って、ジャンプやった時に消えた」
つばさの顔色が変わっていらしい。つばさは乱れた前髪の間から沖田にものすごい視線を放った。
「うそでしょ……誰よそれ」
「知らないか？」
「知ってるはずないでしょ！」
ひざに手をついてぷいとうつむいたつばさが、飛んでいった木刀の方へ動き出した。
「誰も乗ってなかったわよ。乗ってるはずないじゃない」
なぜか殺気の消えたつばさの後ろ姿を、沖田は不思議に思いながら見送った。
「あーおい、姫の首筋に……」
行きかけたつばさに声をかける。途端に返事がクロスカウンターで戻ってきた。
「キバの痕なんかどっこにもないからね」
結局、その夜の撮影は全面的に中止になった。
姫の出てこないカットだけでも撮ろうという案も出たことは出たのだが、ドラキュラ騒ぎのた

め全員なんとなくやる気をなくしてしまったのである。
真夜中になって、一同は寮に引き揚げてきた。
「大温室のライトって、太陽灯じゃなかったっけ？」
榊が、机でぼけっと考え込んでいる沖田に言った。
「それがどーした？」
「あのおじさん本当にドラキュラなら、どうして太陽光線の中で灰にならないんだ？」
「太陽灯ったって、本物の太陽とそっくり同じって訳じゃないだろう」
「おぬし切支丹だったか？」
ちっぽけなロザリオを目の前にぶらさげて見入っている沖田に、真田が声をかけた。
「俺は無宗教だ」
ぐいっとロザリオを握った沖田が榊に向きなおった。
「おまえ、さっきポルターガイストがどーのこーの言ってたな」
「んーと…あー、つばさ氏が乱入してきた時ね。騒霊現象？」
「その現象の中に、空中から突然、岩が落ちてくるなんてのはあるか？」
沖田自身、訊くのがアホらしいと思った。だが榊はあっさりと言った。
「わりと初歩的な怪奇現象だ。結構よく起こるみたい」
「怪奇現象ねえ…」
真田は両手を合わせた。

「キワ物になってきたぞー」
「二階や三階の窓の外を人影が通り過ぎるなんてのは？」
「よくある。わりとポピュラーじゃない、幽霊談なんかで」
「剝製の鳥が突然飛ぶ、なんてのは？」
「死体が動き出すの？　ミイラ男みたいなのはあるけど」
「ドラキュラ伯爵は！」
「怪奇現象ですねえ、伝説が現実になっちゃうやつ…たしか日本土着の吸血鬼伝説って昔話にいくつかあったよーな気が…」
「そういう怪奇現象の原因は？」
「さあ？　場合によって違うだろうけど、まァ祟りなんてのが普通じゃない？　あの、ちょっと訊いていいかな？」
榊がおかしな目付きで沖田の顔を覗きこんだ。
「まさかと思うけどさ、本物のポルターガイスト現象だったとかドラキュラだなんて信じてるわけ？」
「……」
沖田は乱暴に立ち上がった。
「身に覚えがないのに祟られてたまるか！　――電話かけてくる」

男子寮の玄関脇の電話ボックスから、コール六回で相手が出た。
「探偵か？　こちら星南校の沖田…」
『学生か!?』
新宿西口で探偵事務所を開業している平沢千明氏が早口で訊いてきた。
『こんな時間に何事だ。極東のＳＣＦの連中はまだ動き出してないはずだぞ』
「今回はそうじゃなくて…」
『なら何だ……ああわかってる、今行く』
後半のセリフは沖田に対してではないらしい。
「何やってるんだ？」
『中東のこわい姐(ねえ)ちゃんが来てな……ああ、おまえのことじゃないって』
「お忙しいようで」
『ああ、忙しい。用件はなんだ』
「いろいろと妙な事が起こってるんでね、単刀直入にいこう」
『そうしてくれ』
「いい悪魔祓い師がいたら紹介してほしい」
一瞬、間が空(あ)いた。
『悪魔祓い師(エクソシスト)？　だあほー！　こちとらオカルト物につきあってるほどヒマじゃねえ。怪奇映画は管轄外だ。ＳＣＦ相手なら責任持って片付けてやる、それ以外なら自分で始末しろ！』

返事する間も与えず乱暴に電話が切れた。
「自分で始末しろね」
沖田はタメ息をついた。
「まずいなー、幽霊だけは苦手なんだが」
だが、事態はますますとんでもない方向にエスカレートしていった。
翌朝、霧野深雪の看病疲れで眠りこんだつばさの夢を破ったのは、なんと肉食獣のものらしい遠吠えだった。
「え、なに!?」
机に伏せて眠っていたつばさは、はっとして顔を上げた。振り向くと二段ベッドの下段で半身起こしている深雪と、その上で起き上がったノブと目が合う。
「おはよ」
寝ぼけまなこの姫が眼をこすった。
「今の、何?」
「さあ…姫大丈夫?」
「うん、丈夫じょーぶ」
両腕に力こぶをつくってみせる。その途端、二度目の遠吠えが窓ガラスをびりびりふるわせた。

一瞬の沈黙の後、三人はいっせいに吹き出した。
「やったー。誰？　朝っぱらから」ノブが体を二つに折ってひーこら笑っている。「いくら何でも舎監がぶーたれるわよう」
「行ってこよーっと」何の気なしに木刀を肩にかついだつばさがドアを開けた。「コラムのネタくらい出来そう……え？」
廊下を黒い人影が風を巻いて駆け抜けた。
「疾い…」
あっけにとられて見送るつばさの腕の下から、ノブが顔を出した。
「どしたん？」
何を思ったか、廊下の突き当たりで反転した影が、足音には聞こえない連続音とともに戻ってきた。
「ふわあ」
あっという間に通り過ぎる。
「見た、今の？」
後ろ姿を見送るつばさが訊く。
「見た。スリラー…よっくできてたね」
ノブはつばさと顔を見合わせた。
「狼男でしょ？　ちょっと古いけど」

「えーと、狼男って十字架効いたっけ」
「さあ？　十字架ってドラキュラじゃ」
「ははは」
二人は力なく笑った。
「まさか…」

同じころ、男子寮は吹雪だった。
季節はずれの粉雪が廊下を舞う中、冬山登山の完全装備の男が一人ピッケルをたよりに歩いていく。
やがて男は、フードでおおわれ目だけだした顔でドアナンバーを見上げた。４０７号室――
男は分厚い手袋で凍てついたドアのノブを開けると、中へ転がりこんだ。
「うわっ、早く閉めろ！」
荒れ狂う風をおさえるように、男はドアを閉めた。息をつきながらフードを開けて顔に巻いたマフラーを取り去る。
「ロケの時にワンダーフォーゲルから借りたの、そのままにしといて助かったぜ」
セントラルヒーティングを全開にした室内で、沖田はアノラックを脱ぎかかった。
「現在の凍死者は？」
「三階が完全に凍結したって連絡があった」

こういう異常事態で情報を押さえるのには一番慣れている和田が、ハンディトーキー片手に答えた。机の南部が椅子を回して寮内の見取り図を沖田に示す。
「現在、吹雪は三階に集中しているそーな。中央階段は雪で埋まってたってさ」
「まったく何なんだ」
沖田は訳のわからない顔でベッドに腰をおろした。
「現在男子寮金紺館では廊下を中心に猛吹雪に襲われており、階段では雪崩（なだれ）の危険があります…一晩で男子寮がアルプスの山ん中にでもワープしたのかよ！」
「さっき女子の新聞部と連絡とれてね」
連絡待ちといった体（てい）の和田が言った。
「今日は日が出た時から雲一つない快晴だってさ」
「じゃなんで廊下の中にまで吹雪が舞ってんだよ！」
沖田はびっしり霜（しも）のついた窓をにらみつけた。外は――白い闇。
「季節外れのバカ雪でなけりゃ、何だ！　自然研のマッドが降雪機の実験でもやってるのか」
「自然研はシロだぜ」と和田。「さっき一年の奴が言ってた。文化祭でやる原爆実験の準備で、そんなことやってるヒマないってさ」
「原爆ね…ホンモノかよ」
「さあ？」
「大学の方に実験用の原子炉があるからできないことはないと思うが」

物騒なことを言う南部を沖田はひとにらみした。
「この忙しいのに…」
「妙な報告が入った」
沖田のセリフに、和田がトーキー片手に割り込んできた。
「東階段で探検隊が雪女を目撃したと」
「ゆきおんなあ？」
沖田と南部は声をあげた。トーキーのスピーカーに耳を傾けていた和田がうなずいた。
「えー、『透き通るよーな色白の、長ぁいストレートヘアの美女がオールヌードで通り過ぎた』って。二、三人鼻血噴いたってよ」
聞くなり、沖田は再びアノラックに腕を通しはじめた。
「あーすけべ、ヌード見に行こーってんだ」
「うるせェ。本物の雪女ってのも確か服着てねェんだ。本物なら締め上げて真相吐かせてやる！」
「相手は妖怪変化だぞ」
「知るか！」
マフラーを巻いた沖田は、ドアに置いておいた登山靴をはきにかかった。
「探検隊の連中に会ったら遭難しないよう注意しろって言っといてな」相変わらずトーキーを離さない和田が言った。「屋上は最悪の天候、視界ゼロメートルだそうだ」

「探検隊ね……放送部が特番スペシャルでも作るのか」
「他にも自然研の調査隊が出動してる。それから、四階の吹雪が一番ひどくなったらしい」
「凍結防止用にアセチレンバーナーでも持ってくりゃよかったな」
「もし本当に雪女に会ったら…」
「よろしく言っとくよ」
和田の言葉を終わりまで聞かずに、沖田はフードをかぶって廊下に出た。
握ってもかたまらないようなアスピリンスノーが束になって吹きつけてきた。
「雪女だと！」
ぶつぶつ文句たれながら、沖田は雪をかきわけて東階段へ動き出した。
「そうそう化け物ばっかり出てくるもんか」
どこかの部屋から、ボリューム一杯でトロピカルムードのサンバをガンガン鳴らしているのが聞こえてきた。音楽で場違いな風雪に対抗するつもりだろうが、ろくな効果はあがっていない。
白い息を吐きながら雪の積もった廊下をラッセルしていく。壁や天井にまで氷雪がこびりつき、さながら雪のトンネルである。
廊下をはじからはじまで往復したところで大した距離はないはずなのに、この日に限ってそれはとてつもなく長く思えた。
「魔物にたぶらかされて同じとこ歩き続けるって話があったな」
不吉な昔話を考えているうちに、沖田は前に人影を見たような気がして顔をあげた。

まともに吹きつけてくる白い風の向こうから、誰かが来るらしい。
「おーい」
沖田は手を上げて合図した。雪の向こうの人影も片手を上げてあいさつを返したようである。
「単独行か。探検隊か調査部隊の落ちこぼれか、でなけりゃ…」
慣れない沖田が苦労して進む廊下の雪原を人影は軽々と歩いて来る。雪原行に慣れている奴らしい。だが雪ごしに、乱れる黒髪が渦を巻いているのを見て、沖田は目を見張った。
「まさか」
沖田は我知らず吹雪に向かって身構えた。
切れ長の瞳が不思議な光をたたえて、沖田を一直線に射た。薄い口元が、微笑したようにゆるむ。
「――本物？」
豊かさよりは繊細さを感じさせるような一糸まとわぬ白い体が、沖田の前で立ち止まった。
沖田は一瞬、我を忘れて見とれてしまった。
白い吹雪に黒い髪を流れるにまかせた彼女が、沖田に向かってまっすぐ手を上げた。凍えた風にむき出しでさらされているのに、どこか温かみを感じさせる肉体が近づいてくる。
沖田は突然、眠りに引き込まれるような目眩を覚えた。雪女に応えるように手を出しかける。
「だめ――！」
子供のような悲鳴が、沖田を我に返らせた。横からタックルするように制服姿の女の子が飛び

ついてきた。
沖田は彼女を受け止めそこねて、校庭に尻もちをついた。
「え？　な何だ？」
あわててまわりを見回す。昇ったばかりの太陽が東の空に低く輝いており、男子部と女子部の境にあるポプラ並木が校庭に長い影をおとしている。
「どこだここは」
男子部の校庭である。朝早いのと、こんな時間から寮内で吹雪が荒れているおかげで人っ子一人いない。
「ワープでもしたか」
自分の、雪のついているアノラックを見てから、沖田は横に目を向けた。
「よお」
氷島陽子だった。地面に手をついて息を切らしている。肩口についた雪が早くも溶けかかっていた。
沖田は彼女の雪をはらいながら立ち上がった。
「…えーと」
何を話すべきかわからない。訊きたいことは山ほどあるが――
大きく息をついて、彼女が顔を上げた。うっすらと汗をかいている。
「びっくり、した？」

恐るおそる訊く。沖田は苦笑いしながら、ひざをついたままの彼女の横に腰をおろした。
「さっきの、ありゃ何だ？」
「――雪女。沖田くん引きずりこもう、なんてしたからびっくりして…」
「どーして俺たちゃ、ここにいる？」
「えへ」
彼女はぺろっと舌を出した。
「跳んだ、の」
「とんだァ？　テレポーテーションとでもゆーんじゃあるまいな？」
「テレポ…何？」
「いや、いい」
首を傾げて肩をすくめた彼女は、そのまま沖田の肩にちょこんともたれかかった。
「つかれちゃった」
遙か校舎の向こう側に、そのまわりだけ吹雪につつまれて幻のようにかすんだ男子寮が見える。
「シュールだな」沖田はつぶやいた。「雪になってんのは男子寮のまわりだけか」
「そうみたい」
言ってる間に、男子寮を霧のように取り巻いていた雪が晴れはじめた。
「やむようだな……ん？」
沖田は横の女の子が寝息をたてはじめているのに気がついた。

「あや」頭をかかえる。「ま、いいか」
沖田は彼女の肩に手を回した。座りなおして自分の体を安定させると、少しだけ休むつもりで自分も目を閉じる。
「あ、しまった」
頭の上でいささか間の抜けた声がした。見上げると、淡く光る空をバックにして黒服の男が帽子に手をあてて立っていた。
「またドジしちまった。や、ご迷惑かけてるらしいですね」
後の言葉は自分に向けられたものらしい。沖田は軽く手をあげてあいさつした。
「沖田くん…ですね。や、はじめまして、あなたが沖田くんですか」
男は白手袋をはめた手で握手を求めてきた。
「よろしく」
沖田は何の気なしに男の手を握り返した。
「あなたは、あの娘(こ)のことどう思います？」
「あの子？」
「あなたの横にいた娘さんですよ」
沖田は自分にもたれていたはずの陽子を見た。――誰もいない。
「また消えた」
つぶやいてから、沖田は笑い出した。

「何者なんだいあのコ？」
男は眼深にかぶった帽子の下で困ったような顔をした。
「ご存じない……まァ、知ってたらそんな顔してらっしゃるはずないですね。失礼しました、あたしはこれで」
つばに手をかけて軽く会釈した男は、背を向けて歩き出した。二、三歩行った所で、沖田に振り向く。
「まァグチになるんですけどね、この騒ぎの原因の一つは」男は指鉄砲を撃つように沖田を指した。「あなたなんですよ」

うつらうつらしていた首ががくっと落ちて、沖田ははっとして顔を上げた。
校庭のど真ん中に座ったまま、ほんの少しの時間だけ眠り、そのうえ妙な夢まで見てしまったらしい。
いつの間にか、肩にもたれかかっていた頭の重みが消えている。横に頭を巡らせた。彼女は、気がつかないうちにいなくなっていた。
沖田は立ち上がった。遠目に見える男子寮は、もうかすんでいない。ただ、まわりはまぎれもない秋なのに、周辺と屋根に雪が積もってそこだけ真冬の豪雪地帯になっている。
つきぬけるような青空の下で、あざやかに白い雪がキラキラ輝いていた。
「何度見てもシュールだ」

沖田は校庭を横切って歩き出した。
「なんて言い訳すっかなー。気がついたら雪の廊下から校庭に飛んでたなんて」沖田は顔を手でおおった。「俺も信じられねェぜ」

「キレイな雪だなあ」
顕微鏡の接眼レンズから目をはなしたマッド松田が、感極まったように夕メ息をついた。
「こんなにキレイなの、二年前にユングフラウに行って以来だ」
「どこだって？」
真田が訊いた。沖田はべーっと舌を出した。
「スイスアルプスだ。やだねー、ブルジョワは」
文化祭準備にかこつけて校舎の実験室に居を定めていたマッド氏は、それでもしっかり調査隊に参加して男子寮踏破に挑んだ。吹雪がやむと同時に、直撃をまぬがれた四階の407号室に実験用具を持ち込んで、雪質調査を開始、雪が溶けるとまずいので積雪八十センチの廊下で実験をはじめた。
「見てみるかい？」松田は低倍率の光学顕微鏡から身を離した。「きれいだよ」
「サンキュー」
言って沖田は接眼レンズに目をあてた。明るい視野に、二つとして同じ形がないというきれいな六角形の雪の結晶が見える。プレパラートをわずかに動かすと、同じ六角形ながらまるで別の

幾何模様を持つ別の結晶が、まるでモノクロームの万華鏡のようにあらわれた。
少し離れた所で自然研の部員と話し込んでいた和田が戻ってきた。
「データそろったよ。最低気温は五時五十七分、三階の中央階段で測定された零下十七度五分。気圧九六五ヘクトパスカル、最大風速…」
「もうええ」げんなりした真田が、和田を手で払った。「拙者は理系が苦手でござる」
「で、ドクトル、結論は？」
さらさらの雪を指ですくっていたマッドは、ニコニコしながら立ち上がった。
「この雪は全部、天然自然の本物だよ。人工降雪機みたいな野暮な人造物じゃあない」
「さいですか。すると何か、ホンモノの上等なアスピリンスノーが天から降らずに寮の中を吹き荒れたってわけか。どうしてだドクトル⁉」
「原因はまったく不明だ！」
これ以上の喜びはないって顔で、松田は大仰に両手を広げた。
「こんなことがどうして起こったのか、ぼくには見当もつかない。これこそ現代のミステリーだ、ロマンだ、科学的な説明をつけることなど不可能な真実の怪奇現象だ」
「てめえ、科学者だろーが。説明つかねェ事がどーしてそんなうれしいんだ⁉」
「科学者の好奇心て、対象が不可解なほど燃えあがるんだよ。知らない？」
「勝手に燃えてろ」
顕微鏡に別のプレパラートを入れて覗きはじめた松田に、沖田は肩をすくめてあさっての方向

を見上げた。
「ね、ドクトル」取材メモ片手の和田が松田の肩をつっついた。「原因は雪女って説があるんだけど、どー思う？」
「調査隊でも目撃した人が何人かいるよ」
松田は事もなげに答えた。
「だけどぼく、比較民俗学はやってないんだ。確か自然研（うちけん）にも詳しいのがいるから、訊いてみなきゃ」
「そこの沖田氏も雪女に会って話だけど」
沖田はぎくっとして、そのまま無視して行ってしまおうとした。
「どーだった、彼女？　ちゃんとよろしく言っといてくれた？」
和田が追い打ちをかける。
「悪い、忘れてた」
沖田は仕方なく振り向いた。
「いきなり迫られてびっくりしたから、全部忘れた。なーんも覚えてねぇ」
「迫られただァ!?」
松田を乗りこえた和田と、榊に真田の三人が沖田に迫ってきた。
「このやろ、一人でいい思いしやがって」
「どんな美女？　全裸って聞いたぞ」「ではその感想を一言どーぞ」

「しまった」
沖田は目を覆った。
「だから、ぶったまげて忘れた。終わり！」
「そのぶったまげたをもう少しくわしく」
「プロポーションは？」
「ざっと見たとこ80・58・82……何言わせんだアホー！」
「くそー、一人でいいもん見やがって」
「相手は妖怪変化だぞ。いいもんもくそもあるか！」
「何だろーと、美しければいい！」
榊が両手を握りしめてきっぱり断言した。
「ヒルダは悪魔の妹の時の方が美しかった」
「いやー、八犬伝の玉梓（たまずさ）がなかなか。羽衣伝説の天女も捨て難いし、アメノウズメノミコトやなんか、もー最高」
「メリーベルは吸血鬼だけどかーいーんだぞお」
「ラムちゃんは宇宙人で鬼娘だけどかわいいぞ」
「かぐや姫とか」「人魚姫って好み」「エマノンがいい」
「やってろ」
関係ない連中まで加わって、わいわいと話しはじめる。沖田はあきれはてて息をついた。

「ゲテモノ趣味め…」
「そーいえばマコちゃんもメグも魔女だ」「原田知世はいい」「ローレライは？」「もののけ姫」
「マリア・Kとか」「シバの女王」「モモが好きじゃあ」
「えーかげんにせえー」
沖田は喚いた。
「何のためにこの雪の廊下に出てると思ってんだ！　今のうちに雪かきしないと男子寮は洪水になるぞ！」
「うへーい」
集まっていた男子生徒がのろのろと散り出した。
「しかし室内で雪かきする羽目になるとは不覚だった」
雪国出身の真田がぶつくさ言う。
「うらみこめて雪女呪ったら」
「冗談じゃない。田舎にゃ本物の雪女の話があるんだ」
女子寮に出現した狼男も、雪女も結局その行方はおろか、出現の目的すら判明しなかった。ただ、狼男は運動不足解消のため早朝マラソンに励み、雪女は男漁(あさ)りに出てきたというのが、それぞれ女子寮、男子寮において有力説となった。
そして、公式には女子寮局部型ポルターガイスト地震に端を発した星南学園群発怪奇現象は、まるでこの二つの事件が引き金となったかのように、一気にそのクライマックスへと突入したの

である。
朝食時、男子部の食堂の厨房(ちゅうぼう)に、延々と皿の数を数え続ける番町皿屋敷のお菊さんと思われる血みどろの美女の幽霊が出現し、一時限目には男子部、女子部両校舎に大量の妖精が発生した。昆虫類や蝶類の羽根を背に持つ、少女の姿をしたいわゆるフェアリーである。
この時すでに、何らかの対策を講ずるべきであった教師たちは、教室内を勝手気ままに飛びまわる妖精たちをあえて無視し、平静を装ってふだん通り授業をおこなった。
だが、決定的とも言える出来事が二時限目に起こった。

ほとんど中身のなかった一時限目の基礎解析の授業の後に沖田ら2－Bの生徒は二時限目、保体実技に入った。相変わらず身長十五～三十センチほどの小妖精がうろうろと飛ぶ中で、ヒステリックにホイッスルを鳴らす体育教師にせきたてられるようにゲームをはじめる。
「おーらおらおらどけ――！」
センターラインを突破して、ゴールキーパーのはずの沖田が敵陣にドリブルしながら突っ込む。進路上の妖精が道を開ける。
「させっか、このザルキーパー！」
悪口(あっこう)たれながら、センターフォワードの南部が五時の方向からからんで来た。
「ジャマするな、くそ部長(ヘッド)！」
一歩間違うと自爆しそうなフェイントをかけまくって南部をかわし、沖田はタッチラインから

ゴールへ回りこむコースに出た。
「えーいこのお！」
フォワードの立場もわきまえず、真田ががらあきのゴールライン沿いにペナルティエリアに飛び込んできた沖田へ、スライディングまがいのキックをかけた。
「甘いわ、未熟者！」
沖田はボールごと真田を飛び越えた。それまでの陽光が突然さえぎられ、ゴール前に黒い影が出現した。
「わぎゃ!?」
地面の真田が妙な声をあげた。沖田はかまわずにゴールポストめがけてシュートした。
「この！」
キーパーの宮崎が、ボールめがけて横っ飛びにダイブする。指先数センチの空間を通過したボールがポストに跳ねてゴールインする。
「やりィ」
グラウンドの全域からどよめきとも驚きともつかない声があがった。
「そんなファインプレイだったか……ん？」
全員が空を見ている。沖田は空を見上げた。
「なんじゃあ――!?」
重い羽音が落ちてきた。ジェット旅客機のような幅の羽根を広げた何ものかが、校舎の上空を

悠々と飛んでいた。太陽光線をさえぎったシルエットは、三つの長い首を持っている。
「ド…ラゴンか…」
沖田の声はかすれていた。額に手をかざしてシルエットを追う宮崎が、
「どっちかってーと、キングギドラに見えんだけども」
「いくら怪奇映画が出現したからって、怪獣映画まで出てきたまるか」沖田は力なく言った。
「…んなアホな事が起きるわきゃない…」
鈍く金属質に光るうろこを持つそれは、太い骨格に支えられた巨大な翼をはばたかせると、三つの首を一杯に伸ばして鳴き叫んだ。16チャンネルドルビーシステム級の、すさまじい雄叫び三つ分のハーモニーが校庭をゆるがした。
「うは」
腹にどおんと響く低温まじりの大音響に、全員が耳を押さえる。叫び終えた三つの首は、かっとばかりに結晶質の牙が並んだ大口を開くと、まるでレーザーのような炎を噴き上げた。
青い空に、あざやかな光芒(こうぼう)が放射状に三筋伸びる。
「やっぱ、キングギドラだ」
「キングギドラに前脚があるか」
サイドバックの榊が空の竜を指さす。
「尻尾だって一本だし、色だって金色じゃないし、ありゃサラマンダーだよ」
「サラマンダー？　あの、おとぎ話やＲＰＧに出てきてお姫さまさらったりボスキャラやったり

お宝守ってたりする、あれか？」
「火ィ噴いて空飛ぶ三ツ首のサラマンダーってーと、相当の大物だぜ」
「んなこと見りゃわからあ。何であんなのが出てくんだよ」
沖田は榊にくってかかった。
「オレが知るか！　エクスカリバーでも抜いてドラゴン退治でもすりゃいいだろ」
「惜しかったなー」真田が首を振った。「うちの田舎に村正が一振りあるんだよな、持ってきてりゃよかった」
「あんまり過激なもん持ち出すな、このアナクロ忍者！」
「村正以外にエクスなんとかの代わりになるよーな化け物向きの刀があるか」
「また訳のわからない話はじめる」
榊が頭を抱えた。第二の大音声が聞こえたのはその時だった。
空中のサラマンダーとは異質の声に、全員がいっせいに声のした方向を向く。
「？……？？？」
出所は九月以来使われていない五十メートルプールだった。そろそろ藻の浮きはじめた水面から、ぬめっとうろこを光らせた長い首が出ている。
「こ、今度は海（シーサーペント）竜だあ」
榊は今度こそ頭を抱えた。
「伝説の竜まで出てきはじめたぞお」

飛び交う妖精が、笑いさざめくような羽音をたてた。

事ここに至り、学校側はついに授業を中止して緊急職員会議を招集、続発する怪奇現象の対策検討を開始した。何の役にも立たなかったことは言うまでもない。

「標本室で剝製が動き出して、女子部の家庭科準備室にはお岩さんが、桂木荘じゃお露さんがからんころころんとぽっくりの音させてる、か」

沖田は重いタメ息をついた。

「エクソシストか怪奇現象テーマにしても、節操がなさすぎるな」

「体育館にゴーレムが出現したと」

ハンディートーキー片手の和田が言った。

「九……十個所目か」

こういう異常事態で内外の情報が一番よく入ってくる場所、つまり新聞部部室で沖田らは和田に未整理のメモを見せてもらっていた。

「完全にパニックだな」

「まともに自習しているクラスなんかないだろう？」

テーブルの上にでーんと広げられた校内地図の描き込みを数えていた榊が訊いた。

「あるぜ、三年の受験組」

「ひえ〜〜」
「怪物もお化けも無視して、受験勉強一筋。さすが秋口過ぎると目の色違ってくるねー」
「おーこわ」
「おい和田」メモの束を箱にほうりこんで地図を見た沖田が「これで全部か、今起きてるやつ？」
「えーと、大温室にユニコーンが出たのと屋内プールにトップレスの人魚が出た」
新聞部の一年生が手ぎわよく地図に書きこみをする。時刻、内容。
「ホントお化け屋敷やな、こりゃ」
ほとんど高等部の全域に出現した怪奇現象と妖怪変化の群れの地図に、真田が感心する。
「被害状況は？」
「ポルターガイストで校舎の窓ガラスが落ちたのと、電撃かなんかでブレーカーが飛んだのがいくつかある」
「人間の方は？」
「保健室はとっくに満杯だけど、ぶったまげてケツ打ったくらいだな」
この状況により、学内は悲鳴と爆笑の渦におおわれていた。徒党を組んで学内一周怪奇と幻想の世界ツアーに出るもの多数、現実を認められずパニックに陥って寮でフトンかぶって寝るもの少数、ここぞとばかりに手薄になった警備網を突破、学外へのエスケープに成功したもの少数。
この、学校史上初の異常事態（当たり前だ）に直面した男子・女子部及び大学の新聞部・放送

部、そして映研は初期のショックがおさまると猛然と活動を開始した。
各所でカメラ、ビデオ、8ミリが回り、テレコやメモ片手の生徒たちが飛びまわっている。かくして新聞部にいるのは和田以下二、三人だけだった。
「オレらも早くいこーぜ」榊が外へ行こうとする。「こんな怪奇現象のオンパレード、めったに見られない」
「そうだな」
気のない返事をして、沖田はポケットからハイライトを出してくわえた。
「和田、このバカ騒ぎの原因は？」
「ん？　えーと、ちょっと待てよ」
テーブルわきのデータボックスをかきまわしにかかった和田は、あっさりと一束のメモを取り出した。
「女子部の占星術部によると、これは世界滅亡の前触れで、自然研は集団幻覚、あ、奇術研が映研と組んでデモンストレーションやってるって説もあるし、えーと、バランスが崩れたってのもあるな。それから」
「もういいよ」
百円ライターで火をつけた沖田が、うんざりした顔で煙を吐き出した。
「和田、おまえさ、この前フィルムに三コマだけ写ってた奴のこと覚えてるか？」
「例の女の子？　あれがどかした？」

「氷島陽子って名前、聞いたことあるか？」
「ひじまよーこ？　かなり前に聞いた…」
「なに!?」
考えこんだ和田に、沖田が詰め寄った。
「わ、来るな。えーと、確か一年の時、新聞部の女子にいたよーな気が…」
「名簿貸せ、名簿。女子部の生徒だな」
「そだけど？」
「何をあせっとるのだ彼は？」
「欲求不満なんだろ」
後ろ指をさす真田と榊を無視して、沖田は和田からひったくった女子部の名簿を繰り続けた。
「たの…はの…ひ、こいつだ！　四組、３４７号室！」
喚くなり、沖田は名簿をほうり出して新聞部部室から飛び出していった。
「あーあ、煙草くわえたまんまで飛んでったぜー」
榊は沖田がほうり出した名簿を拾い上げた。
「どーせこの騒ぎじゃ見つかるめー。誰だ氷島陽子って」
真田は榊の名簿を覗きこんだ。
「ひ、ひーと……これか、和田、これ誰？」
「だから二年の新聞部だろ。全然目立たない子でさ、最近は全然見てないな」

「ほお。行ってみる？」
「行ってみやしょー、３４７号室。しかし寮の部屋にいるかね？」
「さあ。んじゃ和田、また」
榊と真田は、沖田を追って部屋から出て行った。和田は二人を見送って肩をすくめた。
「ドジめ、去年の名簿見て行きやがった」

情報によればお露さんが歩きまわっているという女子寮、桂木荘に人の姿は少なかった。
たてまえ上は、男子生徒は入寮許可が必要だが、事実上ほとんどフリーパスの女子寮の階段を沖田は一気に駆け上がっていく。
「エスパーだか何だか知らねーが、あいつが今回の元凶ってのは確かなんだ。今度こそつきとめてやる！」
三階の回廊を走り出す。女子寮らしい手作りのドア飾りや手描きのポスターなどが貼(は)ってあるドアの上の、飾り文字のルームナンバーを確かめていき、沖田は３４７のドアの下で止まった。
「ここだ」
タバコを手に持って一息ついた沖田は、その手でドアをノックしようとした。
「え？」
指がドアに当たらないうちに、すっとドアが開いて誰かが出てくる。沖田より頭一つ分低いウェーブのかかった髪が、沖田に気づいて顔をあげた。

「――！」
驚いたようにすっと息を止める。見開いた瞳のあまりの表情の豊かさに、沖田は一瞬言葉を失った。
「……」
「あは」
彼女は、甘えるようなうれしそうな顔をした。ぺこんと頭を下げる。
「あ、ああ」
つられて沖田も片手を上げてあいさつした。
「氷島…さん？」
「ヨーコでいいです、沖田…くん」
「えーっと」
言うつもりだった事が全部、どこかへ飛んでいってしまった。
彼女はいたずらっぽい微笑を口もとに浮かべたまま、後ろ手にドアを閉めてもたれかかった。
「あのな」
沖田がセリフを探している間に、彼女は恥ずかしそうに目を閉じて上を向いた。
「多分、これで最後」
「え？」
「来てくれてよかった。ね、沖田くん、バイクの後ろ乗っけてくれて、ありがとでした」

話がよくわからないでキョトンとしている沖田に、陽子は真正面から目を見開いた。予行練習のように、口を幾度か開いてから、消え入りそうな声で言った。

「好きです――さよなら」

「え!?」

かじりつくように沖田の首に抱きついてから、彼女は逃げるように走りだした。まるで滑るように。

沖田は唖然としたまま、奇妙な既視感(デジャヴュ)を覚えながら、その後ろ姿を見送った。

入れ違いに、反対側から榊と真田が現れた。

「ほーらいた。よー沖田。お目当ての女の子見つかった――？」

榊が言った。だが反応なし。榊は沖田の肩をたたいた。

「どうしたんだよ」

「告白された……あち！」

沖田が思わず左手を押さえた。根元近くまで灰になったハイライトが床に落ちる。

「告白されたァ？」「何のっちゃい」

榊と真田は顔を見合わせた。

「やっぱ欲求不満だ」

「何やってんのよ」

後ろから声がかかった。振り向いた沖田がしぶい顔で額に手をあてる。

「何もしとらん！」
「ふーん」
ヘアバンドにペンだの鉛筆だのをさしたつばさが、ウォークマンを持った右手を肩に上げた。
「何もしてないのがどーしてこんな所にいるのよ。タバコ吸いにきたの？」
「ちがわー。おい、引き揚げっぞー」
榊と真田に合図して、沖田は猫背気味にポケットに手を入れて歩き出した。つばさの横を通り過ぎかけて急に立ち止まる。
「知ってるなら教えろ。新聞部の一年に氷島陽子って子がいるな？」
つばさの表情が、はっきりそれとわかるほど硬くなった。沖田がゆっくりとつばさに顔を向ける。
「本当に、知ってるの？」
つばさは目をそらしたまま訊いた。沖田は心持ちうなずいた。息をついたつばさが、肩を落として壁にもたれかかった。
「一年じゃないわ、あの子。あたしたちと同級生、二年よ」
「あっそ。ガキっぽいからてっきり一年だと思った……ちょっと待て！」
沖田は腕ごと３４７号室を指した。
「ここ一年のエリアだろが。なんで二年が一年の部屋にいるんだ」
「いたの!?」

ギョッとしたように、つばさはルームナンバーを見上げた。
「いたよ。347号室、あいつの部屋だろ」
「名札見てよ」
言われるまま、沖田は部屋の住人を示すドアの横の名札に目を走らせた。一年生の薄い緑のプラスチック板に三人の名前――合田牧子、小松由香、下鶴朋子、それだけ。
「なんだこれは」
「見ればわかるでしょ、今のこの部屋の住人。――沖田去年の名簿見たでしょ？　ここは去年のあの子の部屋だったから」
「じゃ、今はどこにいるんだ」
「いるはずないでしょ！」
眉をつり上げて、つばさが叫んだ。
「あの子がここにいるはずないのよ。今年のゴールデンウィークで交通事故に遭って、ずっと入院してたんだから」
「退院したんだろ」沖田はつばさに少し気後れしていた。「元気そうだったぜ」
「んなはずないわよ」つばさは頭を振った。「今朝病院に電話かけて確かめたんだから。入院以来ずっと昏睡状態、昨日から急に容態が悪化して集中治療室入りだって」
「昏睡状態…？」
沖田の脳裏に、いくつかの映像がフラッシュバックした。大学通りを歩いていった彼女、大温

室で突進するドラキュラにびっくりして立ちすくみ、沖田の背にしがみついてバイクに乗っていた彼女――。

「どこの病院だ」

かすれた低い声で、沖田は言った。

「武蔵境の…NS病院…」

聞くなり沖田はその場から駆け出した。

「待って！　あたしも行く！」

後ろからつばさのセリフが追いかけてきたらしいが、沖田には聞こえなかった。女子寮から一直線に格納庫に走り、ほんの三日前にやっと改造を完了させた愛車カワサキ750SSを引っ張り出す。

国立―武蔵境間でいくつ信号を無視したか覚えていない。どれ一つで捕まっても免許取り消しは確実な乗り方で、沖田は病院の駐車場にブレーキングドリフトをかけてバイクを止めた。

ガラス張りの玄関から入ってすぐ看護婦をつかまえて場所を訊か走り、沖田は集中治療室の前へ出た。

備え付けの安っぽいソファに、青ざめた顔の和服の婦人と、恰幅のいい紳士が心配そうに座っていた。めっきり憔悴の色が濃い。

二重ガラスのドアの中で、うすい緑色の手術着をつけたスタッフが忙しげに動いていた。状態

はかなり悪いらしい。
沖田は陽子の両親らしい二人に会釈して、ソファに腰をおろした。落ち着かない。肘をついたり、足を組んだりして何度も何度も姿勢を変える。
例の必殺トレーシーを駆ったらしいつばさは、かなり遅れて来た。
「ったく、一人で先行きやがって」
ぶつぶつ文句言いながら来たつばさは、ドアの前の老婦人に軽く頭を下げてから、沖田に少し間隔をとって腰をおろした。
「あの二人、彼女の親か？」
いらいらと集中治療室のドアを見たまま、沖田が訊いた。
「違うと思う。両親がいなくて、おじいちゃんとおばあちゃんがいるって言ってたから」
それきり、会話が途切れた。しばらく、沖田が神経質に鳴らすつま先の音だけが聞こえている。
「あの子ね」
しばらくして、つばさが口を開いた。
「あの子、一年の時からおとなしくって、怖がりで、いるのかいないのかわかんないような子だった。覚えてる？」
「いや」
「でしょーね。…あの子ね、ありがたく思いなさいよ、あの子、沖田のこと好きだったのよ」

「は…」沖田はつま先の動きを止めた。「――知るか」
「でしょーね、沖田鈍感だから」
「どーしろってんだ」
その時、集中治療室の二重ドアが開いた。マスクをとりながら、医師が二、三人沈痛な面持ちで出てきた。うち一人が老婦人の所へいき、二言三言何かささやく。口もとをおさえた婦人が、力なく紳士にもたれこんだ。
――終わったらしい。
婦人を支えるようにして、二人は集中治療室の中へ入っていった。
沖田は、とんでもない非現実感を覚えていた。まるで目の前の現実を、映画のワンシーンのように見ている自分を感じる。
やがて、白いハンカチをぐっしょりぬらした婦人が二重ドアから出てきた。
「陽子の、友達ですね？」立ち上がった沖田とつばさの前で、頭を下げる。「陽子を見てやってくれますか」
ドアに向かって歩きかけた沖田の腕を、つばさがつかんだ。
「だめ！　彼女、四十キロあったのに今二十五キロしかないの、見ないであげて」
沖田はうつろな目でつばさを振り返った。腕を振り払って、もう一度歩き出す。
天井の蛍光灯の光量が急に落ちたのはその時だった。あたりが薄暗くなってくる。
沖田は停電かと思ってぼんやりとあたりを見回した。廊下の突き当たりの一枚ガラスから見え

る外の風景まで暗くなっている。
「なんだ？」
「や、失礼しました」
二重ドアから、黒服の男が出てきた。沖田はその男を一目見て葬儀関係の仕事をしていると思った。
「少しだけ時間を止めさせてもらいました。はじめまして、私、案内人です」
男が出した右手を、沖田は何の気なしに握り返して、そしてはっと気がついた。
「今朝の夢に出て来た…」
「や、覚えてましたか」
「ちょっと待て。時間を止めたと？」
あわてて沖田はあたりを見回した。なんとなくねっとりする空気の中で、まるで凍りついたようにみんなが静止している。
「正確には、時間の流れをできるだけ遅くしたんです。本当はこんなこと規則違反なんですけどね」
「てめえ！」沖田は思わず男に人指し指を向けた。「誘拐犯人！　岩の下敷きになったのにどうして…」
他にも何度か見ているような気がする。男は苦笑いしたようだった。
「見られてましたか、お恥ずかしい。いや、いつもなら出なくてもいいんですがね、今回はすご

い事になっちゃいまして。あなたの学校、今えらい騒ぎになってるでしょう」
「てめえ……案内人だ？」
「はい、私、案内人です」男は両手を広げた。「どうぞよろしく。もっともあなたのお役に立てるのはかなり先の事のようですけど」
「何者だ、いったい？」
「だから案内人です。こちら側で役目を終えた、いわゆる魂をあちら側の世界にご案内する、ね」
「こっちとあっち？」
まったく理解できずに、沖田は訊き返した。
「現実に対する非現実、物質世界に対する精神世界です。まあ、俗に言うあの世ですね」
「てめえ」沖田は我知らず後ずさった。「死神か」
「おお、そんな名前で呼ばれるから、ただの案内人の私たちが運命なんて大それた物を操ってるように誤解されるんです」
「その案内人が何の用で…」
言いかけて、沖田は男につかみかかった。
「彼女殺しに来やがったな！」
「だから私が殺すんじゃありません」
さして力が入っているとも見えない手で、男は沖田の腕をほどいた。

「彼女が死ぬんです。私にはそんな力ありませんよ。私はただ、彼女をあちら側へ案内するだけ。もし案内しないと、死んじゃった彼女が永遠にこっちをさまよい続けるんです」

男は、片目を閉じてみせた。

「その方が、かわいそうでしょう？」

「何とかして…」

沖田が言いかけたことを、男は両手を出してさえぎった。

「私もこの仕事長いですから、あなたの言いたい事わかります。だけどね、彼女本当はこの春にはもういなくなっているはずだったんですよ」

男は両手を振って笑った。

「いやあ、特にあれぐらいの少女の想(おも)いってのは実に強力でしてね。彼女の場合、特別にその想う力が強かったんです。どうやって、彼女があなたの前に出てこれたのかわかりますか？」

「ドッペルゲンガーか」

沖田はうめいた。男はうなずいた。

「そう、生霊(いきりょう)です。そんなことするために、どれだけのエネルギーがいるものやら。私もびっくりしましたよ。でも、仕事だし、彼女のためにも彼女を連れてかなきゃならない。そしたら彼女、逃げ出しちゃったんですね」

男は照れたように笑った。

「まあ私たちのミスなんですけど、あちら側に片足突っこんだはずの人が、こっちに無理矢理戻

ってきちゃった。結果として、ちょっとした穴が開いちゃったんですよ」
「穴？」
「そう、穴です。まあ大してでかい穴じゃなかったから、あちら側の世界でも特別強い連中――ほとんど大物ばっかりがこっちに出て来ちゃいましてねえ、いや、ご迷惑おかけしました」
「……」
沖田は何も言えなかった。
「いや、めったにある事故じゃないですけどね。この一週間ばかり、この地域を担当してる案内人やら何やらが総出で修復にかかってます。今日中には彼女もあちらへご案内できるし、日暮れまでには全部おさまると思いますよ」
「じゃ、あの騒ぎは全部あいつが」
「いえ、彼女のせいじゃありません。好奇心ついでに出ていった奴が悪いんですよ。人間の精神的パワーってやつは強いですからね」
「で」沖田は上目づかいに案内人をにらみつけた。「その案内人が、俺に何の用だ」
「ご迷惑かけたお詫びに、規則違反ついでのちょいとしたサービスです。どうぞ」
男は、誰かを二重ドアの内側から手招きした。制服姿の彼女が、手を後ろに組んで恥ずかしそうにうつむいて出てきた。
「では、私はこれで」
胸に手をあてて一礼した案内人が消える。

「…あ…んーと」
沖田は言葉を探した。だがろくなのが見つからない。
彼女がぺこんと頭を下げた。
「あの、ごめんなさい。いろいろと騒ぎ起こして」
「結構楽しかったぜ」沖田は笑ってみせた。「えーと、お礼言わなくちゃな。温室の屋根からジャンプした時と、雪女の時。助かったよ」
うつむいていた彼女が、顔をあげた。
「うれしかった。沖田君の後ろ乗れて、走れて、一緒にいられて…」
学内で見た時は確かに実体で、ちゃんと重量感まであった彼女の体は、まるでフィルムのオーバーラップのようにぼやけていた。
「じゃ、さよならです」
またな、と言いかけた言葉を沖田は呑みこんだ。目をきつく閉じて頭を下げた彼女が、くるっと背を向けて走り出す。
「待て」
沖田は半実体の彼女の腕をつかんで振り向かせた。両腕をおさえる。
「悪いな。これくらいしか思いつかない」
沖田は、びっくりしている彼女に唇を重ねた。
彼女の見開かれた瞳が、ゆっくり閉じていく。

「あなたも奇特な人ですね」先を飛ぶ案内人が言った。「本当にいいんですか？」
「いいの！」
陽子は無理矢理笑って見せた。
「だってわたし、暗いのキライだもん。わたしのお墓の前にいる沖田くんなんて、想像しただけでぞっとしちゃう」
「わかりました。本当にお人好しですね」
案内人は笑ったようだった。
「じゃ、先に行ってて下さい。すぐ追いつきます。路はわかりますね、ここをまっすぐ」
星南学園高等部の一角に、見えるはずのない穴が見えた。陽子は口の中だけでつぶやいた。
さよなら…

「わかったよ」つばさに腕をつかまれた沖田は、ソファに戻った。「見ない」
「ありがと」
「どうしてもって、彼女のお願いでしてね」
座ろうとした沖田の前に、黒服の男があらわれた。
「誠にすみませんが、記憶の一部を消させていただきました。では」
沖田はうなずいて、それですべてわかったような気がして——実は、何もわかっていないのに

気がついてあわてて立ち上がった。
さっきそこにいたはずの黒服の男は、いつの間にか消えていた。
「……」
沖田は制服のポケットのタバコに手を伸ばした。ハイライトの箱と一緒に、何かが指にからまった。
何だと思って、出してみる。小さな銀のロザリオだった。
「なんだこれは？」
沖田は、なぜ自分がそれを持っているのか、わからなかった。

星南高校全域に吹き荒れた怪奇現象は、その日を境にぴたりと消えた。同じ日に、女子部の二年に在籍していた子が死に、沖田はそれに立ち会ったが、それについても何かおかしい事があるような気がしていた。
「まあ、怪奇現象なんてわからんもんだからなー」
翌日の朝、静かになってさびしいくらい、まだ雪の残っている洗面所で歯を磨いていた榊が言った。
「ほーかね」
歯ブラシをくわえた沖田が応える。
「そーだぜ。わからねーから怪奇現象ってんだ」

「ほーれでふか」
応えながら、沖田はポケットからロザリオを出して見た。
「何だ、そりゃ？」
「いや、なんでもない」
沖田はロザリオをポケットに入れた。

パターンB YOU MAY DREAM

ACT・1　予兆――爆発前

D・DAYマイナス3　PM4：30

「S（シーン）一八のフィルムどこやった」
「そこあるだろ。リールにナンバーふってある」
「どこだ、ねェぞ！」
「わあ、これNGのやつだ……こっち白身（しろみ）だよ」
「次ちょっとエディター拝借ね」
「ンなヒマあるか！」
「カッターはどこだあ」「ボンドがないぞ」「こら、ひとのジュース飲むな！」「ケチ」

D・DAY（D.DAY）学園祭初日を三日後に控えた星南学園は、戦場と化していた。メイン催事場となる講堂、体育館はもちろんのこと、各クラスとクラブに有志グループらが入り乱れる校舎、人間アドベンチャーゲームやサバイバルゲームなどのスケジュールでびっしり埋められた寮に至るまでが、全校に発せられた非常事態宣言に伴って二十四時間体制に入り、気違

いじみた突貫準備が続けられている。

そしてここ405号室では、2-Bの映画スタッフ一同が集合して、前日深夜やっと撮影して写真部にほうり込んだ最終フィルムの上がりも待たずに編集作業にかかっていた。

定員四人、住人三人の部屋に人間が詰まってわいわいと作業を続けている。床に座りこんでルーペ片手にフィルムをよりわける和田、編集用に、フィルムカッターなんて高級なものはないから安物のカッターでフィルムを切る真田、エディターを覗きこんで榊を助手(アシスト)に使ってフィルムをつなぐ沖田監督。部屋に散らばるビールの空(あ)きカンや空(から)のサントリーホワイト、ポテトチップの空き袋などは前夜のクランクアップ記念打ち上げの名残(なごり)である。

机の一つにのっているばかでかい沖田所有のラジカセからは、気分を出すため先ほどから映画音楽のカセットがかかっているが、ステレオのマンシーニに耳を傾けるほど余裕があるのは一人もいない。

「本当なら今日中に初号試写が出てるはずなんだぜー」

フィルムをライトにかざし、書き込みだらけのシナリオコピーと見較べてならべる榊がぼやく。

「明日中にアテレコ終わんのかよ」

「俺が知るか！」

寝不足で殺気立つ沖田が榊に怒鳴った。

「メインキャラの声さえ合わせりゃ、あとは一人何役でどーにでもなるわい！」

「最悪の場合、生アテレコつー手もありますで」
文字通りのカッティングという単純作業を続ける真田がのんびりと言った。
「無声映画（サイレント）にしちゃって弁士をつけるとゆー手も」
「やるとしたら演劇部の宮崎しかいねェが、どーせあいつも劇の本番が控えてんだろ」
「冗談。弁士やるのカントクの沖田でしょーが」
エディターを覗く沖田の手がぴたりと止まった。思わずにじみでる殺気にも気づかずに榊が次のフィルムを渡そうとする。
「どったの？」
「あんましくだんねー事ばっか言ってやがると、どーなるか教えたろか」
「ほー、教えるほどのヒマがあると見える」しゃかしゃかとカッターを動かす真田が言った。
「S－二〇までつなぎ終わったわけ」
「るせー。榊、次のカット！　一九のカット5！」
「ほれ」
榊が短いフィルムをぴろんと渡した。受け取った沖田がフィルム用ボンドで接続しようとした時――
「ん？」
沖田は顔を上げた。妙な顔でしげしげと窓をながめる。
「どったの？」

「視線を感じた」
「あん？」「ぷーっ」
「今誰かそこから覗いてなかったか？」
「窓から？　ここ四階だぜ」
言いながら榊は窓を開けて首を出した。冷気が部屋に吹きこんでくる。
「別にワンゲルかどっかが登壁訓練してる様子もなしと…」
沖田は肩をすくめた。
「気のせいか。寝不足だ」
「だったら仕事せい」真田が言った。「今日の夜明けまでにクレジットつながないと夜逃げしなきゃならなくなるぞー」

D・DAYマイナス3　PM6：30

小牧ノブは、透明リーフのファイルに入れたクラリネット用の楽譜を横目で見ながら、夕食を食べていた。
この時間帯の食堂はかなりのラッシュ状態である。女子校特有の一段高いトーンの騒ぎをかきわけるようにして、セルフサービスの盆を持った女子部新聞部編集長鳴海つばさが、脇にノートとレポート、口には赤ペンをくわえて現れた。
「ここ空いてるー？」

「ん、どうぞ」
足で丸椅子を引き出して、つばさはノブの隣に腰をおろした。手持ちの束をまとめて夕食の横に置く。
「なに、ブラバンの楽譜？　ルパン・ザ・サード―'80」
「今夜これやるの。Ｅからあとのがややっこしくてさー」
ノブはブラスバンド部にひきずりこまれていた。指使いはかなりトロいが良い音を出すので、いきなりクラリネットの二番（セカンド）パートに入れられている。
「うわ、ややこしそー。あたしは楽譜読めないんだ」
はしを割りながら、つばさは連符だらけの楽譜から目をそらして食堂備えつけのＴＶを見上げた。どこかのアナウンサーがニュースを喋（しゃべ）っている。
『昨夜午後七時ごろ、南太平洋大戸島沖で消息を絶った南海汽船所属の栄光丸、七千五百トンのニュースですが、新しい情報が入ったのでお伝えします。栄光丸捜索に向かった海上保安庁の備後丸が消息を絶ちました。現在大戸島付近の海域では航空自衛隊、海上自衛隊などが共同で捜索活動を行っておりますが、依然何の手がかりも見つかっておりません。
なお、防衛庁に入った報告によりますと、付近の海では異常に高い放射能が検出されたそうです。この件について捜査本部では、二隻の海難事故にアメリカまたはロシアの原子力潜水艦が何らかの形で関係しているのではないかと見て、アメリカ・ロシア両政府への照会を急いでいます。

次のニュースです。九州熊本県、阿蘇山が本日午後…』
噴煙を噴き上げる巨大なカルデラ火山の空撮が映ったところで、誰かがチャンネルを切り替えた。
「あーあ、替えられちゃった」
「ね、つばさ」ノブがTVを見ていたつばさに話しかけた。「編集長がこんな所でのんびりしていいの？」
「どーせ今日だけよ」
威勢よくトンカツをぱくつきながら、つばさは答えた。
「やっとこの前の怪奇現象の特集がまとまったからさ。明日からは食堂でまともに御飯食べるなんて出来なくなる」
「でしょーね」
「だけどタイミングが悪い」つばさはタメ息をついた。「よりによってこの騒ぎの寸前にあんな事やるんだもん。話題になってる間もないわ」

D・DAYマイナス2　AM2：30

「軒並み売り切れてやがらー。沖田あ、インスタントコーヒーしか残ってないぞー」
「こっちもチリトマトだけだ。フォークも全滅」
真夜中の男子寮金紺館、自動販売機コーナーの自販機は、売り切れを示す赤ランプばかりが並

んでいた。やっとフィルムをつなぎ終わって買い出しに来た沖田と榊は、仕方なく売れ残りのコーヒーとカップヌードルを買いはじめた。

さっきまで建材をかかえてたむろっていた連中がどっかに行ったので、見通しの効く廊下には誰もいない。一見静かそうだが、その実、他の所で動きまわっているのが何人いるやら。

沖田は一息つくと、ポケットから小さなロザリオを取り出した。細い鎖に提(さ)げられた小さな銀の十字がゆれる。

「沖田、キリスト教？　無神論者じゃなかった？」

自販機から紙コップ入りのコーヒーを出していた榊が覗きこんだ。

「いや」

「こないだからそれを持ってるね。何？　信心でもするの？」

「いや、そうじゃないけど、お守り…」

言ってから、沖田は前に同じセリフを聞いたような気がして考えこんだ。

「な、なんだーあ!?」

突然、榊が声をあげた。つられて顔をあげた沖田の目に、青白い顔に傷跡をのたくらせた頭でっかちの巨人が映った。

「フランケンシュタインじゃねェか」

「はんぐあ〜〜〜」

両手を振りあげたフランケンが、いささか間の抜けた声で叫んだ。その後ろから、今度はひょ

ろ長い白衣を着た、くさりかけた死体が出てきた。
「おー、ゾンビかあ」
「くおんぶわんうわー」
さらにその横に、長髪を振り乱し、あちこちに折れた矢の刺さった落ち武者が出現する。
「南部にドクトルに宮崎だろが！」
出現した三人の名前を、沖田が立て続けに指さしていう。
「簡単にばれやがんの」
よっこらしょと、フランケンシュタインのフォームラテックス製マスクを取った南部がつまらなさそうな顔をした。
「自然研は原爆実験をやると聞いたが？」
「この格好でご案内するんだってさー」
ドクトルも顔と頭の半分をおおっていたマスクをとった。
「また悪趣味なもん作って…」
「自然研各班合同で幽霊屋敷つくるのさ。幹部が真っ先に化け物役決められちゃってさ」
「演劇部で時代劇をやるとは聞ーとらんが」
血だらけの顔で器用に白目をむいていた宮崎に、沖田が向きなおった。榊が、
「耳なし芳一でもやるの？」
「思い起こせば壇ノ浦合戦の折…じゃない、墓場のシーンで幽霊やらされんだ、人数いねーか

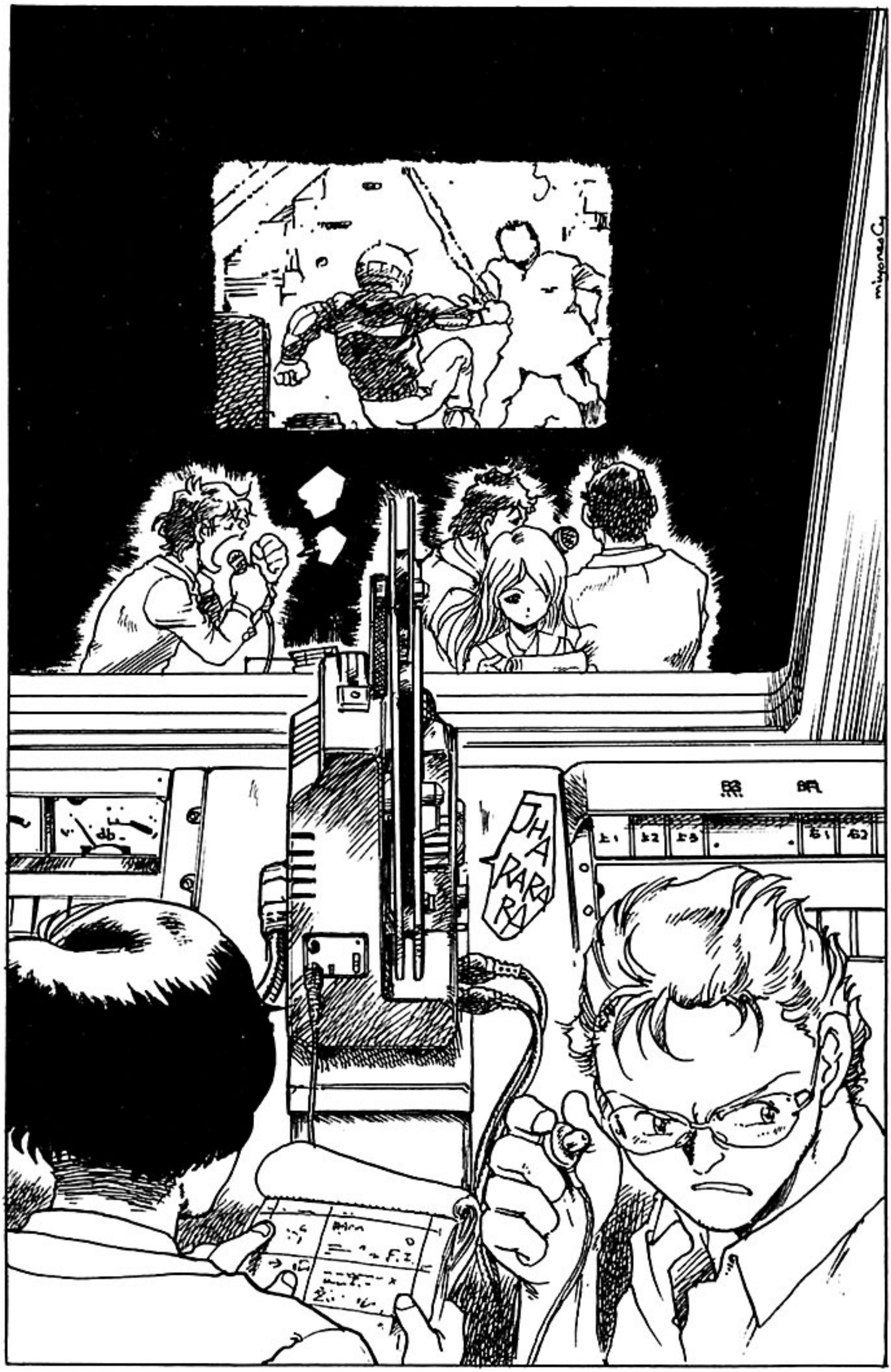
ら」
「肝だめしでもしてんのかよ」
「いや、あーゆー騒ぎの後だから本物と思う人がいるんでねーかと」
「悲鳴が聞きたきゃ、女子寮行きな」
「それも考えたけど、恐ろしくて」
「あ、映画の編集終わった」
沖田が南部に言った。
「明日アテレコやって音入れるから、宮崎！　てめーも時間空けとけよ！」
「空くかどーか」
「来なかったら、てめーに本番で弁士やらせたる」
「弁士だ？　何のこったそりゃ」
宮崎が訳のわからない顔をした。榊があわてて沖田をおさえこむ。
「何でもない、なんでもない」
「んじゃ次行こーぜえ」
南部はマスクをかぶりなおした。ドクトル松田も顔の半分にマスクをつける。
「本番はこれにケチャップかけるんだ」
ドクトルがマスクをおさえて言う。
「ハエがたかりそうでこあい」

「またな」
でかいフランケンシュタインの顔で、十センチは背が高くなった南部がすたすたと歩き出す。
後を追うように、くさりかけのマッドサイエンティストと幽霊武者、座敷童子が歩いていった。
四つの人影が、寮の廊下を遠ざかる。
「…南部とドクトルと宮崎と、誰だったけ？」
後ろ姿を見送る榊が考えこんだ。
「三人だけだろ」
取り出し口からカップヌードルを出した沖田が、廊下の先を見透かした。
「…四人だったか？」
「一人隠れてたのかな？」
「分裂して増えたとか、ドクトルのドッペルゲンガーかもしれねェ」
「まさか」

D・DAYマイナス2　AM9：00

大学部の放送学科のミキサールームでロケした、タイムパトロールのコントロールルームのつもりの部屋で、南部が宮崎にM16ライフルを改造したビームガンを向けた。
「しばらく寝ていてもらおう」
台本片手の南部が、画面に合わせて喋る。

「二度と目覚めることはないかもしれんが」
「寝てしまう訳にはいかないんだ」
画面の宮崎が腰の懐中電灯のような柄を引き抜いた。榊の口、効果音が入る。
「ぼうん」
必殺シネカリ（フィルムを直接ひっかいて傷をつける）の特殊効果による、ライトセーバーの光の刃が伸びる。
「そんなおもちゃが役に立つと思っているのか、わっはっは」
やにわにビームガンをかまえた画面の南部がトリガーを引いた。
「びしゅん」
「とあ！」
前方回転でカリグラフの光線をよけた宮崎が、同じカリグラフの剣で南部に斬りかかる。
「ぱしゅっぽあっびびゅんっぷしゅっ」
実際の収録ではM16のブローバックの音と、柄だけの剣のため、吹き出してNG七回という苦心の格闘シーンが続く。そのうち、南部が振り回すM16に剣をとばされた宮崎に、南部は沖田にさんざんどやされて作った〝冷ややかな笑み〟を浮かべて銃口を向けた。
「グッナイ」
「ばしゅん」
銃口から光は出ない。代わりに南部が強張(こわば)った表情を浮かべて、画面の外へぶっ倒れた。その


THA
RARA
RA
db

後ろでぼやけていたヒロインにピントが合う。
姫は、ぶるぶる震える手でモーゼル・ミリタリー改造の小型光線銃を握っていた。唖然としている宮崎が画面に映る。
「はやく…早く逃げて！」
台本と画面を交互に見上げていた姫が声を張りあげた。ふるえる右手を無理矢理光線銃からひっぺがして背の方向を指す。
「警備システムがあと五分で回復しちゃう！」
「ぴしゅうん」
ライトセーバーをおさめた宮崎が立ち上がった。
「この調子なら大丈夫だな」
アテレコスタジオの外の調整室で肘をついている和田が時計を見た。
「今日一日でなんとか終わる」
「だといいがな」
腕時計のアナログ式ストップウォッチを見た沖田が顔をしかめた。
「意外にミスしてるのが多いぜ。今日しかスタジオ借りられねーから、致命傷でもない限り録り直しはできないし」
アテレコ用に、コネ使いまくってやっと借りた高校放送部のスタジオ、使用期間は今日一日それも午後五時までである。他にも自主映画などのアテレコやダビングでスケジュールが詰まって

いるから、今日中にアテレコが終わらないと一部音なしで上映しなければならなくなる。
「もうすぐこのロール終わるんだ、ドジるんじゃねぇぞ…え？」
沖田は、誰かに呼ばれたような気がして腕時計から顔をあげた。右手で耳にあてたヘッドホンから、かなりくさいセリフが聞こえている。
沖田は横の和田に向いた。
「今誰か呼んだか？」
「誰も呼んでないぜ」
和田は金魚鉢（スタジオ）の中から目を離さない。
「ほら、まただ」
沖田のヘッドホンから聞こえてくるセリフに、舌ったらずな呼び声が混じった。
「何が」
うるさそうに和田が訊く。
「…こんな声出すのは…」
沖田はスタジオ内の俳優を確かめた。
子供のような声である。ブリッ子の作り声でもない限り、こんな声を出す女優はいない。
「誰だ？」
——沖田くん。
沖田は、はっとしてあたりを見回した。
「どうした、おい」

録音のため映画スタッフにひっぱりこんだ放送部の五ノ井が、沖田に声をかけた。
「誰かに呼ばれてるんだと」
員数(いんずう)不足のため、ほとんどのスタッフが俳優を兼ねている。調整室に残っているのは和田と五ノ井、沖田の三人だけである。
「どっかで聞いた声なんだ」
沖田は考えこんだ。脈絡もなく大温室のイメージが浮かぶ。
「こーゆー声出す奴、確かいたんだ…」
かなり身近な人物の声のはずなのに、沖田はどうしてもその声の主が思い出せなかった。

D・DAYマイナス2　PM2：00

「この記事、入れる場所間違ってるわよ。ジュン、レイアウトやり直して」
文化祭直前で、すでに日刊と化した学校新聞の割り付けにつばさは声を上げていた。男子・女子部合同の新聞部本部となった第三家庭科室は、締め切り寸前の修羅場と化している。
「おら急げ、直したらすぐ印刷室！」
人間ワープロの異名を持つ二年の十南(とな)女史が、レイアウト用紙をきれいな文字で埋めていく。つばさはコール音が鳴り出したハンディトーキーのヘッドホンを耳にあてた。
「ラストページ今やってるわよ。文句言わないであと五分だけ止めとけー！」
男子部職員室の横にある印刷室のスタッフがぶうぶう言うのを無視してスイッチを切る。

「終わり！」
記録的な速さでレイアウト用紙を埋めた十南女史が、悲鳴に近い声で机に顔を伏せた。
「一年走れー！」
「行きまーす！」
男子部の新聞部一年で、自転車部との掛け持ちをしているプレスライダーが、レイアウト用紙を背の通信筒に丸めてつっこみ、ＢＭＸ（バイシクルモトクロッサー）で廊下に飛び出した。そのまま階段をかけおり、校舎を横切って印刷室にレイアウト用紙を届けるはずである。本当ならバイクを走らせるところだが、さすがに自転車でないと学校側の黙認が取れなかった。
「こちら大本営、今ラストページがそっち行ったよ、あと任せたからねー」
ハンディトーキーに喚いて、つばさは室内にＯＫサインを出した。
「今日の号編集作業終わり！」
とりあえず戦闘を乗り切った編集スタッフが歓声をあげた。明日の朝食後の、明日分編集開始までは自由時間になる。――もっともそれまでに取材のノルマを果たさなければならないが。
つばさは、今まで食べそびれていた昼食のハンバーガーの入った紙袋を持って、編集室から出た。
「あーつかれた」
ポスターだらけになった階段を上がって、校舎の屋上に出る。美術部が学園祭当日に出るはずの大看板の色塗りをしていた。

つばさは、人気(ひとけ)を避けて屋上の給水タンクの向こうに行った。作りかけのハリボテが二、三体あるが、誰もいない。

涼しい風に吹かれて、つばさは手すりにもたれかかった。袋からハンバーガーを出してくわえて空を見上げる。抜けるような青空に、丸っこい雲がいくつか浮かんでいた。

「ん？」

遙か上空に、鉛筆のような細い胴体の四発プロペラ機が、いくつもの雁型編隊を組んで飛んでいた。

どこからか、神経にゆさぶりをかけるような音のサイレンが長く尾をひいて聞こえた。突然きなくさい風に吹かれたような気がして、つばさは視線を下ろした。

「……！」

むっとするような熱気が吹きつけてきた。辺り一面にかつて町だったものの残骸が散らばった荒野は、タールをばらまいたように焼けただれていた。

つばさは訳のわからぬままあたりを見回した。辺り一面焼け野原。所々にすすけたコンクリートや、溶けて形を失った鉄骨が転がっている。

誰かが、つばさの肩に手をおいた。つばさは思わず悲鳴をあげた。

「わ、なに？」

悲鳴に驚いたノブが、びっくりした顔でつばさを見つめている。はっとして気がついたつばさ

はもう一度まわりを見渡した。
給水タンクの鉄骨の脚の向こう側で、美術部が大看板の色塗りをしている。
「え…」
半分口を開けたまま、惚けたような表情でつばさはノブの顔を見た。
「どしたの？」
クラリネットを片手に持ったノブが、びっくりした顔で訊く。
「うわあ」声をあげたつばさは、ノブの肩に左手と額を重ねて伏せた。「妙なもん見たあ」
「な、なに、どしたの？」
「幻覚症状見た。わーんLSDだ麻薬だドラッグだあ」
「どうしたのよ、んとに」
「仕事に祟られた…わー」
わっとばかりにつばさは、ハンバーガーをぱくつきはじめた。ヤケ食い気味のハイペースである。
「だいじょーぶ？」
心配そうにノブが訊いた。
「大丈夫、ちょっとした寝不足、ははは」
ひきつったように笑って、つばさは乱暴に缶ジュースのプルタブを引き開けた。一気に飲み干す。

D・DAYマイナス2　PM4：30

「オーケー、第六巻目収録終了、ごくろーさん」
金魚鉢（スタジオ）内へのインターコムのスイッチを入れて、沖田が言った。
「で次は？」
「ないぜ」スクリーン・モニターの映写機のスイッチを切った和田が言った。「これだけだ」
「これだけ？」
二重ガラスの向こうから、榊が訊き直した。
「終わりだよ」
収録リストと記録ノートをめくった沖田がOKサインを出した。
「ちょっと待て、今最後の絵を出す。和田、用意は？」
「ちょい待ち……ん、できた」
南部がスタジオの内側からドアを開けた。
「早く来い、みんなの声を入れんだろ」
「おー」
明るくなった画面に、画用紙に書いたマット絵（2－Bの美術部員を総動員した力作）のラストシーンのラストカットが出た。続いてエンドマークが出る。
途端に、録音のレベルメーターが振りきれるような歓声がスタッフ、俳優全員からあがった。

「いゃっほー」「終わりだあこのやろー」「ぶあんざあい」「終わったあー！」「カントクのおーばかやろお」「もー映画なんかやんねーぜえ！」「わあお」「くあ――！」

クランクアップ後の集合写真にあたる映画終了記念の声を、エンドマークの一瞬あとに皆で入れて、2－Bの自主映画制作は完全に終了した。後は、内容がどうなっていようが気にしないで映写するしかない。

「明日七時に教室で初号試写だ！　ひまなら来いよー。教室の改装できてんだろな」

ぽんぽんと手をたたいて、沖田が言った。教室をシネマハウスに改造するのは沖田たちの役割ではない。椅子を持ち込んだりスクリーンを作ったりするのは、別のグループである。

「七時って夜の？」

「朝に決まってんだろが。前夜祭やってんのにちんたら試写してるヒマねえ」

「どーせ明日一日は会場整備に回されんだろうなー」榊が両手を頭の後ろに組んでうーんと伸びをする。「トンズラしよーかしら」

「今までさんざん苦労した映画スタッフだけごっそり抜けてもかまーねだろ」

ズタボロになったコピーシナリオをまるめた沖田が人指し指を立てる。

「ズラかろう」

「どーせ責任者の悪代官が文句言うだけだ」

真田がほいほいと乗ってきた。

「では明日一日はメインスタッフ一同は行方不明になるということで」
『はい二年B組一同様、只今でご予約の時間は切れました』
調整室から放送部の五ノ井がスタジオ内に呼びかけてきた。
『さっさと出てけー。でないと超過料金取るぞー』

D・DAYマイナス2　PM7：00

「どーも安定せんなー」
ばらぼんばらぼんとアイドリングを続ける二スト三気筒エンジンのキャブレーターから手を離した沖田が顔をしかめた。ナイター照明代わりのガレージライトにタンクの金色がきらきら反射している。
「かといってヘタして焼き付かせりゃえらいこったし」
自動車部の展示用と、アシ代わりに今年の夏かけて復元したカワサキ750SSである。時間があればデモ走行の予定もあるが、学校側の目をかすめるのが至難のワザである。
「ったく、四ストがうらやましいぜ」
「カワサキなんか相手にするからいけないんだ」
自動車部、航空部他の共同使用中の大倉庫、通称格納庫のすぐ外の駐車場の一角で、こちらはホンダCB750K0（もっともK0～K7までが入り混じっている）を再生した南部が言った。

「ホンダはいいぞー、出回ってっから」
「外車にくらべりゃ、まし……でもないか」
沖田はキーをひねってエンジンを止めた。
「ホンダもいいんだけどまともなんだよな、あそこは。ノーマルじゃつまらん」
「沖田はパワーさえありゃいいんだろ」
「あと燃費がよくて、できれば壊れないやつがいい」
「じゃ、SSみたいなキチガイバイク乗るな。…ん？」
夜風に乗って、ライトスタンドなどが持ち出された駐車場に重低音の効いたエンジン音が聞こえてきた。航空部が持ち出したオートジャイロに群がっていた数名が音の方向を向く。
「ハーレーかい、ま、うるせーこと……なんだ!?」
学校前の楡通りを、一台の古ぼけたオートバイが通り過ぎた。
唖然として見送った沖田は、天を仰いで目をおおった。
「いかん、アテレコに根を詰めすぎた」
「だめだ、役に熱入れすぎた」
顔を見合わせた沖田と南部は力なく笑った。
「今のW1見たか？」
「カワサキ650……片岡義男によく出てくるけど、見なかったことにしない？」
「したい……うそだ、フロントフォークのない幽霊バイクの首なしライダーなんか、こんなとこ

ろに出るはずがない」
「山岳部のワインディング専門の奴…んな市街地に出てくるもんか」
腹にひびくような排気音が遠ざかっていく。750SSの一文字ハンドルに手をかけて、よっと押し出した沖田は道から目をそらしてつぶやいた。
「まさか、また怪奇現象でも起こるんじゃ…」
格納庫へSSを押し歩きかけた沖田は、Wディスクにしたフロントブレーキをかけてバイクを停めた。何か気になることがあるような顔で女子部の方を見上げる。
「何だっていうんだ」
自分でも何を考えたのかわからぬまま、沖田はもう一度バイクを押しはじめた。

D・DAYマイナス2　PM11：25

「誰だ、いったいこんな時間に…」
榊はぶつぶつ言いながら、夜空にほんのり浮かび上がった大温室を見上げた。夜十時を過ぎているので太陽灯は全部消えているが、準備期間中のため夕暮れくらいの薄明かりがついている。歩き回るのに支障はない。
自主映画の上映会場となる2-B教室整備のため、という名目で十一時過ぎまで教室にいた榊は、寮の自室に戻るなり差出人不明のメッセージカードで呼び出された。
場所は大温室正面玄関、榊は首をひねりつつも、のこのこと出てきた。

星明かりしかない外に較べれば、まぶしいくらいの大温室正面玄関を駆け上がる。
「さっかきくん」
入るなり、榊は横から呼び止められた。後ろ手にファイルを持ったノブがドアの横にもたれていた。
「呼び出したの、ノブ？」
榊が目を丸くする。ノブはあっさりうなずいた。
「今何時だと思ってんだよ。一人で出歩く時間じゃないでしょ、危険知らずめ」
「ごめーん」ノブは少し怒ったように口をとがらした。「じゃ、送ってよ」
「はいはい。で、何？　こんな時間に」
「だって、これくらい遅くないと会えないんだもん」
「高二の秋にクラブかかえてりゃねー」
突然、榊はまじめな顔になって玄関の外を見渡した。
「どしたの？」
「つけられてねーだろな。毎度毎度、覗かれてんだ、そーそーネタにされてたまるか」
「いる？」
ノブまで顔を出す。榊は首を引っこめた。
「見えない。大丈夫と思うけど、中行こう、中」
榊は歩き出した。ファイルを小脇にかかえたノブが小走りに後を追う。

「こないだから大事そうに持ってるけど、そのファイルなに？」
「楽譜」ノブはファイルを広げて見せた。「と、あとプログラム。今ごろになってアドリブやれなんて言うんだよお」
「ご苦労さん。オープニングでバンドドリル、応援団とやるんだろ、期待してるよ」
「こわーい。あーん、プレッシャーかけないでえ」
太陽灯こそ消えているものの、通路には足元に間接照明、所々に木々に混じった街灯がたっている。黄昏時くらいには明るい。
「で、どしたの、突然？」
少し先で歩調をあわせて歩く榊が訊く。ノブは小走りで隣になんだ。
「なんとなく。…怖くって」
「怖い？　何が？」立ち止まった榊がきょろきょろと辺りを見る。「別に何もないぜ」
「そーゆーんじゃないの。よくわかんないけど、何となく。あのさ、身の回りが全部夢みたいに消えちゃいそうな感覚って、ない？」
「またポルターガイスト地震もあるっての？」
「そーゆーんじゃないの！」
じれったそうにノブは、榊の腕をファイルでぶった。
「わかんない、こういう感覚？　なんとなく不確かで、消えちゃいそうで、いなくなっちゃいそうで、出てきちゃいそうで…」

「分裂症気味だな」
「いじわるう」
「疲れてんでしょ、練習しっ放しで。あさってからだもんね、文化祭」
「そうかなあ。…だって、そういうの、怖いって思う？」
「さあ」
「あのさ、おかしいのよ」
もどかしそうな顔で、ノブは爪をかんだ。
「今はしっかりしてるんだけど、そのうち全部ふわふわになっちゃいそうで」
「さーてますますわからなくなってきたぞー」
榊がわざとらしく考えこんだ。
「いやな夢でも見たの？」
「最近はぐっすり寝てます。眠くって」
「ほななんじゃいなー。ノブが予知できるほど敏感だとは思えないし」
「ふんだ、どーせ」
「予知能力か？」
「自分でもそんなことできないと思うよお」
二人は、薄暗く浮かび上がる熱帯ジャングルの中を歩き出した。
「月から飛んで戻ってきたんだぜえ。もうあとは何も怖いことなんかないと思うけど」

「あたし、学園祭の初日が怖い」
「あっそ」はずされた榊が息をついた。「心配することないと思うけどねえ」
「だって、何となくおかしいんだもん」
言葉を探すように、ノブの声が沈んだ。
「この前の怪奇現象やお伽話(とぎばなし)が出てきちゃったのだってさ、結局わかんないし……でも、何かもっとすごそうな事が起こりそうで」
「あれよりすごい事ってのがあるのかね」
「わかんない。だから怖くって」
突然、榊が立ち止まった。先に行きかけたノブが振り向いてちょっと首を傾げる。
「どうしたの？」
榊は、しーっと人指し指を口にあてた。
「どーもおかしい」
肩ごしに後ろを見た榊は頭を抱えた。
「やっぱり、また来てやがる。どーしてくれよー、あの連中は！」
「？」
訳のわからない顔をしているノブをおいといて、榊は振り向いて喚いた。
「ばれてんだよ。出てこい、真田と沖田！」
「やー、また見つかったあ」曲がり角の木陰から、真田が両手を上げて出てきた。「撃たないで

くれ」
「一応止めた」
もっともらしい顔をして、沖田が出てきた。腕なんか組んでうなずいてみせる。
「いい趣味じゃないとは言ったが」
「どーしてそう燃えやがんだよー」手すりにもたれた榊が横目で二人をにらみつける。「寝不足じゃあ寝るぞーって騒いでやがったのに、ずいぶんと元気じゃねえーか」
「尾っけて下さいと言わんばかりの抜け出し方するからだよ」
真田が目をそらして言い訳をする。
「寝たふりしてから忍び足で出てくんだ、いやでもつけたくなるぜ」
「いーかげんにしろよてめーら」
榊は真田と沖田に正面から向き直った。
「好きなこと言いやがって、乗馬部に頼んで蹴とばしてやろーか」
「一応止めたんだがな」
「うそばっか、沖田の方が先に気がついたんだ」
「俺は何かと思っただけだ。動き出したのは貴様じゃろがー」
「やめえい！」頭を抱えていた榊が喚いた。「何度覗きゃ気が済むんだ！」
「あー、榊一人で楽しむ気だ、ずるいぞお」
「あのな」

「ああ？」沖田があさっての方向を見上げた。「なんだ？」
「楽しむってのは何だよ！　…沖田どうしたの？」
「今誰か俺のこと呼んだ…」
つぶやいた沖田が、上の階層の回廊を探す。
「何か聞こえたか？」
「いや」
榊と真田が顔を見合わせた。榊は後ろのノブに顔だけ向けて目で訊いた。ノブはあわてて首を振る。
「幻聴か？」
「また呼んだ。聞こえねェか？」
一人芝居でもしてるように、沖田が聞こえない呼び声の主を探す。
「訳のわからん事やってごまかすつもり…」
「いた」
ずいぶんと遠くのキャットウォークから、女の子が一人、乗り出すようにこちらを見ている。
遠過ぎて表情まではよくわからない。
「誰だ、あれ…」
「どこだどこだ」
「あそこだよ、上から二番目の」

「どこだってば」「見えねーぞお」
「いるじゃねーか、あそこに一人で…え!?」
沖田は我が目を疑った。二、三度目をこすって目の前の手なんか見てから、もう一度遠いキャットウォークを見上げる。
「…消えやがった…」
一瞬絶句した後、榊と真田が笑い出した。
「まただ、沖田の幻聴」「禁断症状だよこれは。沖田、欲求不満だろ」
「誰がだこの！」
笑う二人をどやしつけてから、沖田は自信なさそうに頭をおさえた。
「やっぱ寝不足かなあ」

D・DAYマイナス1　AM2：43

「機首前部で二〇〇〇度C突破！」沖田はやけくそに喚いた。「さらに上昇！　とっくにレッドゾーンだぜい」
「わあっとるわ！」
やかましく鳴る警報と、機体と空気との擦過音に消されないような大声で平沢が怒鳴り返す。
減速によるGがじりじり増加する。同時にシャトルの震動も激しくなっていく。
「機体が分解するぞ！」

「させてたまるか！」
機体の警告灯はとっくに点きっ放しになっている。イオン化した炎に包まれたシャトルがいつバラバラになってもおかしくない。
榊は自分の体が燃えているような錯覚に襲われた。操縦室の温度が上がっているような気がする。
「えーい、うるさい！」
金切り声をあげる警報に平沢が喚いた。
「破損箇所がどんどん増えてる！」
「当たり前だ！」
あちこちから爆発するような音が聞こえだした。
「なっなんだ!?」
「まずいですよこれは」
沖田がしかめっ面でパネルをたたいた。
「あっちこっちのセラミックのタイルがはがれ出した…まだ終わんねーのか探偵！」
「終わるか！　えいくそ反応が悪い！」
「後ろの羽根危ない！」
つばさが叫ぶと同時に、ひときわ高く警報が鳴り出した。
「垂直尾翼が!?」

構造材が不吉な音をたてた。まるで巨人の腕に抱きしめられたように、シャトルが悲鳴をあげる。

「な…なんだ！」

無理に押さえつけていた操縦桿が、平沢の手を振りほどくように暴れ出した。

「何が起きた、どうした！」

「はっ羽根がぁ」

構造材が引きちぎられるような音をたてた。手応えがなくなった操縦桿が平沢の手の中で黙りこくる。

一瞬、すべての警報が止まった。妙にシーンとしたコクピットに激しい炸裂音が聞こえた。途端にコクピットが傾き出す。

「両側、ちぎれた…」

つばさが唖然とつぶやいた。沖田が叫ぶ。

「主翼が持ってかれたぞ！」

今度こそ、気違いみたいに警報が鳴り出した。翼を失ったシャトルが、だしぬけにプラズマの炎に沈むように姿勢を変える。垂直尾翼が負荷に耐えかねてちぎれ飛ぶ。

「分解する！」

スピンを開始したコクピットの中で、平沢が用をなさなくなった操縦桿をたたいた。つばさが悲鳴をあげる。榊はぐったりしたノブを抱いた腕に力を入れた。

窓から見える光が強くなった。スピンする機体の中で六人が振り回される。部品が光のなかに飛び散り出した。

あまりの高温に機首が溶け出した。

「わあ！」

くずれおちたフロントグラスからプラズマ化した炎が操縦席に突出した。轟音の中で逃げ出す間もなく、パイロット席の二人が消えた。

熱さを感じる間もなく、二〇〇〇度以上のプラズマが残り四人を蒸発させる。

「うわあ！」

榊はふとんを飛ばして起き上がった。じっとり冷や汗をかいた顔で、きょろきょろとまわりを見る。やっと映画制作が終了して、雑然と散らかったままの４０５号室である。

榊はふとんを上げて、自分の体の無事を確認した。大きく息を吐く。

「あー、びっくりしたー」

「よー、どーした？」

ベッドの上段から、真田が逆さになって顔を覗かせていた。榊は枕元のスタンドのスイッチを入れた。

「おかしな夢見た」

「どんな？　まさか月から帰ってくる途中でシャトルごと燃える夢？」

「よくわかったね」

「ほんとかよ」
二段ベッドの上段から、真田が飛び降りた。
「ほんとかよってのはどーしてだよ」
「わしの夢と同じだ」
「なに!?」榊はベッドから出た。「突入スピードが速過ぎて、シャトルがあっちこっちぶっこわれ出す夢か!?」
「んでもって、ぐるぐる回りはじめて、前がぶっ壊れて火が吹きこんでくる夢だ」
「同じだ。冗談じゃない、何だこれは」
「それでみんな蒸発しちまう夢か」
突然、沖田の声が聞こえた。向かいの二段ベッドの上段で寝ていた沖田は、目の前の天井にはりつけた〝レイダース〟のポスターをにらみつけていた。
「あーら、起きてたの」
「今覚めたばっかりだ」
沖田はベッドに半身を起こして下の二人に体を乗り出した。
「おまえら、本当にそんな夢見たのかよ」
榊と真田は顔を見合わせた。
「本当に同じ夢か？」「こっちこそ聞きたい。ホントのほんとに同じ夢？」
三人は、ああだこうだと喋り出した。三人が見た夢に、大した食い違いはなかった。

「さーて、こりゃどーゆーわけだ」沖田はしかめっ面で腕を組んだ。「ここんとこ忙しくて、あんな事なんぞ思い出しもしなかったんだが」
「オレだってそうだよ。帰るなりサボった分の埋め合わせと映画作るのに巻きこまれて」
「わしも、すっかり忘却の彼方にぶっ飛んでた」
「それが何で今ごろになって」
「俺が知るか」
「集団幻覚ってやつかなあ」
榊が考えこむ。沖田はベッドにひっくりかえった。
「集団は確かだが、幻覚じゃねェ。夢だ」

D・DAYマイナス1　AM7：00

「こらー、足踏むなあ！」「まだカーテンしめんじゃねえ。接続終わってないぞお」「待てこら、フィルム違う！」「スクリーンがゆがんでる！」「台もゆがんでる」「わざわざあわせたのか？」「まさか」「ぐだぐだ言ってねーで早く直せ！」「上映はまだかあ」「遅いぞー」「眠いぞー」「寝るぞー」
黒板にスクリーンを張り、机を教室の後ろ半分につめて上映会場の基礎工事くらいは終了した2－Bの教室には、予想外の人数が集まっていた。早朝試写にもかかわらず、口コミで2－B及び映画スタッフ以外の連中（エキストラ）まで来たらしい。

「盛況ですな」
前から二列目の中央に陣取ったトランペット片手の沖田が、朝食のホットドッグをくわえたまま隣の南部に言った。
「本番でもこれくらい集まりゃいいんだが」
「至る所で自主映画やってっからなー」
こちら、コーラのふりして実はコークハイ（ウイスキーのコーラ割り）の紙コップを持った南部が、くるりと指をまわす。
「知ってっか。昨日の新聞出てたけど、催し物じゃ幽霊屋敷と自主映画が食い物屋おさえてトップ争いだぜえ」
「んでもって、映画の八割ＳＦだって知ってる？」
後ろにいた榊が乗り出してきた。
「なんだそれは」
「マン研の自主アニメは当然として、映研が模型部と組んで特撮付きのスペオペやるし、女子部じゃファンタジー作ったのもいるってさ」
沖田はげっそりした顔で正面スクリーンを見て――顔色を変えた。頭を抱える。
「やー」
榊は、つばさと一緒に教室の前から入って来たノブに手を上げた。
「遅かったじゃない、どうしたの」

「ちょっと寝不足」
ノブは榊の隣の椅子に入って来た。はれぼったい目をして腰をおろす。
「てめーはどーして来やがった」
仏頂面(ぶっちょうづら)で前を向いたままの沖田が、後ろに座ったつばさに訊く。
「取材でも付き添いでも暇つぶしでも何でもいいわよ」
「寝不足って？」
榊が、眠そうに目をこするノブに訊く。ノブは榊に顔を向けて笑ってみせた。
「変な夢見ちゃって」
「ゆめ!?」
榊は声を上げた。沖田が半分だけ振り向く。
「どんな？」
「あのね、宇宙船で地球戻って来る時の夢。よく覚えてないんだけど、事故みたいので燃えちゃう……どうかしたの？」
ノブは、わなわな震え出した榊の顔を不思議そうに覗きこんだ。
「あたしも同じの見たのよ」つばさは椅子に背を深くもたせかけた。
速過ぎて、スペースシャトルが壊れ出す夢」
「突入した時のスピードが
「へふっしぎしーぎ摩っ訶不思ー議ふうわあ」
榊がいきなり歌いながら踊り出した。彼なりの驚きの表現である。ノブはキョトンとして榊を

みつめた。
「どうしたの？」
「同じ夢見たんだよ」
正常に戻った榊がノブの腕をつかんだ。
「いつ!? 何時ごろ！」
「えーと、つばさ、何時だった？」
「三時少し前だったかな、夜中の。同じ夢ってどーゆーことよ」
「オレたちも同じ時間くらいにそんな夢見てたんだよ、三人揃って！」
「それ…」ノブは目を丸くした。「どういうこと？」
「知るか。探偵の奴も悪い夢見に悩んだろうよ」
実はこの時、平沢探偵は仕事でペルシャ湾をうろついており、日本時間深夜三時ごろは国籍不明の潜水艦（一説よると平沢の仕事に関係ないはずのSCFのいやがらせ）を相手に高速魚雷艇でドンパチやっていたという。当然、夢なぞ見ていられる余裕はない。
「じゃ、あの時シャトルに乗ってた全員が同じ夢見たってのか？」
「それ以外考えられるか。――それも、同じ時間に、な」
「例の学校サボって月旅行やってきたって、あれか？」南部は背もたれに肘をついた。「何の話？」
「好きでサボったわけでも、行きたくて月くんだりまで出掛けたわけでもねェ」

「よくゆー」
連中が月まで行ったことなど本気では信じていない南部が、横の沖田にいやし目をくれた。
「んな良い事すんのに誘ってくんねーんだから悪い夢見るんだ」
「あのな…」
『あー、マイクテストマイクテスト――入ってるか？　入ってる、えー、皆さんお待ったせいたしました』
自室にステレオを備えている寮生から強制的に供出させた数組のスピーカーから、宮崎の声が流れ出した。手空きの者が黒のカーテンを閉めにかかる。
『只今より二年B組星南高校文化祭参加作品、監督沖田玲郎氏、主演は私、宮崎由紀と霧野深雪嬢によりますSFアクションラブロマンス、〝クレオパトラに投げキスを〟を上映いたしますが、その前に沖田監督から一言』
予告も何もなしに自分の名前を出された沖田が仰天して喚いた。
「言わん！　何にも言わねえぞおー」
『えー、沖田監督からの一言でした』宮崎は素知らぬ顔でナレーションを続けた。『では、只今より〝クレオパトラに投げキスを〟上映いたします。最後までどうぞごゆっくりお楽しみ下さい』
トランペットを構えた沖田は、いきなりファンファーレを吹き鳴らした。上映直前に鳴らすはずのブザーが調達できなかったための窮余の策である。

部屋の証明が消され、二、三秒スクリーンが白く浮かんだあとに、黒地に白い文字でタイトルクレジットが出る。誰からともなく拍手が起こった。

D・DAYマイナス1　AM7：35

『二年？　三年？　それとも百年？　時の彼方にいってしまうあなたを、どうやって待てばいいの？』

画面は、撮影のNG記録を持つ、最後（オーラス）のクライマックスのラブシーンに入っていた。和田がわざと逆光気味に撮った画面の左右で、宮崎と姫こと霧野深雪が向かい合っている。

榊は、隣のノブとつばさの向こうに座っている姫の顔を盗み見てみた。ストレートヘアの間に見える耳まで真っ赤にした姫は、両手で顔を覆ってうつむいている。

『たとえ百万年前の原始時代からでも、最終戦争の後からだって、ぼくは君を目指して帰ってくるさ』

ウケるためにクサイセリフに徹するという（「どーせ学芸会よ」沖田・談）指示で、榊が目一杯乗って書いた（そのためNG続出になった）台本の通り、アルコールまで動員して開き直った演技が続く。

『だから君は、待っていてくれ』

熱演する宮崎なんぞほっぽって、和田をはじめとするスタッフの趣味で泣きそうに悲しい表情の姫のどアップが映る。

「――あわあ」
榊は妙な声を上げた。あわてて正面の沖田の背をつつく。
「お、おい、例の女の子また映ってたぞ！」
「何のことだ？」
前を向いたままの沖田が小声で返事する。
「例の、ラッシュの地震のやつに三コマだけ映ってた奴、お姫様に重なって一瞬だけ乱反射みたいに」
「……」
突然の榊の言葉に、沖田は考えこんだ。もどかしいぐらいもつれた記憶の奥から、誰かが出てきた。
「――ああ、ひじまようこか…」
「シッ！」
斜め後ろのつばさが、鋭い声を出した。それきり会話が途切れる。だが、沖田は、去って行く宮崎を一人追う姫の後ろ姿を見ながら必死で考えていた。
――ひじまようこ……誰だ？

D・DAYマイナス1　AM8：00
エンドマークの歓声のあと、NGフィルムをバックにして、同じ名前が何度も出てくるクレジ

ットが延々と続く。うけてるのかよくわからない歓声のあと、やっと白くなった画面に、観客は最近学内で流行している立って拍手をしてくれた。

スタッフ一同が観客席や映写機の横で、上映中に気がついたフィルムのミスも忘れてじーんと喜んでいる中、一人沖田が動き出した。観客席を乗り越えて、映写台に行く。床に両足を踏ん張り、両手を握りしめて天井を仰いで感動ポーズなんかしている和田に声をかけた。

「おい、残りのフィルムどこやった？」

「――カットしたフィルム？」

「NGフィルムだ。あのポルターガイスト地震の時余分に回したやつ」

感動ポーズの和田が、やっと沖田に顔を向けた。右手を出す。

「握手。いやカントク、おれたち映画作ったんだなあ」

「あー、おめェのカメラも大したもんだったよ。フィルムどこだ？」

「おれたちの映画だぜ、また作ろう――フイルム？　おれの部屋のボッフィルムの箱の中」

「サンキュー、探させてもらうぞ」

沖田は和田の手を振りほどくと、教室から飛び出していった。

D・DAYマイナス1　AM10：30

女子部の中庭では、男子・女子部合同のブラスバンド部隊が翌日に迫ったオープニングセレモニーのバンドドリルの練習をしていた。楽器を鳴らしながら縦列や横列になって歩きまわり、形

を作ったりする練習である。
学校バンドの例にもれず女子を主力とした編成のため（と、表向きはそういうことになってるが、実はものぐさが揃ってるため）バンドドリルなどという重労働にはかなりの抵抗があったのだが、バトン部の同時参加という事で男子勢の大部分が決行派にまわり、オープニング参加が決定したという。
という訳で、オープニングに選曲されたJ・ウィリアムスのスター・ウォーズのテーマが今やっと終わりかけていた。このテーマに乗せて、空にレーザーホログラムで文字を書こうという計画もあったのだが、昼間にはっきりレーザーを見せるには莫大な量の煙（スモーク）が必要になるということで中止になったらしい。
やっと最後の和音を合わせ、演奏が終わる。指揮杖を持った三年が、片手のメガホンで叫んだ。
「よーし、今の調子忘れんなよー。休憩」
それぞれに気をつけの姿勢で楽器を持った楽員の隊形がどっと崩れる。
「ひえーいCパートどじったあ」「裏（お）メロディ（か）ー（ず）の指が動ききらないよお」「グリースある？貸して」「つかれたぞお」「部屋戻って寝よ」
「あ…」
楽員の群れから抜け出したノブは、渡り廊下にいた榊に気がついた。軽く手を上げた榊に笑顔を返し、クラリネットを小脇に抱えて来る。

「どうしたの？　教室の飾り付けは？」
「逃げてきた。昨日アテレコの時、みんなでパスするって言ってたでしょー」
「あー、いけないんだー」
ノブは榊のまわりを見回した。
「一人？」
「一人。どうして？」
「いっつも真田くんや沖田くんと一緒でしょ。今日は別々？」
「たまには別行動取りますがな。えーと、真田は確かフィルムのチェックしてた。沖田は知らない。いろんな所顔出してるんでしょ、きっと」
「ふうん」
聞いてたノブは、ふと振り向いた。渡り廊下の向こう側から、小型ラジオに耳を傾けたつばさが現れた。
「おー、沖田がいないと彼女も普通に見えるなあ」
「あら、お二人ご一緒？」
「相変わらずお忙しいそーで。沖田なら金紺館よ」
「いるか、んなもん！」
つばさは榊に喚いた。
「何聞いてるの？」

「学内のミニFM局のテスト放送と、新聞部の無線と、ニュース」
「音声多重…よーやる。何か面白いのある？」
「榊が面白そーなねえ…午後から大学の方でミニロケットの打ち上げリハーサルと…」
つばさは考えこんだ。ラジオに耳を傾ける。
「あと…なに？　駿河湾の方でばかでかいタマゴが流れついたって」
「なにそれ」
「静ケ浦…えい何がこの季節に台風の落とし物だ…ん？」
突然、つばさは顔をあげた。鋭い目付きで女子校舎を見る。ノブがキョトンとして、
「どうしたの？」
「正面玄関で事故!?　構造材がぶっ壊れて、二、三人取り残されてるって！」
つばさはマイクを引っ張り出した。
「こちらガルウィング、誰、残されてるの!?――花つけてた、華道部の主要スタッフ？」
「姫！」ノブが声をあげた。つばさと榊の腕をつかむ。「姫、確か華道部でしょ。玄関の飾り付けで高い所登らなきゃいけないから、怖いって言ってた…え？」

D・DAYマイナス1　AM8：01

「沖田は何をあわてとるンだ」
あわただしく教室を飛び出していった沖田を見送った榊が、和田と握手をしながら訊いた。

「さあね」掌(てのひら)で顔をこすった和田は、沖田が消えたドアを見た。「NGフィルム探すってさ。何考えてんだ」

「さあ？　…ん？」

誰かがシャツのすそ引っ張っている。榊は振り向いた。ノブがうつむき加減の顔で指をかんでいる。

「どうしたの？」

「昨日の、温室で――覚えてる？」

「何の話だ…温室？　ああ、わかった、ちょっと外へ出よう」

気がついた榊は、あわててノブの腕を引いて教室から廊下へ出た。和田が、また訳のわからない顔で二人を見送る。

「で、何の話？」

行くあてなしに廊下を歩き出した榊がノブに訊いた。ノブは、口元に指をあてたまま考え考え話し出す。

「あのさ、聞こえた」

「ああ？」

榊はキョトンとして立ち止まった。

「あのさ、訳わかるように話してくれない？」

「うんとね、昨日、大温室で沖田くんが聞こえるって言い出したの、覚えてる？」

「あー、あれね。あいつ最近欲求不満なんだよ」
「空耳かな、と思ったんだけど、聞こえたような気がしたの、わたしも」
榊はノブの顔を見直した。
「なに？」
「――沖田くん、って。忘れてたんだけど、また聞いて思い出したの」
「『――沖田くん』ねえ。まあ、あいつ、かくれファンクラブがあるっちゅー話だからなあ……ちょっと待て、いつ聞いたって？」
「いま。映画のエンディングで、みんなで声入れたでしょ」
榊は、エンドマークと一緒に入れた歓声を思い出した。各自で好き勝手な事を喚いていたので、やかましいったらなかった。
「あれが？」
「あの中に聞こえたの。沖田くん、って」
「――誰だ？」
榊は考え込んだ。あのアテレコスタジオで沖田のばかやろーと喚いた奴はいたが、しおらしく「沖田くん」などと言っていたのは。
「んなの、いなかったよ」
「でしょ」ノブはうなずいた。「でも、聞こえたの。どうしてだろ」

D・DAYマイナス1　AM8・30

「あいつ…」

みかん箱に満杯となった数知れぬNGのクズフィルムをひっかき回しながら、沖田は毒づいた。

「整理くらいしとけってんだ！」

散らかしっぱなしの和田の部屋――407号室で、沖田はすぐにボッフィルムの箱を発見した。ドアを入るなり蹴とばしたダンボール箱が、それだったのである。

NG続出のため、本編よりはるかに多いというボッフィルムは、あとでみんなで記念に分けるという事でまとめてみかん箱にほうりこんであった。たかが幅八ミリのフィルムが、長さバラバラで箱を満たしているのである。

和田愛用のばかでかいルーペは、机の上の雑誌の山に埋没していた。遠視気味の沖田はトンボメガネを額に上げ、やっと掘り出したルーペ片手に膨大な量のフィルムと格闘していた。単純計算で一時間分としても、八万コマ以上のフィルムから目的の三コマだけのフィルムを探し出すのである。

「こいつはS（シーン）－一二、こっちはS－一八と…えーいあの和田無茶苦茶なカット割りしやがって、どうして妙なフィルムばっかこんなに…あった！」

沖田はやっと目的のフィルムを探し出した。S－二三、撮り直し分のあと和田が余りを使って撮影した、謎のポルターガイスト地震のフィルムである。沖田はルーペを覗いたままフィルムを

流した。後半、一人で写っている姫の後ろ――

「こいつだ！」

叫ぶなり、沖田はエディターが置いてある自分の405号室へ走った。一つおいたドアを開けて飛び込み、机の上のエディターにとりついてもどかしくフィルムをセットする。

スイッチを入れると、さして大きくないスクリーンにフィルムの一コマが浮かびあがった。

「もっと先だ」

フィルムを流す。二、三回フィルムを手で動かして、止める。無断持ち出しのループで画面をアップにする。

「こいつだ」

姫の向こう側、玄関のガラスに映るようにして謎の三コマ少女がいる。

「こいつ」やっと見つけた目的物に、しかし沖田は考え込んだ。「何者だ？」

D・DAYマイナス1　AM9：00

大温室は、むせかえるような緑の熱気で満たされていた。沖田は最上層のキャットウォークから、ぼんやりと熱帯ジャングルを見下ろしていた。

ほんのわずか前――学園祭準備に振り回されていて思い出す間もなかったから、とてつもない昔の事のように思える。しかし紛(まぎ)れもなくほんのわずか前――高等部を中心として起きた群発怪奇現象。沖田はあの大騒動の只中で、古い英語を話す自称ドラキュラ伯爵という怪物をバイクで

追いかけていた。
「誰かいたよな…」
あやふやにつぶやいた沖田は、ズボンのポケットに手を入れて歩き出した。
「ん？」
冷たい感触が手にからまった。沖田はポケットから手を出して、目の前にかざした。小さな銀のロザリオが十字形の光を放った。
沖田はしばらくそのロザリオを見つめていた。それを見ていると、わからないはずのことがわかるような気がしてくる。
「……」
沖田は、ふと誰かの気配を感じて振り向いた。このくそ暑い大温室の最上層で、さして暑くもなさそうに黒服を着た男が歩いていた。眼深に帽子を被った男は、何か片付けなければならない用事があるようにせかせかと歩いて来た。再びロザリオに目を戻した沖田は、男が自分の後ろを通り過ぎようとした時になって、はっとして声をかけた。
「あの」
「はい？」
立ち止まった男が、沖田に向いた。沖田は男の表情を読み取ろうとした。
「どっかで、会いませんでしたか？」
「さあ？」

男は、時計を気にしながら気のない返事をした。それしか言わない。
「すいません、失礼しました」
「いいえ」
男はかすかに笑ったようだった。すぐにせかせかと歩き出す。沖田はぼんやりとその後ろ姿を見送った。角を曲がった男の影が見えなくなってから額に手をあてる。
「間違いねェ。絶対どっかで会っているぞ、あの男…」

D・DAYマイナス1　AM9：35

「何探してんだ？」
男子部新聞部部室に来るなり、備え付けの名簿を繰りはじめた沖田に、鉛筆を耳に挟んだ和田が訊いた。
「人探し」
沖田は顔を上げもしない。女子部、は行の人名を片端から調べている。
「誰探してんだい」
今度は返事なし。和田は軽く沖田の背をたたいて仕事に戻った。
「こいつだ」
手を止めた沖田に、和田は何だと思って顔を上げた。
一年三組、氷島陽子、３４７号室。

沖田は不思議な思いで名簿の活字を見つめた。確かに見覚えのある配列である。
「どーでもいーけどよお、沖田」
和田は声をかけた。沖田はじっと名簿のページをにらみつけている。
「それ、去年の名簿だぜ」
「――去年の？」
沖田はあわてて表紙をひっくり返した。去年度の年号が書いてある。
「今年のは!?」
「ない」和田は即答した。「ちょっと前に誰かが持ち出して、それっきり戻って来てない。沖田知らない？」
「俺が知るか」
「まともなのが見たけりゃ事務室にでも…」
「いいよ、邪魔したな」
沖田は名簿をぽんと閉じて立ち上がった。〝整理整頓〟と破れかけた張り紙のしてある、その言葉を忘れ去ったような資料棚に名簿をつっこんで、新聞部部室から出ていく。

D・DAYマイナス1　AM10：30

女子部の中庭では、男子・女子合同のブラスバンド部がここ一週間ほど日課となっているオープニングセレモニーのバンドドリルの練習をしていた。最後の隊形をつくり、和音をあわせて演

奏が終わる。指揮杖を持った三年が、片手のメガホンで叫んだ。
「よーし、今の調子忘れんなよー。休憩！」
ぴしっと決まっていた隊形がどっと崩れた。飛び交う声と人の波から抜け出たノブは、渡り廊下に手をついてこちらを見ている榊に気がついた。軽く手を上げた榊に笑顔を返し、クラリネットを脇に抱えて小走りに行く。
「どしたの？　教室の飾り付けは？」
「逃げてきた」榊は舌を出してみせた。「昨日アテレコの時、みんなでパスするって言ったでしょー」
「あー、いけないんだあ」
ノブは、突然夢の中にいるような感覚に襲われた。榊のまわりを見渡す。
「あれ…今何時だっけ？」
「十時過ぎ。どしたの？」
不思議そうな顔をしてきょろきょろしているノブを、榊が覗きこんだ。
「練習、見に来てくれたのはじめてだよね？」
「そうだけど？」
「あっれえ、おかしい。なんか前に同じことやってたような…」
「なに？」
「ブラバンの練習が終わって、榊くんと話してたら、つばさが来て…」

思い出しながらノブが言ったのと、渡り廊下の向こう側につばさ本人が現れたのが同時だった。

「あら珍し。予知能力？」

「あら、お二人ご一緒？」

小型ラジオに耳を傾けたつばさが二人に気付いた。ノブは小声でつぶやいた。

「おんなじセリフ…」

「相変わらずお忙しそーで。沖田なら金紺館よ」

「いるか、んなもん！」

「やっぱり二度目だぁ」

「ノブ、何言ってるの？」

ノブは声をあげた。「ねえ、ホントに今日何日？」

「明日が文化祭の初日？　明日でしょ、文化祭」

「大丈夫？」

きょうのあした？　あしたって、今日、文化祭のきのう？」

つばさが心配そうな顔でノブの額に手をあてた。

「あんまし自信ない」

つばさは小型ラジオを榊に渡して自分の額にも手をあてた。

「熱はないみたい、と」

「だってさ、ドリルの練習のあと榊くんが来て、つばさがラジオ聞いてたら正面玄関で事故が起きて…」

「保健室連れていった方がいいかな？」
「疲れてるだけじゃないの？」
榊からラジオを返してもらったつばさがはずれかけたイヤホンを直す。
「だってさー」ノブは口をとがらせた。「玄関の飾り付けが壊れちゃうんだもん」
「ちょっと待って！」
突然、つばさは耳に手をあてた。
「正面玄関で事故!?　構造材がぶっ壊れて二、三人取り残されてるって！」
「なに？」
つばさはマイクを引っ張り出した。
「こちらガルウィング、誰、残されてるの!?——花つけてた、華道部の主要スタッフ？」
「姫！」ノブは声をあげた。榊とつばさの腕をつかむ。「本当だったでしょ。ね、姫、取り残されちゃってる！」
ノブ、つばさと同室の、姫こと霧野深雪は華道部の副部長をしている。榊はまじまじとノブの顔を見つめた。
「知ってたの!?」
つばさは走り出しながら訊いた。立ったままの榊が、
「時走ったのか夢邪鬼に魅入られたのか、どっちだ？」
「え？」

「なんでもいい、行こう」

D・DAYマイナス1　AM10：35

美術部総がかりの正門とは別に、女子部校舎の正面玄関の飾り付けは華道部、手芸部などが合同で担当していた。

校舎の設計ミスで一階半分の高さを持つ玄関のまわりに、構造材を張り巡らしてはりぼてにする。素直に男子部の協力を得ればいいものを、手違いと時間不足から女子部だけで作ったことからきた強度不足の事故らしい。

「あらー」

女子部の校舎前グラウンドに出た榊は額に手をかざした。校舎から一段張り出した玄関の屋根の上、壊れかけた構造材と割れた発泡スチロールの文字の上に、腰が抜けて動けなくなったらしい女生徒が二、三人取り残されている。

「あれじゃ動けない。へたに動くとバランス崩れて落ちるぞ」

「はじめに落ちた人はもう保健室へ行って、みんな大した傷じゃないけど…」

ハンディ・トーキーを耳につけたつばさが言った。

「今体育倉庫からマット運び出しているけど……何とかできない？」

玄関の上は、校舎内が階段になっているため窓がない。まわりの教室のベランダから手を出そうにも、設計ミスのため玄関の屋根が一階半――二階の真ン中にあるため、二階からは出られ

ず、三階からは遠過ぎる。
「やばいなー。あの高さから落ちたら骨くらい折るぜ」
「平然といわないでよ！」つばさは榊に喚いた。「男ならなんとかしろ！」
「山岳部（ワンゲル）でも呼ぶか。一一九番して火事屋のハシゴ車でも…」
心配そうに残された女生徒を見上げる人の輪の中で、榊は突然目を見開いた。
屋上から玄関に向かって二、三本、ザイルらしいロープが垂らされた。岩壁の登降訓練のように、それぞれのザイルから一人ずつ壁を滑（すべ）り降りてくる。
「うまい！」榊は手を打った。「山岳部の連中、女子部（ここ）の校舎にいたのか…ん？」
榊は、左端のロープをあまり慣れていない手つきで降りてくる男子生徒に目をこらした。
「…ノブ、あのはじの…」
「ん？」
榊が指した方向に、榊の後ろにいたノブが首を伸ばして目をぱちくりさせる。
「あれ、沖田に見えない？」
「沖田だーあのやろおー」突然つばさが猛り狂った。「あんな所で何してやがる！」
「救助活動でしょ」榊は腕を組んだ。「あいつもちょくちょく山岳部に顔出しとるちゅーからなー。人数足らんで引っ張り込まれたんだろ」
「部屋で寝てるべきであった」

自主映画撮影時に山岳部から借りた冬山登山用具を返しに、山岳部出展場所である女子部四階に出向いた沖田は、その場で正面玄関の事故を目撃した。

とっさに動こうとしたが、偶然居合わせた男子部員が二人しかおらず、また女子部員の手前逃げ出すわけにもいかず、結局、救出作戦に手を貸す羽目になった。

沖田は正式部員ではない。しかし時々顔出して遊んだりはしているので、まるっきり素人というわけでもない。しかし、慣れた手つきでザイルを滑りおりる、先行する山岳部にくらべて、初心者はどうしても遅れてしまう。取り残されて動けない女生徒は三人、崩れかけた構造材の上の厚ベニヤ板の上に座りこんでしまっている。

「さーて、一度に助けねェと残りが落ちっぞお」

「早く来ーい」先に所定の高さまで降りた山岳部の部長が沖田に叫んだ。「ちんたら遊んでるでない」

「わーってるよ」

ザイルとの摩擦熱を軍手越しに感じながら、沖田は他の二人の部員と同じ、かろうじてバランスをとっている板の上二メートルで止まった。ぺたんと座りこんで動けない姫が、沖田を心配そうに見上げている。

「相手は霧野(ひめ)さんか。騎士(ナイト)の気分だね、こりゃ」

「同時に助けるんだぞ！」

真ん中のザイルの、壁に足をついて体を支えているがっしりした体格の部長が言った。

「タイミングがずれたら、残りが危険だ。助け次第、地面に降りること。いいか」
「いいぞー」「オーケイ」
「じゃいくぞ。三、二、一、ゼロ！」
「手ェ出せ！」
右手一本で体を支えた沖田は、ロープを握った手をゆるめて滑り降りた。
「うわっまずったあ！」
一番重い部長が、テクニックのためもあって数瞬早く中央の女生徒を抱え上げると同時に、構造材がいやな音をたてて割れた。
「ばかやろー！」
一度は離れかけた姫の手首を、沖田はかろうじてつかまえた。残りの山岳部員は、危ういところで女生徒のキャッチに成功してザイルでスピードを落として着地した。
「りょ、両手でつかまれ」
左手で姫の手首をきつく握る沖田と、右手一本でぶらさがった姫の下で構造材がばらばらとくずれ落ちた。
「腕…いたい…」
腕力などという言葉には縁のなさそうな細腕を伸ばし、姫が沖田の腕をつかまえようとする。
――保ちそうにねェ。
姫の苦しそうな表情を見た沖田は、地面までの距離を目測してみた。

「下のガラクタどけろー！」
沖田は心配そうに騒いでいる野次馬に叫ぶ。榊は折れた角材を抱え上げて沖田を見上げた。
「何やるつもりだー」
「あらま、いたのか。飛び降りるっきゃねーだろが！」
「なにー!?」
「何バカみたいなこと言ってんのよー」
玄関の前に散ったガラクタを蹴とばしてスペースを作りながら、つばさが叫んだ。
「うるせー」
半分やる気をなくした沖田は、飛び降りられるくらいのスペースをにらんだ。沖田が握った姫の手は真っ赤になっている。
「俺はともかく姫君がもたねーんだよ！」
部長が何か叫んだようだった。沖田はかまわず姫を力一杯引き上げながらザイルから手を放した。
——意外に重いんだな、この姫君は。捻挫(ねんざ)くらい覚悟するか。
空中で姫を抱き上げつつ、着地のショックに備える。その時だった。
——大丈夫。
舌ったらずな声が、まるで滑りこんでくるように沖田に聞こえた。
助けてあげる——

「え？」
沖田は不思議な浮遊感を感じた。まるでスローがかけられたように落下速度にブレーキがかかる。沖田は、意外に少ないショックとともにふわりと着地した。
「やったー！」
集まっていた野次馬一同から声が上がった。
「傷ないか？」「大丈夫？」
声をかけられたり肩をたたかれたりしながら、沖田はぼんやりとあたりを見回した。
「まるきり同じ事があった…？」
「何ぼけっとしてんだよ」
榊が沖田の背をこづいた。抱かれたままの姫が顔を赤くして沖田にささやく。
「あの、もう大丈夫です。おろして」
「あ、ああ」
惚けたように、沖田は姫を立たせた。
「またケガしてないの？」
沖田の体を上から下までじろじろ見たつばさに言われて、沖田は我に返った。
「るせーな。鍛え方が違うんだよ」
「化け物ね。――にしても派手に壊れたわあ」つばさは正面玄関にまとわりついている構造材の残骸を見上げた。「直すの大変だわ、こりゃ徹夜だな」

D・DAYマイナス1　PM0：20

ごったがえす学校の食堂を避けて、沖田らは二〇号線沿いのファミリーレストランに昼食に出ていた。

駐車場には改造とフレーム補強を終えた沖田のカワサキ750SSと、真田が南部から借り出したRZ350R、そしてなぜかつばさの改造スクーター〝必殺トレーシー〟が並んで停まっていた。

「どうして手前(てめー)までいやがんだよ！」

一同は窓際の一画に陣取っていた。くわえ煙草に片肘ついた沖田は、つばさを見なくてすむように道路に目を向けていた。つばさはイヤホンに耳を傾けたまま聞こえないふりをしている。

「あーっ、なんつー雰囲気だ」

榊は声を上げた。真田も腕組んでうなずく。

「ジョーカーが二枚も揃っちまった。最悪の面子(めんつ)ですよこれは」

つばさと榊の間のノブは、今にも血の雨が降りそうな雰囲気に小さくなっておびえている。

「編集長がこんな所ではまっていていいのかよ」

「おい榊」「なんだ？」「ちょっと逃げない？」

「うっさいわねえ、ホントに」じろっと沖田を見たつばさがイヤホンをとった。「どこにいよーとあたしの勝手でしょお」

「半径百メートル以内に現れるなと宣告しといたはずだ」
「真田」「あいよ」「やっぱ逃げよう。オレはまだ死にたくない」「あ、あたしも」
つばさはまた素知らぬ顔でイヤホンを耳にあてた。榊たちがそうーっと動き出す。
「……」
沖田が、やっとつばさに視線を走らせた。一触即発の地雷原的ムードに、残る三人が思わず体を硬くする。
「用事なら早く済ませろ！」
低い声でそれだけ言うと、沖田は視線を戻した。ほっと息をついたノブが、席から抜け出そうと腰を浮かした時、つばさはイヤホンをとった。
「大した用事じゃないわよ。正直に質問に答えたら、すぐ消えたげる」
沖田は、いかにも面倒そうにコップの水に手を伸ばした。
「質問その一、映画制作中におかしな怪奇現象がなかったか。質問その二、どうやって大温室の屋根から飛び降りたのか」
「飛び降りてねーってのに」
「質問その三、どこで氷島陽子の名前を知ったのか」
今度こそ沖田はつばさをにらみつけた。
「あ、あの、ミートスパゲティのお客様は？」
両手に皿を持ったウェイトレスが、おずおずと声をかけた。真田が手を上げる。

「こっちとこっち」
つばさと沖田の険悪な空気を感じたのか、ウェイトレスは皿を置くと逃げるようにその場を去った。
「氷島陽子って、誰だ？」
沖田がおさえたような声で訊いた。頭のもやもやしたイメージが、もとの型にはまるように形を取りかけていた。つばさはメモに目を落とした。
「知ってるんでしょ。去年一年、ずっと沖田見てた子」
「は…」沖田は半ば無意識につま先を一度だけステップさせた。「――知るか」
なぜか閉ざされていた記憶の深層が、開きかけていた。忘れていたことを思い出すように、沖田はくせっ毛で童顔の女の子のイメージを描いていた。
「や、ちょっと失礼」
せっぱ詰まった声が降ってきた。聞き覚えのある声に沖田が顔を上げると、テーブルの横に案内人が立っていた。
「ちょっとすいません。いいですか？」
黒服に帽子を眼深に被った男は、白手袋をはめた右手を、指を鳴らすようにテーブルの上に出す。
「いいですね？」
全員が手を見るのを確かめてから、男は指を鳴らした。同時に、まるでトリック撮影のように

五人が消えた。飲み残しの水と手もつけていないスパゲティを残して。
「まったく」男は息をつくと、伝票を取ってカウンターに歩き出した。「なんだって、こんな苦労しなきゃいけないんだ」
男は支払いをすませて外へ出た。二、三歩あるいてから、駐車場のすみに停まっている二台のオートバイと一台のスクーターに気付く。
「や、忘れるところだった」
男は三台のバイクに向けるように指を鳴らした。バイクは消えた。
男は腕時計を見ると、レストラン脇に停めてあった外国製らしいサイクリング車の方に歩いていった。かなり古いプジョーである。スタンドがないため建物にたてかけてあったフラットバーハンドルの自転車を起こすと、男は走り去っていった。

D・DAYマイナス1　PM0：20

いつもなら男子(やろー)しかいない男子部食堂は、学園祭前日ということもあって男子と女子が入り交じって食事の奪い合いをしていた。
「え？」
突然喧騒がはじまったような気がして、沖田は自分のまわりを見た。簡単な作りのテーブルには量だけが取り柄の昼定食がのっており、目の前では榊がぼんやりと肘をついている。
「おい」

沖田は榊に声をかけた。榊は沖田に顔を向けた。
「なんだ？」
定食をのせた盆を持った真田が来て、沖田の隣に腰をおろした。真田は割りばしを割りながら沖田を見た。
「どうしたん？　幽霊見たような顔して？」
「いや…うわっち！」
沖田は思わず指を押さえた。根元まで灰になったハイライトが床に転がる。
「食堂でくらい、煙草吸うのよせよ」
榊は、定食を食べはじめた。沖田はしばらく床に転がったハイライトを見ていた。いつ煙草に火をつけたか、どうしても思い出せないのである。
――沖田くん。
誰かが沖田を呼んだ。沖田は顔をあげた。
「沖田くん」
誰か、舌ったらずな子供っぽい声の女の子が沖田を呼んでいる。
「誰だ？」
真田は、はしをくわえて食堂内を見渡した。
「沖田ぁ、誰か呼んでいるぜ」
「ああ」

沖田は声の主を探さずに昼食を食べはじめた。声の主が食堂にいないことを、沖田はなぜか知っていた。

D・DAYマイナス1　Somewhere in time

「やばいですよ、これは…」

天から見た日本列島は、中部、近畿地方に薄い雲がかかっている以外ははっきり見えていた。目をこらせば、その表面で生活を営む者たちの姿も雲を透かして見ることができる。その者たちの運命でさえも。

衛星軌道からの機械的な〝目〟を通して見ればいつもと何ら変わりない日本列島も、彼らの、光以外でものを視られる目から見れば、その表面に起こりつつある異変がはっきり見てとれた。

「こんな事が起こるはずはないのだが…」

関東平野、東京湾岸沿いの赤茶けたコンクリート地帯と、東京都の山岳部の緑がぶつかるあたり――国立市、という小さな市街を中心にして、何十重もの竜巻のような巨大な渦が日本全体を覆わんばかりに発達している。どんな最新の軍事衛星の、どんな解像率のカメラをもってしても写すことのできない目に見えない渦――

「あの一点から、現実に対して、普通じゃ考えられないくらい高い圧力がかかっています。夢嵐なんて、この半世紀ばかり発生していないんですがねえ」

「もし破れてしまったら、えらいことになるぞ。台風の目は、この前にも穴が開いてしまった所

ではないのか？」
「特に念入りに修復したはずなんですが、同じ所に、今までの記録を遙かにしのぐような高い力がかかっています。二十四時間と保たずに破れますよこれは、へたをすると」
「もしそんなことになったら、すべてのものが流れ出して来る」
「もちろん、そんなことにならないよう、総動員で修復作業をしていますが」
「渦の中心近くでは影響が出ているようだな」
ＪＲ中央線国立駅から、都市計画に従い放射状に延びる道路の数々、そして市街をほぼ一直線に横切る国道二〇号線。この間の雑然とした、比較的緑の多い住宅地の中に、いくつかの奇妙な歪（ゆが）みが現れている。
「と、とにかく、あの地区の者全員が突貫工事で補強作業しております。よもや境界壁が破れるようなことは…」
「だと、いいのだがな」

Ｄ・ＤＡＹマイナス１　ＰＭ２：００

刈り込まれてこそいないものの、きれいな芝で覆われている中庭で、本日何度目かのブラスバンドによる〝スター・ウォーズのテーマ〟の通しがはじまった。渡り廊下の手すりに肘をついていた榊は、目を閉じた。
「ANOTHER galaxy, another time と…」

星空をバックにして、どおーんと出てくるタイトルを思い浮かべる。ブラスの威勢のいいファンファーレと、その裏で音階を駆け巡る弦楽器のハーモニーが心地良い。

宇宙空間を、手前から彼方に向けて銘文が流れ出す。エピソードⅣ、ニュー・ホープ。

「バイオリン……？」

ジョン・ウィリアムス作曲の、あの主旋律に入ったブラスバンドに、榊は目を見開いた。高校のブラスバンドに、バイオリン等の弦楽器が入っているわけがない。軽音楽部のポピュラー専門のカルテットや、大学のオーケストラ部に入ってバイオリンやビオラをやっている者はいるが、バンドドリルの編成のブラスバンドに弦が入るはずがない。主旋律の裏のかざりは、サックスやフルートを主体とする木管楽器軍団ががんばっている。

「はて……」

ブラスバンドの編曲のため、サウンドトラックとは音が違う。それは当然なのだが――。

榊は、深く考えもせずに目を閉じた。古い映画〝大平原〟をモデルにしたといわれる、遠近法で流れていくアルファベットが目に浮かぶ。映画音楽の古典になっているボストン交響楽団の演奏するこの曲を、大きなスクリーンを見ながら何度聞いたか。

「いかん。中毒症状が出てる」

榊は頭を振ってブラスバンドを見た。夏休み中から練習を重ねただけあって、ドリルの動きはよく決まっている。ブラスの金属質のひびきに、サックス軍団のスイング気味のハーモニーが似合っていた。

「ないはずのパートの音が？」ノブはキョトンとして訊き返した。
「よくわからん。ブラバンのサックス軍団の音が弦に聞こえた」
「弦……て、バイオリンとか、チェロとか？」
ノブはますますわからない顔をした。例によって休憩時間が少ないので、クラリネットを抱えたままである。
「おかしいよなあ？」
「うん――でもね、みんなバラバラの音出してるけど、まとまると全然別の音に聞こえちゃうのって、あるよ」
「うまい具合にびちっと決まる、ってやつでしょ？　オレ、バンドの経験ないけど、そーゆーのと違うんだよな」
ノブはちょっと首を傾げた。
「どういう風に？」
「幻聴みたいに、ないはずの楽器の音が聞こえてくんの」
「やだ」ノブは笑った。「また怪奇現象じゃないの。……ほんと？」
言ってから蒼くなる。「やだわたし、ああゆーの好きじゃない」
「好き嫌いで出るかどーか決まるもんでもないと思うんだが」

D・DAYマイナス1　PM3：30

「羊が一匹、羊が二匹、三匹四匹とばして十匹」

あやしげな呪文を唱えながら、白衣のドクトル松田は、沖田の目の前で糸に下げた五円玉をぷらぷらゆらしていた。

「羊が十一羊が十二、羊の数はどんどん増える」

「松田（マッド）ってホントに催眠術ができるの？」

「だいたい沖田に催眠術がかかるかどーか」

ただでさえ雑然としているところへもってきて、学園祭中は邪魔物がほうり込まれるため、歩きまわるだけでも超絶的な技巧を要するようになる理科標本室――。その一角のスペースで催眠術をかけられる沖田を見物しながら勝手なことを言っているのは榊と真田である。

パイプ椅子に逆に座って振り子運動をする五円玉をみつめていた沖田は、やがてかくんと首を落とした。

「おー、かかったではないか、榊君、テープ、スタート」

「はいな」

松田の指示で、榊はかねて用意のテレコで録音をはじめた。

「では、沖田君のご依頼通り時間の遡行（そこう）をはじめましょう」

「時間の遡行？　沖田（あいつ）何考えとんじゃ」

「今日は学園祭の前日です。五つ数えると、君は一週間前の夜に戻ります」

「一週間前……いつだ？」「大温室の中でドラキュラと追っかけっこした夜でござる」
「五、四、三、二、一、ゼロ！　はい、ここは一週間前の夜の大温室。あなたは何をしていますか？」
榊はすかさず沖田にマイクを向けた。沖田は何かもごもご言った。松田はもう一度、
「ここは一週間前の大温室、あなたは何をしていますか」
「すぴー」
「あた…」
沖田はきれいに寝入っていた。椅子の背もたれに腕と頭を重ね、安らかに寝息なんかたてている。
「うーむ、やはり失敗したかー」松田は自分の目の前で五円玉をぶらつかせた。「先輩の見たことあるだけで、成功したことないんだよなあ」
「無理もない」
真田は沖田の寝顔をぴたぴたたいた。
「沖田、ここんとこ徹夜続きだったからなあ」
「しょーもない」榊はつまらなそうにテレコを切った。「沖田は何考えて催眠術なんか頼んだんだ？」
「記憶にあやふやな所があるから確かめたいとか。一週間前の大温室のことで思い出したいことがあるって」

「寝ちまっちゃあ、しゃーねーな。どうする、置いてっか？」
「ほっとこ」
榊はマイクのコードをくるくるテレコに巻きつけた。
「帰ろ」
遠くから、かすかな地鳴りのような轟音が聞こえたのはその時だった。
「何だ？」
誰からともなく標本室の一方の壁に申し訳程度についている小さな窓を見る。何かがカタカタ動き出す音が聞こえた。
「じっ地震だあ!?」「に逃げろお」
三人は、一人眠りについた沖田を残して、標本室からあわてふためいて逃げ出した。場所もスペースも考えずにほうり込まれた椅子や大型機器や骨格標本やヴァレー・フォージの模型やらをかきわけ乗り越え、なんとか廊下にはい出す。
「は、は、命、拾い、した」
榊は息を切らして胸をおさえる。真田はドアの中を覗きこんだ。
「危うく、生き埋めンなるとこだった」
「来る！」
松田が壁にしがみついた。地面をハンマーでぶったたいたようなショックが伝わってくる。
「お、大きい！」

山鳴りが駆け抜けるような大きな震動が校舎をゆらしはじめた。
「午後三時三十三分と…」
ゆれている中で、松田は時間を確かめた。
「震度3か、4」
「おお、哀れな」
標本室を覗いた真田が手を合わせた。へたに歩くだけでもそこらへんがひっくり返るという標本室は、バランスも何も無視して積み上げられたダンボールや実験機器のおかげで、さながら雪崩の様相を呈していた。
「成仏せーよ沖田、なんまんだぶなんまんだぶ」

この地震が、全国規模で日本に現れた最初の兆候だった。この地震は、地震観測史上二度目という、伝説の「超広域震源地震」であり、ほぼ関東全域が震源地らしいというとんでもない地震だった。関東一円及び、伊豆七島あたりの地震計が、内陸部、外周部まではほとんど同じ値を出したのである。
狂乱状態に陥って、職員一同が盆踊りをはじめた気象庁の発表によると、震源地はたぶん関東、震源の深さは浅いということである。もっとも大した被害が出るほどの地震ではなかったため、混乱はJR・私鉄等のささやかなダイヤの乱れくらいしかなかったという。
なお、同時刻、東京湾上空百二十キロの低軌道を通過中の米軍偵察衛星ビッグバードⅦが原因

不明の震動をはじめたことは知られざる極秘軍事機密である。
そしてちょうど同じ時刻、大阪発東京行き日航一一八便ボーイング747SR機は、太平洋上から関東へ侵攻してくる銀色の、細い胴体のプロペラの四発重爆――B29の大編隊と、大した効果のない一撃離脱戦法（ヒット・アンド・アウェイ）でB29に迎撃を続ける旧日本陸軍四式戦闘機疾風（はやて）との空中戦を目撃したと羽田の管制センターに報告した。そのうち、どこからともなく米軍のP－51ムスタングが出現し、超高空でエンジン出力の上がらない疾風を悠々と追い落としていった。
この、大量の戦闘機及び爆撃機の戦闘行為は、自衛隊三原山レーダーサイトでも、約三分間確認された。スクランブルをかけられたE－15（イーグル）JとF－4EJ（ファントム）がすぐ飛んでいったが、双方あわせて百機を超える機影はいつの間にやらきれいに消えており、異常事態に出張ってきた米第七艦隊のF－14D（トムキャット）およびF／A－18（ホーネット）Cとはちあわせしただけで何の収穫もなく引き揚げてきたそうである。

そして、嵐の過ぎた理科標本室――
「あー」
中を覗きこんだ松田は絶望的な声をあげた。ひっくり返ったおもちゃ箱よろしく、さまざまなガラクタがのたくって混乱を極めていた。
「まるで一種のホワイトホールだなこれは…あと始末が大変」
その一角が、もそもそ動きはじめた。逆さになって落ちていた始祖鳥の剝製と、タキオン検出

用の磁力砲、超小型核融合炉の模型などをかきわけて、メガネをどっかにやっちゃった沖田がぬっと顔を出す。
「ドクトル、おあとよろしく」
しゅたっと手を上げるなり、榊と真田はあとの事を恐れてその場から逃げ出した。
「何が起きたんだ一体…」
ぼさぼさになった髪の沖田が、ガラクタの山の中から抜け出してきた。
「また地震らしいよ――あ、足もと気をつけて」
「努力はする」
沖田は、文字通りの足の踏み場もないほど床が見えなくなった標本室を見回した。

D・DAYマイナス1　PM4：10

「いったい、何がどうなっているのだ」
とりあえず今日付の日刊新聞の編集を終えた第三家庭科室で、つばさは首をひねっていた。いつもなら調理実習の材料や被服用の布がならぶ多用途卓の上には、学内外の記事が入り交じった記事（ニュース）のメモとプリントアウトが散乱している。
「ノブの予知能力もどきと、正面玄関構造物破損と、大温室の食人植物騒ぎと、座敷童子と…。ったくどーなっとるんじゃ」
とりあえず今日の分の学校新聞の編集は終わったため、臨時編集部の第三家庭科室にはつばさ

一人しかいない。つばさは右手のボールペンを鼻の下に挟んだ。
「なんかの前兆だろか。だけど、一体、何が起きるっていうんだろ」
沖田は、火のついた煙草をくわえたままベッドに寝転がり、天井に貼りつけたセピアトーンの〝レイダース〟のポスターを見るともなしに見ていた。
「どうなってやがんだ」
何度目かの同じセリフをつぶやく。
「九日か十日前から二、三日間の記憶がムチャクチャだ」
さっきから同じことを考えていた。日記でもつけていれば何とかなったかもしれないが、沖田には日記をつける習慣はない。
沖田は大分灰が長くなった煙草をとって、枕元のコーヒー缶になすりつけた。吸い殻をほうりこんで、また頭の下に手を組む。
「――ん？」
視線を感じたような気がして、寝返りを打った沖田は、二段ベッドの上から窓に目を向けた。
「！」
目を見開いて息を吸いこむ。彼女が、窓の外から沖田を見ていた。
「……」
うっとおしいくらい長い、くせのある前髪の下のびっくりしたような瞳が沖田を見つめてい

る。制服を着ていなければ中学生かと思うような童顔。

「――」

見覚えがある、なんてものではない。確かに知っているはずの顔だが、誰だかわからない。沖田は自分の記憶を探るようにじっと彼女を見ていた。

突然、彼女は、はっとしたように振り向いて、その場から小走りに去った。後を追うように黒服の男が窓の外を通り過ぎる。

沖田はかすかに何かを思い出し、そして愕然となった。

「ここ、四階だぞ？」

沖田は、何かとても大切なことを思い出しかけていた。

D・DAYマイナス1　PM6：00

薄暗くなった男子部校庭で、校舎をスクリーンに使った映画上映の準備が進んでいた。前夜祭の目玉、学祭実行委員会による覆面映写会である。

覆面映写会だからして、プログラムは事前には公開されていない。実行委員会はじまって以来という厳重な機密保持体制のため、事前に情報がまったくもれず、根も葉もないデマ――一説によると三分の二は学祭委員会が意図的に流したものだという――が校内に飛び交っていた。超大作だのB級だの、邦楽だ洋画だ自主制作だ、配給会社に入った先輩に協力してもらって未公開の新作を日本初公開するという話まであり、委員がもらした情報についてもみんな勝手なことを言

って、結局何が何だかわからないという状況である。
このため話題は話題を呼び、どうしても手を放せない者以外のほとんどの生徒が男子部校庭に集まっていた。かくして、学園祭最初のプログラムをとにかく成功させようという委員会の目論見は、とりあえず達成されたのである。
「で、何をやるんだ結局？」
校舎正面に張られた大きなスクリーンを見上げた沖田が言った。
「最後までわからなんだ。新聞部もお手上げ」和田は両手を上げてみせた。「フィルム缶にも何にも書いてない。スニーク・プレビューにしても機密保持、あそこまでやりゃ立派だよ」
校庭の真ん中やや楡通り寄りに、後夜祭で使用予定の盆踊り用のやぐらが立っている。映写機はそこに設置され、腕章をつけた実行委員が上映の準備をしている。校舎の下には、大学部からでも借り出したらしい屋外コンサート用みたいなスピーカーが設置されていた。
「学校のまわりが畑でよかったぜ」
沖田は、かすかに夕暮れの光が残っている西の空を見上げた。
「住宅街なら間違いなく文句の嵐だ」
ざわつく校庭に、上映開始を告げるブザーが鳴り渡った。重い、長い、期待を含んだはじまりの音——。

D・DAYマイナス1　上映終了 Screening Over

オール立ち見という状況で、秋の星空の下、上映が終了した。流行のスタンディング・オーベーションの後、三三五五生徒が散っていく。

「いやー、大脱走はいい」

「クリント・イーストウッドはしぶいなあ」

「ヤノット・シュワルツ監督ってロマンチストだなあ」

「クリストファー・リーブがよくって」

「レイダースって言うことないね」

「宮崎駿は偉大だ」

「ひろ子ってかーいい」

「ゴーストバスターズって意外に面白いじゃないか」

「クラーク・ゲーブルのあのいやらしさがたまんない」

「ウェストサイド物語（ストーリー）っていいわあ」

「メリー・ポピンズがいい」

「ディズニーってスピルバーグだ」

「ヒッチコックのまね！」

「なんたって四十八時間はいいよ、うん」

「駅馬車が…」

「しぶい…ゴッドファーザー」

「ベン・ハーの金のかけ方はすごいわ」

D・DAYマイナス1　PM10：15

「何だこれは…」

実行委員の本部になっている男子部の第一会議室に集められた上映会のアンケートを見に来たつばさは、ごっそりある用紙をひっかきまわしていた。

「『小さな恋のメロディー』上映ったんじゃなかったの？」

「それが…」

男子部の生徒会から横滑りして実行委員をしている一年の副書記は口ごもった。

「スタッフもみんな何やるか知らなかったんです。とにかく午後フィルムが届いて、ぼくは『スティング』見たと思ったんですけど、会長さんなんかあれは『街の灯』だっていうし」

「マークだったわよ」言いかけたつばさは、アンケート用紙の一枚を引っ張り出した。「三船敏郎がいい。黒沢明はやはりすごかった。荒野や宇宙に盗まれただけのことはある…こやつ『七人の侍』でも見たのか…どういうことよ」

「ぼ、ぼくは知りません！」つばさに詰め寄られた一年が、あわてて首を振った。「委員の中でも、みんな見た映画が違うんです―」

「どーゆーことだろ？　――ジャマしたわね」

つばさは第一会議室を出た。計算機付きの腕時計を見て、廊下を歩き出す。

「見た映画って、みんないのばっかし。ってことは、みんなバラバラに好きな映画見たのかしら、同じ画面で…」
つばさは立ち止まった。頭を振って、苦笑する。
「んなアホな」
歩き出したつばさは、はたと気づいて頭を抱えた。
「何やったかわからんと、記事にできない」

編集部に戻ったつばさは、部員たちに映画の感想を訊いてみて、さらに何も言えなくなってしまった。みんながみんな違うことを言っている上、見た映画まで違うというのである。
「こりゃ見た映画の統計とった方が早いな」
さらに、上映時間のずれがほとんどおきていないらしい。それぞれが見たと主張する映画の上映時間は、一時間ちょいのものから三時間オーバーのものまで入り乱れているにもかかわらず、見たあとに全員で同時に拍手をしているのである。
「正確に何時に終わったのか確かめとくべきだった」
テーブルに散らしたメモの前に腰をおろしたつばさは、髪に指をからませた。
「あーん、マーク・レスターに感激なんかするんじゃなかった、もう」

D・DAYマイナス1　PM10：40

「結局こーゆー事になる運命だったか…」
自主映画上映会場である2－Bの教室の廊下に制作資料の写真（スチール）と説明を貼っている沖田が、小型の脚立から飛び降りた。
「明日はじまるまで消えてるべきだったね」
次の位置に脚立を動かした沖田に、榊が写真と説明文を書いた小さい紙を渡す。
「はい、これ今のの下」
実行委員会主催の映画会のあと、沖田たちは教室飾りつけに回っていた南部につかまった。
「てめェ裏切り者、一緒にトンズラする約束したじゃねェか」と抵抗はしたのだが、南部も午後になって捕らえられたクチだった。
「ただでさえ人数足りなくて、まだ外装も終わってないんだ。ヒマなら手伝え！　でなけりゃ敵前逃亡で銃殺だ！」と怒鳴られて、結局会場制作をやる羽目になったのである。
「おー、樹海でロケした時の写真だ」
ファイルに入っているスナップを引っ張り出した榊が、写真と説明文を見くらべる。
「こんときゃ苦労したんだよなあ、風穴迷いこんだりして」
「想い出に浸ってないで次のよこせ」沖田が手を出す。「まだ終わらんのか」
「あとファイル二冊分。だって写真まだ前半だぜ」
「ったく、みんなで面白がってばちばち撮るから…」
ほとんど内輪受けの説明文を写真と対（つい）にして、壁の模造紙に貼っていく。

「画鋲がないぞー」
「いくらでもあるよ」
榊は沖田に画鋲の箱を開けてみせた。
「ご心配なく。これが終わったら内装だと」
「明日の朝までに終わんだろうな」
「第一回の上映が、えーと確か十一時からだからそれまでには」
「あと丸半日も、んな仕事やってられっか！」
ぶつくさ言いながら、沖田は脚立に上がった。
「はいよ」
榊が次の写真を渡す。
「ん。…ん？」
どこからか騒ぎが聞こえてきた。沖田は首を回した。
「あー？」
向こう側の東階段から、廊下に白い影が出現した。ひづめの音をたてて一直線に駆けてくる。
「あら――」
沖田と榊が茫然と見ている前を、一頭の白い翼を持った白馬が風を巻いて駆け抜けた。
「待てえー！」「捕めーろ！」「生物部のだ！」「手ェ出すな！」「うお～～～」
少し遅れて、棒だのムチだの持った団体が白馬の消えた方向へ走っていった。

「うわったぁ！」
余波をくらってゆれた脚立から沖田が転げ落ちた。床に尻もちをついて、榊と顔を見合わせる。
「見たか、今の？」
「見た。馬に羽根がはえてた」
「何だ、あれは」
「知らない。自然研あたりが学祭用に作った合成動物（キメラ）でも逃げ出したんでない？」
「自然研（ちょう）じゃ、今回はキメラなんか作ってない」
いつの間にか、ドクトル松田が教室のドアから顔を出していた。沖田は立ち上がった。
「じゃ、大学部か？」
「あんな大物作ってないはずだけどなあ」
「うわ、また来たァ」
消えた方向から、長いたてがみを振り乱した白馬が突っ走ってきた。常識はずれに大きな風切り羽根のある翼を後ろに流して西階段に消える。ワンテンポばかり遅れて、投げ縄だの網だのライフルだのアーチェリーだの振り回した一団が廊下を突撃していった。
「えらい騒ぎですな…え、何だ沖田？」
「あと頼む、すぐ戻る」
榊に持っていた写真を有無を言わさず渡した沖田は、集団を追って走り出した。

「あー、脱走する気かこの！」
「すぐ戻るってんだろがあ！」
言い捨てて、沖田は集団を追った。見覚えのある男が混じっていたのである。
「あの黒服、今度こそ逃がさねえぞ！」

中央階段を三階から四階に駆け上がり、学園祭前夜で準備中の校舎を一巡りした白馬は、そのまま校舎屋上に出た。
「いつかみたいになったな、こりゃ…」
冴えた星空の下、両の翼を広げていななく白馬を遠巻きにして、手に手に得物を持った一団がいる。手ぶらの沖田は、どこかに混じっているはずの黒服を探して人垣から離れた。
屋上に三面ある全天候のテニスコートの、夜間試合用の照明に灯が入って、純白の毛並みの駿馬が浮かび上がっている。白馬はぶるるんと鼻をならして首を振りながら、ひづめでコートをたたいていた。
「あんな鳥と馬の合いの子、どーでもいい」
沖田は人垣の外周を回りはじめた。
「あの黒服。どこに…えあっ？」
逃げ場を失ったはずの白馬が、両の翼を一杯に広げていなないた。一度首を振りあげて前脚でコートを蹴って立ち上がると、大きくはばたいて人垣をひらりと飛び越えた。

沖田のすぐ横に着地すると、飛んだ勢いそのままで駆け出す。
「あいつ！」
その背には、忘れもしないあの黒服が打ちまたがって白馬を走らせていた。
「逃がすか、ンなろ！」
「逃げたぞ！」「追え！」「どけ、こらあ！」「いくぞー」「うおー！」
先頭を切った沖田に続いて、他の連中も走り出した。馬は、高い金網のフェンスめがけてスピードを上げていく。
「飛ぶ!?」
行く先は屋上が切れている。にもかかわらず走る白馬に、沖田は不吉な予感を覚えた。あの時――大温室の天井から飛び降りて、なぜ無事だったのか。
体より大きい翼を広げて、馬は屋上のコンクリートの床面を蹴ってジャンプした。
「この！」
沖田は目の前にひるがえった、並の馬より長そうなふさふさした尾をつかんだ。痛そうだが、他につかむところがない。
「うわあ～～」
翼をはばたかせ、白馬は宙に舞い上がった。もろに風の中へ飛び出した沖田の足元で、照明に浮かぶ校舎の屋上が小さくなっていく。
「はらー、また飛んじまった」

黒の中に何色もの光を散らしたような、学校とその周辺のモザイクが広がっていく。沖田は足の下から、目の前の黒服にきっと目を向けた。

「てめえ！　黒服！」

「え？」

両手で握った尾の向こうから、帽子を眼深にかぶった男が振り向いた。

「あ、あなた…。なんであなたこんな所に？」

「お前、何者だ!?」

男は答えずに前を向くと、手綱を引くように馬の飛ぶ方向を変えさせた。

「降りてもらいますよ。この忙しいのに仕事増やさないで下さい、頼むから」

「答えろ。何者だ、お前！」

男は、困ったような顔で振り向いた。答えを探すように口を開きかけ――その口が驚いたように丸くなった。

「あ…あ、あ」

阿呆のようにどもりながら、沖田の左の空間を指差す。何だと思って沖田は横を見た。

「あー！」

長いクセッ毛の少女が、いた。いくぶん前傾姿勢で髪をなびかせながら、宙を滑るように飛んでいる。心配するように、その顔が沖田を見た。

「だめです。ストーップ！」

男が叫ぶ。沖田の頭の中で、イメージが再生されかかる。
「え、なに？　これほんと？」
突然我に返ったように、少女があわてて自分の手や体を見た。まるで自分がその場にいるのを知らなかったように、
「何てこった」男が頭を抱えた。「最悪だ。とにかくやめて下さい！」

「おーい真田」
廊下の壁にせこせこと写真を貼っていた榊は、教室からゴミ箱をかえて出てきた真田を呼び止めた。
「沖田見なかったか？」
「あやつ、また逃げたの？」
「逃げたとゆーか…さっきペガサスみたいの走ってたろ、あれ追っかけて…」
「んで、トンズラこきおったか。あいつー」
「いや、戻ってきた」
廊下の向こう側から、夢遊病者の足取りで沖田がぼんやり歩いてきた。
「結局つかまんなかったか。沖田、どーしたん？」
手を振った榊に、沖田が顔を上げた。
「ペガサスどうしたの？　逃げられちゃったの？」

「訳のわからんうちいなくなった」
教室内から声が上がったのは、その時だった。

D・DAYマイナス1　PM11：00

まるで昼間のように明るくなった教室の窓に、人だかりができていた。
「なんだ？」
あまりに明るい窓に、沖田と榊は顔を見合わせた。
「うちの校庭、ナイター設備ってあったか？」
「ナイターとは光の方向が少し違うよーな…」
手近の椅子に写真の箱を置いた榊が、窓から首を出した。
「ひええ――空がスパークしてる」
「なに!?」「なんだなんだ」
沖田と真田が、榊の横から首を出して空を見上げた。
極彩色の鮮やかな光が、空一面にのたくっていた。オーロラなどという光のカーテンではない。カーテンがくずれて散ったように、色とりどりの光が空一面に乱反射を起こしているのである。
沖田は唖然としたまま腕時計を見た。二十三時過ぎ――夜が盛りのはずである。
「今夜の天気、知ってるか？」

「夜はくもり、雨二〇パーセント」
空を見たまま、真田が答えた。
「雨降らねーから、女子部の校庭でオールナイトコンサートをやるって聞いたけど」
「こーんな派手なレーザー光線使うとは知らなかった…」
「たーけ！」沖田は榊を怒鳴りつけた。「こんなウルトラQがレーザーでできるか！」
「じゃ、大学部だ。ロシアなんかのレーザー砲、エネルギーに原爆使ってるからそれと同じ原理で空中で核爆発起こしてレーザーにして…」
「頼むから訳のわからんこと、言わんでくれ」沖田は額に手をおいた。「何が起きたんだ一体」

関東上空に起こった謎の乱光現象は、遠く日本海を隔てたアジア大陸北朝鮮の清津やウラジオストックあたりでも目撃されたという。日本列島のある方向の夜空が、ネオンサインで満艦飾にした太陽が昇ってくるように不思議な色の乱発光現象を起こしたらしい。
光は、気象庁、防衛庁などの推定によると、二万メートル以上の超高空に現れたらしい。範囲は東京を中心とした半径百五十キロから二百キロの範囲で、ほぼ関東平野全域、東海地方までが頭上にこの光の乱舞を見たことになる。
そして、恐らくはこの光によるものと見られる大気の乱れが原因で、関東近辺全域にすさまじい空電が発生した。これにより人類が電波を実用化して以来、最悪の状況がこの地域を覆うことになる。

つまり、テレビ、ラジオを含むすべての電磁波を媒体とする機械が、一時完全にその機能を失ったのである。

関東、東海地方から中部、東北地方の一部まで、すべての放送システムが完全に麻痺した。観測中の電波望遠鏡、レーダーシステムはあるはずもないゴーストを大量に発見してオーバーヒートしかけ、船舶・航空無線までが使用不能となり、陸・海・空の交通システムはまるで戦時中の無線管制の如き混乱に陥った。

しかし、ケーブルを使用した電話、有線放送の類は何の影響もうけなかった。空中を飛ぶ電波だけが、波長に何の関係もなしに〝使えなく〟なったのである。

これは、単に使用不能の状態になったのではない、まさに前代未聞の状況だった。ある古株のTVディレクターの言葉を借りれば、

「まるで三十年分の電波(なみ)が一度に出てきちまった」ような、とてつもない混信が起きたのである。その結果は、雑音と判別不能の砂の嵐でしかなかったが。

しかし、この事件に関する正確な解説も報道も、結局行われることはなかった。その間もないうちに、常識はずれのとんでもない事柄が日本全土に出現をはじめたからである。

それはさながら、秩序を失った光の嵐だった。白銀色の光の渦、直進することを忘れた青い光の束、融合しては放射する虹の泡沫(ほうまつ)。

絵の具を空一面にぶちまけたような光が、視界に入る限りの空を駆け巡っていた。ふだんなら

青・白・紺系統以外に大した色のバリエーションは持っていないはずの空が、欲求不満で発狂した感じである。

「無理もない」榊がぼんやりつぶやいた。「毎回同じ色じゃあきるもんな」

「そーゆー問題じゃないと思うが」

窓枠に手をあてて、背中から外へ乗り出している沖田は、目をぱちくりさせた。

「ああ、目がおかしくなる。目だけじゃねェ、頭までおかしくなりそーだ」

この怪光現象は、ものの二十分ほどで——自然研の測定によると二十分十七秒——潮が引くように消えていった。

そしてこの時間に、確かに一部中国大陸・朝鮮半島を含む日本列島が地球からずれはじめたのである。しかしこのことに気づいた人間は、幸か不幸かほとんど存在しなかった。

D・DAY　AMO：OO

「ワン、ツー、スリー、フォー」

女子部校庭の特設ステージめがけて、校庭一帯と校舎屋上に設置されたサーチライトがいっせいに光を放った。

ほとんどすべての光を消された校庭で、人気投票で頭(トップ)をとることになった女子軽音楽部の六人編成の人気バンド〝騒音倶楽部〟が、キレのいいエレキピアノのイントロに女声コーラスを乗

せ、ボニー・タイラーの『ヒーロー』をはじめた。無茶苦茶でパワフルなドラムに合わせ、伸びのあるボーカルが英語の歌詞を歌いはじめる。

「お、はじまった」

九分通り飾りつけの終わった2－Bの教室の窓から沖田が首を出した。メンバー全員女生徒なのに、ファンの大部分も女子という〝騒音倶楽部〟が、深夜なのにボリュームを上げて、ステージを行っている。

「早いとこ終わらせよう」

夜食のハンバーガー片手に紙コップのコーヒーを飲みながら、榊も顔を出した。

「このまんま徹夜明けで文化祭になだれこんだら、体力もたない」

「体より先に頭がまいりそーだ」

女子部のステージが、手製の発火装置で点火したらしいドラゴン花火の壁に包まれた。

「おーお、派手好みが揃っとるだけあるわ」

前夜祭のオールナイトコンサートがはじまったからといって、学内の準備が全部終わったわけではない。展示がメインになる所は伝統的に初日のオープニングセレモニーが見られないことになっているし、演示にしても深夜遅くまでリハーサルをくりかえすのが通例である。

それにやることがなくなったからといって、文化祭前夜に寮生が眠れるはずがないのだ。

つばさは、小型のテレコを持ってコンサートの観客に混じっていた。特設ステージの前には、邪魔者扱いで校舎から追い出された椅子が並べてある。ファン層の関係で、椅子を埋めた観客のほとんどは女生徒である。

「ほぼ予定通りと……」

一般向けのプログラムとは別に、スタッフに配られる進行予定表のコピーを編集長権限で手に入れたつばさは、その束をぺらぺらめくっていた。

「次は男子のプレイヤー・ピアノで、ウインドマジック…ノブ、どこのファンだっけ」

「わたしこれのファン」隣に座っているノブがステージを指した。「かっこいーんだもん」

「ハイ、お待たー」

二人の間に、霧野(ひめ)が手をついた。つばさが振り向く。

「飾りつけ終わり？」

「終わったあ」

力をこめて言った姫が、肩にかついでいた小さな花束をノブに差し出した。

「はいお土産。あまったからあげる」

「わーい」うれしそうに花束を抱いたノブは姫を見上げた。

「どーぞ。あ、ベースのりょーこサマだめ」

「サイドギターだもん、いいね」

「ったくミーハーなんだから」

「ステージ、あげちゃっていい？」

つばさは椅子をひいて立ち上がった、代わりに姫を座らせる。
「はい交替」
「あれ、つばさどこ行くの？」
姫は長い髪をおさえて背後のつばさに顔をそらせた。
「ネタ探しの見回り。つらいのだ、編集長は」
「がんばってねー」
ノブと姫に手を振られて、つばさはコンサート会場をあとにした。

「男子部二階、ほっとんどネタなしと…」
ダンボール箱抱えたのやら、夜食の買い出しで牛丼などかかえた一群やらが行き交う男子部校舎二階の廊下である。ネクタイピンサイズのマイクに口述してテレコのスイッチを切ったつばさは、上の階からどおーっと降りてきたモトクロッサーの集団をよけて、東階段を三階へ上がっていった。
ふだんは二年生の教室が集中している三階は、B組とF組が上映会場として使い慣れた教室をおさえた以外、ほとんどが有志やクラブのものになっている。
「この階は、と」つばさはプログラムとリストに目を落とした。「映画が三つ、喫茶店とおでん屋と焼き鳥屋一つずつ、お化け屋敷二つと残りはマン研か…」
これといって変わったところがない組み合わせである。すぐ目の前には、熱帯ジャングル風の

飾りつけをした教室にモンスターハウスと書かれた半魚人をかたどった看板が出ている。中からとてかんと音がしているところをみると、まだ作業は続いているらしい。

「ごくろーさん。……大体そうなんだ」

ゴリラ数匹（のぬいぐるみを着ている男子）や大きなスケールのフォッカー複葉機とすれちがいながら、つばさは歩き出した。

おでん屋と焼き鳥屋の教室が暗いだけで、他は全部こうこうと明かりがついている。

のったり歩いていたつばさは、廊下の先の教室の入り口の一つに、どこかで見たような女生徒が立っているのを見つけた。

「あれ？　新聞部の部員…」

ぱっとは誰だか思い出せない。代わりに、そんなことあるはずないという感覚がつばさを襲った。

その子は、教室の外の壁に貼られた制作日誌風の写真と説明文を興味深げに眺めていた。

「だーれだったっけー」

かまわずに、つばさは声をかけようとして――はっと出かけた声を呑みこんだ。

床が、ぐにゃぐにゃに崩れていきそうな気がする。

「ヨーコ…」

かすれた声でつぶやいたつばさは、プログラムを握った手で目をこすった。

写真を覗きこんでいた彼女が、あっけないくらい簡単につばさに振り向いた。唇をとがらせて

目を見開いていた表情がつばさを認めて瞬時にやわらかくなる。忘れかけていた、二度と見られないはずの微笑――

つばさは声を限りに絶叫した。

窓ガラスが破壊されそうな悲鳴に、2－Bの教室内で上映会場の仕上げをしていた全員の手が止まった。

「あバカ、画鋲の箱落とすな！」

「てっ手を放すなあ！」

廊下側の壁に化粧紙代わりの模造紙を貼っていたグループと、映写台を直していた集団でアクシデントが発生した。フライドチキンをくわえて観客席で夜食中の沖田が声のした方を見た。気味の悪い顔で口をもぐもぐさせる。

「悪寒が走った。何だ今の声は」

「女の子の声でしたな」牛丼を食い終わってつまようじをくわえた真田が立ち上がった。「痴漢にしてはすごい声だったが」

歩いて行って廊下にひょいと首を出した真田は、ぎょっとして声をあげた。

「出あえ――！　者ども曲者じゃあ！」

廊下には、つばさ女史が泡を吹いてへたりこんでいた。

「出たの。幽霊。死んだはずの写真見てて。見たんだからあたしは！　間違いない幽霊よ、本

物のお化け！」
なんとか事態を説明しようとするつばさの椅子のまわりに、男子らが集まっている。
「完全に錯乱しとるな」
頭を指した沖田は、のんびりと次のフライドチキンにかかった。
「横着陰険がモットーのてめーにしちゃ、お珍しいことで」
「沈着冷静よバカあー」
つばさはまだ息をきらしている。
「死んだはずの子がいたんだから、ここの外に。ほんとよ、ウソ言ったってしょーがないんだから」
「榊氏や」真田が隣の榊に耳打ちした。「何言ってるか、おぬしおわかり？」
「つまり、とーとー頭に来ちゃったんでないかい？」
「てめーら、信じてねーな！」
つばさが喚いた。沖田はため息をついた。
「お化け屋敷の連中にいたずらされたんだろ。ぬいぐるみ見てあの悲鳴ってのは、ほとんど信じ難いが」
「お化けじゃない！」
つばさは廊下を指した。
「幽霊！　いいか、よっく耳の穴開けて聞けよ、つい一週間前に病院で死んじゃったばかりの、

うちの部員だった氷島陽子って子が、つい今現在そこの外で写真ながめてた！」
がたん、と椅子が倒れる音がした。見ると沖田が突っ立って天井を見ながらぶつぶつ言っていた。
「氷島陽子…あいつか…俺以外の奴にも見えたってのか、あいつが…」
D・DAY　Burst Time——爆発時間——
そして、日本中はわやくちゃになった。

ACT・2　爆発――目覚めれば悪夢

それが正確にいつ起こったのかは、最後まで誰も知ることがなかった。ただ深夜から夜明けの間のどこか一点、あるいはその時間内にじわじわと進行していったのかもしれない。

そして日本列島は、日の出と同時に何の被害も受けずに史上最悪の混乱の中に突入した。

結局部屋に戻れずに、教室に毛布を持ち込んで眠りこんだ榊は、轟音レベルの騒音で夢を破られた。

「なん…何事だあ」

映写台の下で毛布にくるまってうずくまっていた榊は、寝不足の目で白々と明けた空を窓ごしに見上げた。

「ああ？」

かなり大きな影が、校舎の上を飛んでいったらしい。だが、校舎を根こそぎ揺らしている轟音

はその後を追ってくる。
「何が飛んでんだ…」
他の連中がもぞもぞ動き出す。起き上がった榊は、毛布を被ったまま窓から顔を出した。
「あー、なんだあー」
西の空へ飛ぶブロッケードランナーらしき白い宇宙船を追うようにして、星南学園をつぶさんばかりに巨大なスターデストロイヤーがレーザー砲を撃ちまくっていた。
「てっきり目は覚めてるもんだと思ったが」
忘れもしないハンマーヘッドの六発ロケットの噴射光を追いかけて、とてつもなく巨大な三角形の船体が頭上を圧倒していく。細かいディテールがゆっくり通過していくが、あまりに大きすぎて、その全体を一目で見ることはできない。
「うっせーなー」これも眠そうな目をした沖田が、榊の横から顔を出した。「何が飛んでんだよ」
「ご覧の通り」
空を見上げるなりぽかーんと口を開けて硬直した沖田に、榊が宇宙戦艦を指してみせた。
「惜しかったなー、タイトルバック見損なったぜ」
「なんだあこいつは！」沖田はいきなり榊の襟首をつかみ上げた。「説明しろ。このデカ物貴様の仕業か！」
「ノオー！　ブレイク、ギブアップ。オレが知るか、ンな事！」
「それもそーだな」

沖田はあっさり手を放した。が、今度は深刻な顔で戦艦の腹を見上げる。
「じゃー、なんだこれは」
「こないだの怪奇現象の続きでない？」
榊は、巨大な三つの噴射口から光を噴いて飛んでいく宇宙戦艦をのんびり見送った。
「まさか」沖田はなんの確証もなしにそう言った。「あんな事がそうそう起こるかよ」

編集室の第三家庭科室は、頭上の轟音にもかかわらず誰も起きず、しーんとしていた。
男女入り乱れて寝袋や毛布にくるまって眠っている連中の中で、最後に寝入ったつばさの就寝時刻は午前五時。オールナイトコンサートの最後（トリ）のグループ「アウストラ・ロピテクス」のアンコールが終わってから一時間もたってからである。
そのつばさの寝袋の枕元にセットされた目覚まし時計のタイマーが、ラジオのスイッチを入れた。スピーカーから、ぴたり時報が流れる。
『六時をお知らせしました。引き続き朝のポップスをお送りします』
当のつばさはぴくりとも動かない。やがて流れ出したB・ジョエルの「素顔のままで」が二コーラス目に入って、やっと動き出す。
「あーん眠いよお」
乱れた髪のまま寝袋から体を起こしたつばさは、はっとしてラジオを見た。曲の音が絞られたかと思うと、アナウンサーが喋（しゃべ）り出したのである。

『臨時ニュースをお伝えします。臨時ニュースをお伝えします』

つばさはラジオへ体を伸ばして、スピーカーを自分の方に向けた。目の上に落ちてきた前髪をかきあげて耳を傾ける。

『ただいまゴジラは品川沖、第二台場へ上陸の模様――付近航行中の船舶ならびに沿岸地区の住民は、至急避難して下さい』

「何言っとるんじゃ、このアナウンサーは」

『港区、品川区、大田区沿岸地区に、退避命令が発令されました。繰り返します――』

「……ゴジラだって」つばさはラジオを消した。再び寝袋にもぐりこむ。「寝不足だ、寝なおそう」

だが目を閉じたつばさは、間髪を入れず響いた耳をつんざくような咆哮に跳ね起きた。

「何だあ？」「何いまの…」「またサラマンドラ？」

つばさはざわざわと起き出した編集部員をかきわけて窓に出た。一息に窓を開けて陽が昇ったばかりの青空を見上げる。

「うっそだあ」

炎が形を作ったように、空中に巨大な三ツ首の竜が出現しようとしていた。

怪奇現象の大詰めに出現した三騎竜などという本家本元の西洋怪獣ではない。よく動く長い三つの首、骨格の浮き出た羽毛のない翼、二本の尾――

「頭痛がしてきた」つばさは頭を抱えた。「まるっきりキングギドラだ…キングギドラ？」

つばさは、はっとして顔を上げた。
「何起きてるのー、編集長…」
つばさのそばに寝ていた眠たそうな十南女史に手を上げる。
「十南ちゃんラジオ付けて、ボリューム上げて！」
「はあい」
ラジオから、「ロンゲスト・タイム」をＢＧＭにして、せっぱ詰まった口調のアナウンスが喋り出した。
聞いているうちに、編集部は笑いをこらえるような妙な沈黙に覆われた。
――東京都杉並区上空に、トラジマ模様の巨大なＵＦＯ母船が出現し、じっと滞空、付近を制圧しているらしい。また下町一帯はＢ29の大群に無差別爆撃をうけ、所によっては銀と赤の巨大な異星人がセミのような顔のハサミ手の宇宙忍者と街並みをぶっ壊しながら死闘を繰り広げているという。
「あたしの趣味じゃない」
つばさはぶすーっとした顔で、誰かの飲み残した紙コップのコーヒーを飲み干した。

前回の怪奇現象はすべて学内で引き受けていた。しかし今回の場合、全国規模でこの何とも名付けようのない現象が起きたためか、個々の事物は比較的分散され、学園内は一応の平穏を保っていた。

というのはもちろん表向きで、学園祭当日の朝が平和であるはずがない。ただでさえ仕上げや修理、一夜漬けならぬ一朝漬けの仕事が多い。しかもその上、この現象の余波か、座敷童子やむじな、のっぺらぼう他、コスチュームプレイか本物かわからぬ正体不明の者どもが生徒に混じりはじめていた。

「あ、あの、言ってる意味がよくわからないんだけど…」

夜明けになってやっとベッドにもぐりこめたばかりなのに、もう起こされちゃったノブが目をしばたたかせた。女子寮、43号室である。

「とにかく着替えて」

「なんなの、一体…」

目をこすりながらベッドから起き出したノブが、タンスからブラウスを引っ張り出してパジャマを脱ぎだす。

「おかしな事になってるの！」

着替えるノブに、つばさは事情を手短に説明した。

「……」ノブは黙ってしまう。完全に訳がわからないらしい。

「何が起こったの？」

「あたしだって知らないわよ！」

つばさは自分の机の上に置いてあったハンディ・トーキーをとった。

「とにかく人手が足りないの。オープニングセレモニーまでヒマでしょ、手伝ってほしいの」

「確かラストのリハーサル……。だから、何が起きてるってゆーの？」
「知らないの!?」
ノブはブラウスのボタンをとめながら、こっくりとうなずいた。
「平和な人」ひょいと窓の外を見たつばさは、ノブを手招きした。「ちょっと来て」
「ん…」
下半分がまだパジャマのノブが、うーんと伸びをしながら来る。つばさは窓を開いた。
「見て」
あくびしながら、ノブが朝の冷気の中に顔を出した。
「何が見える？」
「――わたし、も一回寝る」
ノブはよたよたとベッドへ動きはじめた。
「エプロンスカートの女の子を乗せたジャバウォッキーが飛んでった……おやすみなさい」
「はいスカート」
ベッドにもぐりこもうとするノブに、つばさはスカートをおしつけた。ついでのことにヘアブラシもとって、ノブの寝乱れた髪をとかしだす。
「あーん、わたし寝るう」
「ったく、この子眠いとすぐ幼児化するんだから、はやくパジャマ脱いでスカートはいて」
「やだ、えっち。わあ、つばさのすけべえ」

「前回よりさらに節操がないな」
「あんたがなんでこんな所いるのよ」
女子部校舎の編集室で記事のメモをひっかきまわす沖田を、つばさはうさん臭そうににらみつけた。
「ここが一番学外の情報が入ってくんだよ」
「邪魔だから出てってくんない」
「てめーだって昨日の昼わざわざレストランまでついてきやがったじゃ…」
ねーか、と言いかけて、沖田はメモ類から顔を上げた。自然につばさと目が合う。
「……」
昨日の昼食は学食で食べたはずである。しかし――何かが違うような気がする。
「あな珍しや、つばさと沖が見つめあってる」
「あ、ホントだ。何やってんだこんな所で」
入ってきた真田と榊の声で、二人はあわてて目をそらした。榊が沖田の前のテーブルに片手をついた。
「どしたの？　二人してより、もどしてたの？」
「誰がだ、このー」
「ぶつわよ！」

榊はひえっと首をひっこめた。沖田がメモの束をほうり出して立ち上がる。
「空(うえ)じゃまだ一反木綿飛んでんのか」
「もー飛んでないよ。編集長、せんべもらうでー」
のりまきせんべいをくわえて、前日付の校内新聞を読みはじめた真田が答えた。
「今いろんなのが飛んでる。えーと、ゼロ戦とムスタングとバルキリーとアディゴと」
「Xウィングファイターとタイファイターもドッグファイトやってるよ」
「また訳のわからん…」
沖田は窓から朝の空を見上げた。さっきまでは古典的な種類の妖怪が飛びまわっていた空に、今は種々様々な飛行機がスピーディーに飛び交っている。
「宇宙戦闘機がどーして空飛べんだよ」
ルナ・インターセプターを追って校庭で着陸(タッチ・アンド・ゴー)即離陸をしていったAウィングを見た沖田が額に手をあてる。
「ったく、これも現実か?」
「これでも現実でしょ、一応」
現実主義者のつばさは、プライドを捨てたような事態でなんとなく元気がない。
「つねりゃ痛いもん。なんなら殴ってやろか」
沖田は無視して特設ステージのある校庭を見た。
「なんだ?」

遙か彼方から、高速ブルドーザーのような音が聞こえてきた。
「こ、この音は…」
榊がとんできて首を出す。男子校舎の方向から何か巨大なものが土煙をあげて突進しているらしい。
「腐海があふれた」榊は呆然とつぶやいた。「もう誰も止められない」
イヤホンを片耳にあててラジオを聞いていたつばさが顔を上げた。
「八王子の山奥から東部方面へ向けてモスラの大群が暴走中……これ？」
「モスラじゃない。情報がむちゃくちゃだ。モスラが赤い眼して脚で突っ走るかよお」
地鳴りが、やがて地震に変わる。校舎を小刻みにゆらし、翼を失ったジェット機が地面を走り続けるような勢いで、壮大な群れが現れた。直径一メートルもありそうな、十四個もの眼を赤く光らせ、装甲戦艦のような甲皮をもった玉蟲の大群――。家よりも遙かに大きい蟲が、信じられないようなスピードで暴走していく。
「はらー」
甲皮の下の数知れぬ脚を動かし、土煙をあげて巨大な蟲の大群が校庭を通過していく。土煙の勢いに耐えかねて、沖田はぴしゃりと編集室の窓を閉じた。
ものが巨大過ぎて、一階の教室からでは暴走する大群の一部しか見ることができない。
「なんだこれは！」
通り過ぎる土煙（の向こうの大群）にみとれる榊に沖田が喚いた。

「見てわからない？　オレは原作の方が好きだが、あれはいい映画だった」
「ンな事訊いてんじゃねェ！　この事態を説明しろ！」
「あんさん、そりゃ無理な相談でっせ」真田が沖田の肩をたたいた。「この事態説明できるもんなんて、そうおるわけがおまへん」
「貴様どこの生まれだよ」
「わては伊賀は上野の生まれでおま」
言ってる間に、最後の一匹が校庭を通り過ぎた。土煙がおさまってくる。
「あーらら、特設ステージがめちゃくちゃ」つばさは、窓に手をついて額に手をかざした。「ここまでくると、記事にする気もしないわねえ」
「勝手に遊んでろ」沖田は窓に肘をついた。「ヒマつぶしにゃ困らねえ…え？」
暴走した大群が通り過ぎて、無数の足跡が穿(うが)たれた校庭に、跳ねあげられた土くれがばらばら落ちてきた、と同時に、女の子らしい人影まで落ちてくる。
「…まさか…」
土くれと一緒に、人影は校庭に落ちて、したたか尻を打った。
「いったあ」
その顔を見るなり、沖田は電気に打たれたように体を伸ばした。
「思い出した！」
窓を開けるのももどかしく飛び出し、上履(うわば)きのまま校庭へ駆け出す。

「はら…いっちゃった」
「欲求不満なんだろ、沖田」真田は両手を合わせた。「なんまんだぶなんまんだぶ」
「おまえ！」あわてて立ち上がった彼女へ、沖田は叫んだ。「こら、逃げるな！」
びっくりしてこちらを見ている氷島陽子へ駆け寄った沖田は、彼女の二の腕をしっかりつかまえた。
「やっと見つけた。今度こそ逃がさないぞ」
「え……うそ、あたし、覚えてるの？」
「当たり前だ。案内人の奴どこへ行きゃあった！」
「やあ、とうとう呼ばれましたか」
いささか間の抜けた、疲れた声がした。沖田は、はっとして振り向いた。
「や、どうも」
黒服の案内人が、帽子にちょっと手をあててあいさつした。
「案内人」沖田は息をついた。「探したぜ」
「あれえ――。やっぱり思い出しちゃってるんですか」
「なんだなんだ」「何がどーしてどーなった」
わいわいと、榊と真田が来た。その後ろに、蒼ざめた顔のつばさがよくわかってないノブという。

「お、ちょーどいいや」
沖田は、榊たちに向き直って案内人へ手を向けた。
「この方が、今回の騒ぎの総支配人だ」
「あらそんな、ちょっと待って下さいよ」案内人が、のんびりと白いハンカチで汗をふいた。
「あたしゃ、そんなご大層なもんじゃありません」
「ちなみに、こちらの女の子は」聞いていないふりをして、沖田は続けた。「今回の騒ぎに巻きこまれちゃった新聞部の一年生だ」
「二年生です！」陽子が口をとがらして訂正した。「でした」
「そう、二年生。そうだな、つばさ？」
つばさは、血の気の失せた顔のまま、あいまいにうなずいた。
「総支配人……へー」
榊が案内人を見たまま感心してうなずいた。
「んじゃ、今回の事にも色々と詳しいんだ」
「当然さ。さー案内人！」沖田は案内人に詰め寄った。「この事態をとくと説明してもらおーじゃねェか！」
「見てわかりませんか？」案内人は、困ったような顔をした。「夢が、現実に対して逆襲をはじめたんです」
「夢が、逆襲をはじめた？」

沖田は、言っていることの意味がよくわからずに訊き直した。きょとんとしている陽子のそばを、小さな羽根の妖精が飛んでいった。

「じゃあ」榊が口を開いた。「この訳のわからないお祭り騒ぎって、全部夢なの？」

「夢じゃありません」案内人はこみかめに指をあてた。「それであたしたちも困ってるんです」

「じゃ現実か！」沖田は声をあげた。「あんな怪獣や化け物が全部現実で、のしのし歩き回ってるっていうのか！」

「言い方を換えましょうか。夢が現実に逆襲をはじめて、夢が現実に出てきちゃったんですよ」

「夢が、現実に出てきた？」

沖田は呆然とつぶやいた。それから喚き出す。

「夢が現実世界の本物の中に出てくるはずなかろーが！」

「ほお」案内人はわざとらしく腕を組んだ。「精神とか、心なんてものは現実に存在しない、とおっしゃるんですか」

「ンなもんあったって、目ン前に出てくるわきゃねェだろ！」

「まあふだんだったら出てくるはずないんですけどねえ」

案内人はあっさり認めた。

「それに、あたしたちもこんな事にならないように努力もしたんですけど、出てきちまいまして」

「そんなバカな」

「まあ、バカっていえばバカですけどねえ…今までに、いったいいくつの夢が生まれ、消えていったかご存じですか。現代ってのは、その壊れた夢の上に成り立ってるようなもんでして――」
「夢ったって」榊がつぶやく。「そんな…」
「そうやって、捨てられた夢がたまりにたまったら、どうなります？」
「どーなるんだよ」
低い声で、沖田は空を見上げた。案内人は両手を広げた。
「こうなるんですよ。まったく、こりゃ責任問題ですよ。管理責任問われて、上の方、何人か首とびますな」
「てめえ、責任者出せ！」
「へえ。ルシフェルか閻魔（えんま）の旦那でも呼んできましょうか」
ぽろっと出てきた、とてつもない大物の名前に、沖田はあわてて手を振った。
「出すな、んなもん！」
「ははは…」
真田が力なく笑った。榊がぼんやりつぶやく。
「夢だって……はは、そんな」
沖田が同意する。
「どーしても信じられん。あんまりにもアホらしすぎる。夢なんてあやふやなもんが、こんなに無節操に現実（こ）に出てくるなんて、信じられない」

「それだったら、あなたたち、何で映画や小説みたいなありもしない夢物語、バカにもせず見てられるんです？」

「ははは…」

沖田は、返事ができずに力なく笑った。

「人間だけですよ。昔っから」

案内人は続けた。

「ありもしないお伽話やホラ話、見たわけでもない神話や伝説なんかに夢中になって、時には夢を現実だって信じてた。――ま、人間一人ひとりで見てる夢の力（パワー）ってのは、全体から見れば大したことはありません。でもね、みんなで同じ夢を見たとなると大変です。ありもしないものが存在することになりますから」

「同じ夢……それでか」沖田は、じっとりと額に浮いた冷や汗をぬぐった。「それで、みんなが知っている…知らなくても、誰かが見たことがあるようなしょうもないのばっかり出てきやがったのか」

「古今東西とりまぜて、ジャンル問わずに、ね」

案内人は笑ってみせた。

「おまけに現実と非現実もごっちゃまぜで、いわば歴史の中の悪夢に類するようなことまで、出てきます。土着の妖怪や魑魅魍魎（ちみもうりょう）――出雲（いずも）じゃ八岐大蛇（やまたのおろち）なんていう化け物がスサノオの大将と暴れてますし、京都の方でも全長十キロあるような大ムカデが出たそうです。島原では殺された

切支丹が踊ってるそうですし、広島や長崎もひどいことになってるらしいですよ」
「日本中ムチャクチャじゃないか。……ちょっと待て、土着の化け物が暴れてんなら、なぜそれを鎮めるはずの八百万いるはずの神様が出てこないんだ？」
「意外にお詳しいですね」案内人は沖田を見た。「まあ不幸中の幸いか、不幸なのかわからないけど——今、十一月ですけど、旧暦の太陰暦じゃまだ十月でしょう。十月を、古来何て言うか知ってます？」
「知ってる」陽子が言った。「確か、神無月（かんなづき）って」
「そうなんです。いつもなら全国に散ってるはずの神様たち、みんな出雲に行っちゃって、そこで出てきちゃったもんで。まあ、宴会でもやって盛り上がってるそうですけど」
「ひでェ」沖田は思わず目を覆った。「マジかよ。大体、どうしてこんな事になったんだ！」
「まあ、月まわりも場所も悪かったんですよ。星の配置も、火星と土星と天王星が牡羊座に入ってるわ、海王星も水瓶座に重なってるわで、何も起きない方が不思議なんですけどね。いつもの事ながら、人間がものを〝想う〟パワーにはびっくりさせられますが——まさかこんなひどいことになるとは思いませんでしたよ、わっはっは」
「わっはっは、じゃない！　何とかしろ！」
「何とかと言われましてもねえ」
案内人は心底困ったような顔をした。
「つまりですね、先日開いちゃった穴が、また開いたわけなんです」

「あな？」
榊が訳のわからない顔をした。案内人は補足して説明する。
「あなたたちの現実の世界と、いわゆる非現実の、精神界っていうか――まあ、ひらたく〝あの世〟と思って下さい。本来、忘れられたはずの夢が蓄積されてるゴミ捨て場みたいなもんです。人の想いってのは厄介なもんでね、あんまり強いやつはそうは消えないんですよ。そういうのがずっと消えないままたまりすぎて、今回こんな形で爆発しちゃった訳ですが、その、もう一つの世界とこの世界の間に穴が開いちゃったばっかりに、今まで捨てられていた夢が逆襲をはじめたんです。だから、この穴を閉じればなんとかなるんじゃないかと思いますが」
「穴なんて、どこに開いてんだよ」
沖田は、荒れ地になったような校庭を見回した。異次元とつながっているような穴など、どこにも開いていない。
「ここですよ」
案内人は事もなげに地面を指さした。
「ここに――正確に言えば星南学園高等部の敷地に、ばかでかい穴が開いちゃったんです」
「穴が……」
陽子を含めた六人の男女は、あちこちを見回した。別におかしい所はない。古今東西の伝説や神話が現実のものと化している世界がおかしくない、とすればの話だが。
「えー、上がって見ますか？」

案内人がちょっと照れたように空を指さした。
「いいですか？」
案内人は、白手袋をはめた手を上げた。全員がその手を見るのを確かめて、軽く指を鳴らす。
「！」
まわりの風景が消えた、と思うなり、全員が浮遊感を覚えた。
関東上空だった。遠く、青い地平線が丸く輝き、眼下に日本列島が横たわっている。
「わ、わわわわわあ！」「えー、なに、うそお！」「な、なんだこれは、どした」「ひえ…」「お、おちる、おちる」
沖田、ノブ、真田、つばさ、榊は自分たちが空中――それも成層圏のような超高空にいるのを知ってパニックを起こした。
「ああ、あわてないで下さい、大丈夫です」
案内人は慣れた感じで空中に浮いていた。
「ちょっとした手品です。落ちも窒息もしません。それより、下を見て下さい」
言われて、沖田はすぐそばに陽子の気配を感じながら足元を見下ろした。所々に雲がかかっているため、全体の姿は見えないが、それでも地図通りの関東平野が広がっている。さすがにこんな高空からでは異変を見わけることは出来ない。
「このままじゃ、ちょっとわかりにくいですねえ。ちょっと待って下さい、これでどうだ」

案内人は軽く指を鳴らした。と同時に、関東平野全体を覆って、ぼんやりと渦のようなものが浮かび上がる。

沖田たちは、訳のわからぬまその渦を見ていた。

「本来別々になっているはずの空間が重なって、穴が開いてしまったことによる空間渦動です。中心をよく見て下さい」

沖田は、遙か足元の渦の中心に目をこらした。

穴が——どこに通じているのかわからない、薄暗い巨大な穴がぽっかりと口を開けていた。

「はらー」

空中写真を、頭の中の地図と重ねるとよくわかる。ぼやけた現実の上に巻いた渦の中心はまぎれもなく星南高校らしい。

「どうですか。あなたたちの高校の上に、しっかり穴が開いてるでしょう」

「直径八百…一キロ以上あるなありゃ」

沖田は案内人の方を向いた。どうも空中で体が落ち着かない。

「どこに通じているんだ、あの穴？」

案内人は肩をすくめた。

「この門をくぐる者、すべての希望を捨てよ——なんて文句は書いてありませんけどね、あちら側です。空間の構造がちょっと違ってるんで、現実の方から逆流していくような事態は今のところ避けられてはいますけどね、この調子じゃどうなることか」

案内人は無責任な笑いを浮かべてみせた。
「まあ、もう何が起こったって、あたしゃ驚きませんよ、わっはっは」
「あのな」
沖田は頭を抱えた。つばさが悲鳴をあげる。
「何が起こったって…って、これ以上何が起きるって言うの!?」
「そうですね…」案内人はわざとらしく考えこんだ。「最悪の場合、穴が地球全体に広がって、全世界を呑み込んでしまいますかねえ。地表全域へ穴が広がってしまうと——そりゃもう穴なんてもんじゃありませんが——そうすると、間違いなく現実世界が崩壊しますね」
「現実が崩壊…」
沖田は、世界が文字通り崩れていくイメージを想像した。ろくなイメージが浮かばない。
「具体的にどうなるんだ?」
「もし穴が地球くらいのサイズになってくると、地球があっちの世界へ落ちこんでくるんですよ。本来分かれているべき世界が重なることになりますから、当然周辺の半径二十~三十光年の空域は、バランスを崩して無茶苦茶になるでしょうし、地球そのものは……まあ、ビッグ・バン程度ですめばいいんですがねえ」
「早い話が、地球がぶっ壊れるわけだ」
沖田は大した実感もなしに言った。真田が目を見開く。
「えらいこっちゃな」

こちらもまったく実感がこもっていない。
「他人事みたいに言いますなあ」案内人が腕を組んだ。沖田と陽子を上目に見る。「今回の事は、あなたたち二人が相当深く関与してるんですよ」
「知るかっての！」
沖田がそっぽを向いた。榊が疑いの目で沖田を見る。
「何やったの、沖田？」
「してない！　んなバカ騒ぎ自分から起こしてたまるか！」
その沖田の背で、陽子が小さく縮こまってうつむいている。案内人が指折り数えて言い始めた。
「そもそも幽霊騒ぎの原因はあなたですし、せっかく忘れてもらったはずの事を無理に思い出そうとするし」
「人の頭の中いじくっといて、どーのこーの言える立場か！」
「この忙しいのに、ごちゃごちゃ動き回ってじゃまするし――これはあなたたちもですね」
部外者のふりして面白そうに話を聞いていた面々を、いきなり案内人が指さした。
「はあ…そうですか」
榊が妙な顔をする。真田に、
「心当たり、あります？」
「ない。あるとしたら榊の方だろ、おまえ、わしよりよっぽど妙な事に首つっこんでるで」

「知っててやってたんなら怒りますよ、あたしは。大体、現実の方の世界の人がそんなこと知ってるはずないんですから」
「てめえ、何が言いたい」沖田は、空中に浮いたまま案内人に詰め寄ろうとした。「長々と説明したからには、何かたくらんでやがるな」
「ああ、やっぱり分かりますか」
案内人はしゃあしゃあとして笑ってみせた。
「その通りなんです。実は、少しばかりご協力していただこうと思いまして」
「なァにやれってんだよ」
かなり弱味を握られている沖田は、苦虫をかみつぶしたような顔で案内人から目をそらした。
「ええ。大したことじゃありません。あの穴を修復するのに手を貸して下されば」
「穴って」沖田は、足元に見える渦の中心を指さした。「あの穴か？」
「あの穴です」
案内人は平気な顔でうなずいた。六人は、あらためて下界を見下ろした。
「……」
一同声なし。やがて、榊と真田はノブまで巻き込んでごちゃごちゃ相談をはじめた。
「ちょっと、案内人」
何事か考えこんでいた沖田が、案内人を手招きした。器用に宙を滑り、案内人が近づいてくる。

「何ですか？　あんまり時間の余裕がないんで急いでほしいんですけど」
「あのな、一つ条件がある、ちょっと耳」
案内人は帽子のふちをちょっと折って、沖田へ耳を向けた。沖田が小声で何か言う。
「ああ、なんてことを！」
珍しく、案内人の声が一オクターブ上がった。何事だとばかりに、考え込んでいたつばさと三人が案内人の方を向く。
「こいつを約束してくれるんなら、協力するぜ」
「あー、まったく、何てことを考えてくれるんですか…」案内人は顔をしかめて腕を組んだ。
「まあ前例がいくつかないわけじゃありませんが…ちょっと、成功例はありませんよ」
「んなこた知ったこっちゃねェ。できるのかできねェのか、どっちだ！」
案内人は口ごもった。
「まあ、できないわけじゃ……上の方に許可申請と本人の意志確認して、一ダースばかり手続き突破すれば不可能じゃありませんが、例外中の例外ですし…」
「できるんだな。じゃ、やるのかやらないのかどっちだ！」
「はあ」
「時間ないんだろ、早く決めろ」
「はい…まあ…」案内人は力なくうなずいた。「できるだけのことはやってみますが…」
「よーし決まった。協力してやろーじゃねえか」

「こら沖田、勝手に決めるな！」
声をあげたつばさを、沖田はすさまじい目つきでにらみつけた。
「やるといったらやる！　この世界の命運がかかってんだ、てめーもたまには協力しろ！」
「あいつは何を燃えとるんじゃ？」
沖田を指さして顔を見合わせた榊に、真田は肩をすくめてみせた。
「結局、欲求不満なんだよあいつは」
「じゃ、とにかくついて来て下さい」
なんとなく両肩を落として、案内人は動き出した。下降していく方向だから、水平に動くよりはついていきやすい。
沖田の背を、心配そうな顔の陽子が突っついた。
「ね…何、条件出したんですか？」
振り向いた沖田は、指鉄砲の照準をぴたりと陽子に定めた。
「おまえを生き返らせる――OK？」
陽子は思わず口を手で覆った。一杯に目を見開いた陽子に、沖田はにやっと笑いかけた。
「そういうわけだ。――行こうぜ」

ACT・3 修復——夢の終わり

学校の騒ぎは、相変わらず続いていた。
沖田たちは、人気(ひとけ)の絶えた男子部校舎の屋上にいた。都内の方では大規模な火災が発生しているらしく、真っ黒な煙が雲のようにわきたっている。
「はー」額に手をかざした案内人が、のんびり言った。「えらいことになってますなー」
「こら都内全滅かなー」榊が無責任に頭の上で手を組んだ。「まぁ、あれだけ訳のわからん化け物が大挙して出現すれば、たいがいムチャクチャになるわな」
「早いとこなんとかせんと、日本、全滅するぞ——ん?」
ふと何かの気配を感じて、沖田は空を見上げた。
「なななんだあ!?」
緑色の長い髪に小さな角をはやした、トラジマビキニの女の子が空から舞い降りてきた。
「ダーリン知らないっちゃ?」
「ほ、保健室にでもいるんじゃ…」

沖田がしどろもどろに答えると、トラジマビキニの女の子はすぐ空へ飛び上がった。
「んもう、ちょっと目を離すとすぐこれだっちゃ」
どこかへ飛び去っていく。沖田は頭を抱えた。
「もーやだ！　案内人！　何やりゃいいのか、早くしろ！」
「急いだ方がよさそうですね」案内人は認めた。「来て下さい」
階段へ歩き出した案内人を、六人はあわてて追いかけた。
「どこへ行くんだよ！」
「大温室です。仲間の連絡によると、本物の穴が口を開きはじめたそうです」

大温室は、植物系の怪物に占領されていた。トリフィドやらマンドラゴラやら、食肉植物や魔法書に出てくるような薬草、宇宙植物までが繁茂して、緑の魔界を形作っていた。
その大温室で一番低い場所にある大湿地帯――底無しアマゾンの上を一直線につっきるキャットウォークの上に、一行はいた。
「穴って、これかよ」
直径一メートルほどの暗黒面が、緑色の水面に口を開けていた。そこだけ墨を流したような黒い穴だが、あらゆる光を吸収するらしく中は見えない。
「これですね」
水面上にしゃがみこんで穴を調べていた案内人が立ち上がった。

「この調子だと、十二時間以内に成長をはじめます。早く降りるメンバーを決めて下さい」
「まるでケービングですな」
のんびりとキャットウォークの手すりから器用に水面上に立つ案内人と穴を見ていた真田が言った。
「わしゃ降りた。沖田、行っといでー」
「ではこれを持っていて下さい」
案内人は真田に何かを放った。やたら細い糸がぎっしり巻いてある糸巻きである。
「なんだこりゃ？」
「クモの糸巻きです。総延長で確か三百キロあるから、底まで行くつもりでなきゃ充分間に合うと思いますがね」
「さんびゃくきろだあ!?」沖田が声を上げた。「ちょっと待て案内人、この穴どこに続いている！」
「これですか？　えーと、途中で迷ったりしなければ八間地獄あたりに出られるはずですが」
「いってらっしゃーい」つばさがにこやかに手を振った。「素直に成仏してらっしゃいねー」
「さいなら」
「ちょっと待て！」去りかけた榊の襟首を、沖田はむんずと捕まえた。「相棒が必要だ、つきあえ」

「冗談じゃない！」榊は声を上げた。「この年で地獄になんぞ落ちてたまるか。オレは平和に残りの人生を送るんだ！」

「地獄まで降りる必要なんかありませんよ」

案内人が榊の肩に手を置いた。

「この中へ降りると、ずっと長い坂があるはずです。その終点にある箱を閉じて、鍵をかけてきて下さい」

案内人は、ポケットから何の変哲もない一個の小さな鍵を出して沖田に渡した。

「――箱を閉じて、鍵？」

「これくらいある」案内人は腕を広げて見せた。「がっちりした木製の箱です。多分何も入っていないと思いますが」

「オーケイ、わかった」

沖田は一度鍵をほうりあげてからそれを握り取って、ポケットへほうり込んだ。

「それから？」

「それだけです」

「それだけ？　やけに簡単だな？」

「簡単だといいんですがね。問題は、あたしたちみたいなのがやっても意味がないってことで、あなたがた人間がやらないとしょうがないんですよ」

「なーんか、ウラがありそーな気がする」榊はあさっての方を向いた。「あまりにもいかがーし

ーにおいがする、絶対にウラがある……とゆーわけでオレは降りる」
「逃げるなっちゅーの」逃げようとした榊の、今度は上着のすそを沖田がつかまえた。「往生際わりーぞ」
「はなせー。オレには部屋にまだ読んでないマンガが三冊と、思いを遂げていない恋人があ！」
「コンバカ！」沖田が榊をなぐりつけた。「どさくさにまぎれてなんちゅー事ぬかす。立場考えろ！」
「あの、急いでもらえませんか」案内人が声をかけた。「こちらは、封じ込め――箱のフタさえ閉じれば、すぐに穴を閉じて空間のほころびを直せるよう、仲間を配置しておきます。今のところ夢をおさえるだけでも手一杯ですが、フタさえ閉じればなんとか手空きのスタッフを穴のまわりへ回せると思いますから」
「あいよ、すぐ行く。――おら榊、覚悟決めろ！」
「あー、オレはこんなムチャな奴と同室にしてくれちゃった事務室のお姉ちゃん、一生恨むぞお」
「では、いいですね」
水面上に立った案内人が、白手袋をはめた手を出した。糸巻きの細い糸のはじを持った真田が、糸巻きをほいと沖田へ投げる。
「忘れもん。地下迷宮で迷ってケンタウロスや目無し魚に変身しないよーに」
「じゃ、気をつけて行ってきて下さい」

案内人が指を鳴らすと同時に、細い糸をきれいに巻きつけた糸巻きがカラカラーっと回った——と思うと、一行は穴の中にいた。

「えー!?」

思わず悲鳴をあげたノブを見て、榊と沖田は仰天した。

「ちょっと待て、案内人！　どーして女の子まで来てんだよ」

「まっすぐ、降りていって下さい」

こちらの声など聞こえていないように、案内人の声が上から降ってきた。

「一本道のはずです。ただし、色々と障害があるかもしれませんから、うまく突破してください。ご幸運を祈ります」

「ちょっと待てっての！」

それきり、いくら喚いても返事がない。

「何考えてんだよ、あの葬儀屋…」

沖田がぶつぶつ文句を言いながら歩き出す。

「女の子連れてって、何しろってんだ、ったく」

「すいません」

「え？」

沖田は振り向いた。陽子が、申し訳なさそうに立っている。

「困ったもんですな」榊が石壁に手をついた。＼「あの黒服のおにーさん、残るって言った以外の

全員送り込んでくれちゃったよーね」
「はっきりと意思表示させとくべきだった」沖田は頭を抱えた。「最悪の面子が揃ったあ」
「つばさがいないだけ平和でないかい」
「それもそーだ。早いとこやること済まそう！」
沖田はやけ気味に大股で歩き出した。

鍾乳洞が、長い間使われてトンネルのようになった洞窟を一同は降りていった。洞窟はうねりながら地底へ延びている。明かりを持っていないのにまわりが見えるのは、ヒカリゴケでも群生しているのかもしれないが、それらしいコケは見当たらない。
からから回りながら糸を伸ばしていく糸巻きに目を落とした沖田は、ほとんど減った様子もない糸にため息をついた。
「もう一キロは歩いたはずだが」
「長い穴だね、んとに」
でこぼこがすりきれて、歩きやすくはなっている道を進む榊が言った。
「なんか寒いな…しかし、うちの学校の下にこんなでかい洞窟が穴開けてるとは知らなかった」
「基礎工事で手ェ抜いてあんまり掘らなかったんだろ。え？」
沖田の背をつっついた陽子に、沖田は振り向いた。
「これ、黄泉平坂（よもつのひらさか）です」

「臓物のひらき？」
「妙な聞き違いするな！　よもつのひらさか？」
沖田は榊から陽子に目を戻した。
「なんだそりゃ？」
「黄泉（よみ）の国への入り口です。…多分」自信がなさそうに付け加える。「通ったことないからわからないけど」
「通ったことないって、どこ通っていったんだ？」
「私、登る方だったから」
「何のお話？」榊が割り込んできた。「登るとか通るって？」
「何でもないなんでもない」説明するのが面倒で、沖田は手を振ってごまかした。「で、黄泉の国って？」
「あの世のことだろ。地獄に通じる穴なら三途の川あたりに出るんじゃ…八間地獄だゆーてたね、あのおにーさん」
「どうなっとるのかわからんな」沖田は首を振った。「しかし、そーすると、地球の中にあの世があるとゆーことに…」
「あのおにーさん、異次元がどーのこーのって言ってなかったか？」
「言ってた」
「それだと、あの世ってのはパラレルワールドとゆーことに…」

「何か聞こえないか？」
榊の声は聞かずに、沖田は立ち止まった。注意深く前方へ目をこらす。なだらかに傾斜した洞窟は先が左へカーブしているおかげで見通しが効かない。
「何かって？」
言われて、他の三人も耳を澄ます。かすかな風の音と、洞窟に特有の反響音の他には――
「誰かな？」
「――歌、ですね」陽子は目を閉じた。「誰かが……誰か？」
「先行こう」沖田は歩き出した。「さーて、どなたがいらっしゃるのか」
風に乗ってくる歌は、進むにつれてはっきり聞こえるようになってきた。女声のソプラノが、短調（マイナー）のメロディーを歌っている。
「何語だ、これは」途切れて聞こえてくる歌詞に、榊は顔をしかめた。「日本語でなし英語でなし…沖田わかる？」
「よーわからんが、ドイツ語っぽいな」
「ドイツ語ね。ドイツ系の妖怪ちゅーと」
沖田ははっとして足を止めた。どちらからともなく榊と顔を合わせる。榊はわざとらしく顔をしかめた。
「歌うたう妖怪、いたね」

「耳ふさいで走り抜けろ！」
沖田は足を踏み出した。
「――え？」
「うそ」ノブが声をあげた。「なにこれェー」
夕暮れた空の下に、見上げるような岩がそびえている。広い河面に重く垂れこめた霧がゆっくり流れていく。それまで遠かった歌声が、急にはっきり聞こえ出した。
「上からだ」
かすれた声でつぶやいた沖田が、岩山を見上げた。長い金髪を風に流されるにまかせた影が、時々キラリと輝くくくしでながら歌っている。
「んなアホな。ローレライ…まさか…」
「ドイツのライン河までワープしてきたってのかよ！」
ライン河畔、急に流れが速くなるために難所として知られたローレライ岩――。その岩の上に腰かけた乙女が歌うと、船乗りはその声のあまりの美しさに舵(かじ)をとることすら忘れ、船は岩礁に打ち砕かれ沈んでしまうという。
「うそだ。んなことがあるはずがない！」沖田は頭を振った。「幻だ。見るな！」
耳を塞ぐ。だが、大きいとも思えない細い静かな歌声は指を通して耳に入ってくる。
「こんなバカなはずあるか。ここは地底トンネルだ。河も空もあるもんか」
――眠りなさい

言葉を通さずに、心地良い子守歌のような声が直接頭に入ってきた。
――安心して、眠りなさい。心配することは何もないわ
沖田はかまわず進もうとした。踏み出した足に、やけにねっとりとした河の水がからみつく。
沖田の横から、榊がよたよたと河へ入りこんだ。河面が、榊を包むように盛り上がる。
「やめろ！」沖田は叫んだ。「榊、行くなあー」
「行くの！」
沖田の前へ出た陽子が、沖田の腕をとった。
「幻が見えて、聞こえているだけです。あんなの、見ないで下さい！」
――そう、あなたは夢を見ているわ
ローレライが直接、沖田に語りかけた。岩の上から手を伸べる。
――だから、安心して眠りなさい。ここにいれば、目を覚まして現実に戻る必要もないのだから
沖田は、脳へしみこんでくるような誘惑に耐えながら、もう一歩足を踏み出した。
すぐ目の前で、榊が波に抱かれるように倒れこんだ。支えようとしたノブの耳に、ローレライの声が聞こえてくる。
――忘れなさい…これ以上は進めないわ
「どうして!?」
ノブは悲鳴のような声をあげた。

――このままとどまって、二人で夢を見続けなさい。ここには、不安も危険もない。なぜ好き好んでわずらわしい現実へ帰ろうとするの？

「関係ないでしょ。ほっといて！」

――ここは平和よ。争い事も辛い事もない。それなのに、なぜ歩き続けようとするの

「うるせー」

倒れていたはずの榊がむくり、と半身を起こす。

「沖田、水なんてウソだ。おいて、頭ぶつけちまった」顔をしかめて額をさする。「火花が散った。沖田、先行ってるぞ。やいローレライ、てめー責任取りゃあがれ！」

まだぼんやりしているノブの手を引っ張って、榊は歩き出した。が、すぐ止まってくるりと振り向く。

「今度は転んでも痛くない所でやってくれ」

そのまま、すたすた歩いてゆく。沖田から見て、河面を歩いていった榊がローレライの岩と重なると同時に、河面にたれこめた霧がゆっくりと風に流されはじめた。

「――え？」

気がつくと、辺りは元の洞窟に戻っていた。沖田はふうとため息をついた。

「終わりか……おいこら待て！」

歩き出そうとした沖田は、ふと立ち止まって頭一つ分低い陽子の顔を見下ろした。

「まさかと思うけど、この穴ん中、あんな調子の妖怪がうろちょろしてんのか？」

陽子はあわてて首を振った。
「あんなの、いないはずです。それにローレライって、日本のじゃない」
「だよな。とすると」
沖田は、陽子と並んだまま歩き出した。糸巻きがからから回り出す。
「案内人の奴、夢が現実に逆襲はじめたって言ってたな」
陽子はうなずいた。
「このバカ騒ぎが、夢の反乱だとしたら、もし夢が本気で現実を乗っ取ろうとしているのなら、当然俺たちを妨害にかかる…ヨーコちゃん、どー思う？」
「え、えっと、夢が妨害してるんですか？」
「そう考えると」沖田は額に手をあてた。「こいつぁ厄介だ。あんな妖怪がぞろぞろ出てくるんじゃたまんねーぞ」
その時、突然洞窟の湿った空気を裂いて悲鳴が響いた。絹を裂くようなノブの悲鳴と、カエルをつぶしたような榊の声である。
顔を見合わせて、沖田と陽子は駆け出した。カーブを曲がりきった所で、先に行っていた榊たちに追いつく。
「なんじゃ、こりゃあー!?」
思わず声をあげた沖田に、かろうじて踏みとどまっていた榊が喚き返した。
「わかるか！　オレぁヘビ女に知り合いいねえ！」

古代ギリシャ風のローブをまとったその体の上に、無数の蛇がのたくりまわっていた。
「何なんだよ、この怪奇ヘビ女は!?」
細かいうろこを闇に光らせて、空気をはくような威嚇(いかく)の音をたてながら、いくつもの鎌首がゆっくりもたげられる。一匹一匹の大きさは大したことはないのだが、それが古風な飾りをつけたローブの上半身を覆い尽くして蠢(うごめ)いているとなると、これはもう気色が悪いどころのさわぎではない。
ゆっくり上がりはじめた無数の蛇の首の下から、白いローブに包まれた豊かな胸が見えはじめた。合わせ目から、真っ白な胸元が覗く。蛇の群れが、頭のあるらしい所から四方八方に広がり、毒を持っているらしい鋭い牙を見せながら沖田たちをにらみつけている。
「わ、わかった、沖田あ」榊が情けない声をあげた。「こいつメデューサだ。蛇女じゃなくて、ロングヘア全部蛇にしてるんだ」
蛇の間から細い首筋が、そしてうすい微笑みをたたえたくちびるがその姿を現した。そして驚くほど整った鼻とともに、見るものすべてを石に変えるという瞳が――
「見るな!」とっさに沖田は叫んだ。「目ェ閉じろ! 見るんじゃない! 回れ右!」
自衛本能も手伝って、ほとんど瞬間に全員が目を閉じてメデューサに背を向ける。
沖田は横目で陽子を見た。
「あれ、本物か?」
「わ、わかりません。あんなの、知りません」

「まあ、知るわきゃねェな」
「どーすんだよ沖」今まで降りてきた坂を見上げたまま、榊が大声を出した。「このまま逃げるか!?」
「アホ言え。戻ってたまるか！」
「だってメデューサって見たら石になるって妖怪だろ？」
「おまえ試してみろ。本当に石になるかどーか」
「冗談じゃねえっちゅーの。もし本当に石になったらどーしてくれんだよ！」
「寮の中庭にでも飾っといてやるよ」
「沖田やれ沖田、女子寮に賽銭箱つけて展示したげるから」
「何とかしてよお！」たまりかねたノブが背後を指さした。「まだいるのォ、あれ」
「鏡ないか鏡？」
沖田が女の子二人に訊く。あちこちに手を突っこんで探した二人は、申し訳なさそうに首を振った。
「鏡がないとなると、ヘラクレス流鏡返しは使えない…」
わざとらしく考え込んだ沖田に、榊が喚いた。
「てめえ何考えてやがる！」
「見なけりゃ何とかなる。おーし全員手ェつなげ」
「へ？」

「手探りで前進する」
「ひええ…」
沖田を先頭に、一行は陽子、ノブ、榊の順に一列に手をつないだ。糸巻きごと陽子の手を握った沖田が、左手で壁に触れながら前進を開始する。
シューッという蛇の威嚇(いかく)の声が、段々激しくなる。時々、蛇が襲いかかってくるような空気を切る音まで聞こえてきた。
「沖田あー」
「情けねえ声出すな！」
「まだかぁー」
「歌でもうたってろ！」
言っている沖田も、ひざが震えている。ただでさえ明るいとは言えない洞窟の中を手探りだけで進むのは、感覚的に不安とか言いようがない。
いつまで進んでも、前から蛇の蠢(うごめ)く音が聞こえてくる。陽子の細い手を握った沖田の手に、じっとりと汗がにじんできた。
「ったく」岩壁にはわせていた手で、沖田は汗をぬぐった。「メデューサの奴、俺たちと一緒に歩くなんて陰険な事してんじゃねーだろーな」
「さあ、足音聞こえないけど」
不気味としかいいようのない洞窟の静けさを破って、狼のものらしい遠吠えが聞こえたのはそ

の時だった。
「なっなんだなんだ!?」
「狼男お…」
ノブの声が裏返る。榊が訊き直す。
「狼男!? なにそれ?」
「前の怪奇現象の時、女子寮走り回ってたの——狼男。こ、今度、本物?」
「さー、どーだろ。沖田、本物だと思う?」
「メデューサが消えたんならありがたいが…」
沖田は、壁に向いて恐るおそる目を開けた。と、二度目の遠吠えが洞窟の冷えた空気を震わせる。
「メデューサはいない、となれば」
沖田は、振り返らずに駆け出した。
「逃げろお。こわい化け物に食われるぞお」
張りつめていた糸が切れたように、一同は駆け出した。ゆるい下りの岩壁が、どんどん流れていく。すぐ背後に化け物の大群が迫っているようで、どうしても振り返ることができない。ただ、恐怖に追いたてられるように走る——
どれくらい走ったか。気がつくと、一行はホールのような洞窟が広くなった所で息をついてい

た。
「どこまで行きゃ終わりだ…」
肩を上下させながら、沖田が辺りを見回す。壁ぎわに腰をおろしてばてている榊が、岩室(いわむろ)の一角を指した。
「あのにーさんの言ってた箱って、あれじゃないか？」
「ん？」
岩室のすみに、捨てられた感じのがっちりした木箱が口を開けていた。
「これか？」
沖田は箱に歩み寄った。ポケットから、案内人に渡された鍵を取り出す。
「ちょっと持っててて」
沖田は陽子に糸巻きをほうった。がっちりした鉄のベルトで締めつけられた、宝箱のような箱にかがみこんだ。
かなり古いものらしい。年月を経たらしい木材はすっかり黒ずんで、要所要所を締める鉄のベルトにもうっすらと錆(さび)が浮かんでいる。
沖田は、あとから作り付けられたらしい錠前の中へ鍵を入れてみた。ぴたりとはまる。
「どーやらここが終点らしいや」沖田は、開け放たれた箱のフタに手をかけて立ち上がった。
「早いとこ用事済まして帰ろう」
「待てい」

重々しい、年老いた声が岩室の空気をゆらした。沖田はびくっとして手を止めた。
暗がりから、白髪に白い長いヒゲをはやした貧相な老人が現れた。
「――夢を、閉じこめてしまうつもりかの？」
言われて、沖田は空っぽの箱の中を見た。
「誰だ、じーさん？」
こんな所に普通の人間が出てくるはずがない。沖田は油断なく身構えた。
「わたしか、わたしは…」皺だらけの手でヒゲをしごいた老人は、情けなさそうに苦笑してみせた。「わたしゃ創造主だよ――一応、そういうことになっておるんじゃが」
「創造主？」陽子が声をあげた。「じゃ、あの、神様――ですか？」
「多分、そうじゃ。もっとも、わたしには自信はない」
「神様ってーと、案内人の上役か？」
沖田が訊くと、神様は首を振った。
「わたしゃ、ああいう仕事にはいっさい関わっていない。橋渡しなら大天使どもがやっとるはずじゃが」
「つかぬことをおうかがいしますけれど」榊がおずおずと口を出してきた。「あの、本物の神様でらっしゃいます？」
「あたしゃ神様だよ」老人は、苦笑しながらうなずいた。「もっとも、証明しろと言われたって無理な話じゃが」

「で、なんだ」沖田が箱を指さした。「この箱閉じると、何かまずいことでもあるのか？」
「あんたたちは、その箱が何だか知っとるのかね？」
訊かれて、四人は顔を見合わせた。首を振る。
「まあ、この四千年、生きてその箱を見た者はそういなかったから知らずとも無理はないが――名前くらい知っておろう。それはパンドラの箱じゃよ」
「パンドラの……？」
沖田をはじめとする四人は、あらためてその箱を見た。中には何も入っていない。
「知っておるかの。パンドラの箱じゃ。いろいろと言われとるじゃろ。諸悪の根源を世の中に放ったとか、希望がこの箱の中から飛び出していったとか。開けられちまったもんで、はじめに詰めておいたもんは全部出ていっちまったが、そいつは今もあるものを吐き出しとる。世の中の悪にして善であり、希望も絶望もあたえるもの――何だかわかるかな？」
神様はいたずらっぽい表情で一同の顔を見渡した。
「夢、じゃよ。こいつばかりは尽きることがない。最初に開いて以来、一度も閉じられたことがないので、人間どもはずーっと夢を見続けてきたわけだ」
神様は箱の所へちょこちょこ歩いていき、その縁をたたいてみせた。
「こいつがどんな物を吐き出してきたか。歴史で習ったり、現実に見たりして知っておろう。あんたは――」小柄な老人は、真正面から沖田を見上げた。「この想像力の函(はこ)を、閉じてしまう気かい？」

「あんた本物の神様か？」
沖田は神様に疑いの視線を向けた。
「これ閉めてくれって言ったの、案内人だぜ。そりゃあんたから見りゃ末端の構成員だろうけど、一応身内だろ？」
「こいつを閉じるとどうなるか、その案内人とやらは言わなかったのかい？」
「聞いてない」
「ほお、さよか。では代わりに説明して進ぜよう。もしこいつを閉じれば、その瞬間、一切の夢が地上から消え失せることになる。永遠にな」
「は…」沖田は、地上のバカ騒ぎを思い出した。「静かになっていいじゃねえか」
「いいのか？　もしすべての夢が消えされば、人は現実の中でしか生きられなくなる。夢を見ることすら、かなわぬ夢となるのだぞ？」
「それで？」
沖田は神様から目を離さずに訊いた。
「そうさな。夢を見るという行為自体、すでに人間どもの本能みたいなことになっておるからの、まあ人間どもが絶滅――といわぬまでも、人間以前の状態に戻るんではないかな」
「絶滅……ですか」
ほとんど実感なしに、沖田は話を聞いていた。神様は続けた。
「この地球上だけで、人間どもだけが今のところ夢を見ることを許されておる。夢を見るという

ことは、つまり考えたり創造したりすることじゃからな。それらの手段を奪われて封じ込められれば、人間が人間でなくなるといっても過言ではあるまい」

「どーも話が哲学的過ぎてよくわかんねェが、一つだけわかりそうなことがある」

沖田は、老人に向かって身構えた。

「てめェ、本物の神様じゃねえな!?」

神様は心底困ったように肩をすくめてみせた。

「さあ、問題はそこだ。わたしにも、私自身が本物かニセ物かよくわからんのだ。確かに、今までの事を全部見てきてはいるんじゃが…」

「てめェはニセ物だ」沖田はきっぱり断言した。「早い話がじーさん、あんたこの箱閉めさせたくねーんだろ。このトンネルに出て来た妖怪と同じ目的じゃねーか」

「そう…わしゃ神様なんかじゃないかもしれん。しかしじゃな、夢を見るということが夢の中の世界では実現するということなら、人間どもの長い歴史の中でも創造主が存在させられることも、あるのではないかな?」

「神様も、人間が夢に見たから実在したっていうのか?」

沖田は、同じ夢を多人数が見れば夢のパワーはそれだけ強くなるという案内人の言葉を思い出して慄然とした。地球上に、唯一絶対神を信じる宗教がいくつあるか、その信者の総数がどれくらいになるのか――

「地上(うえ)の様子を見て来たのなら、夢がどのような形で現実化しているか知っておろう。すべて、

現実化した夢はかつて夢見た者どもがそうあれと願った通りにできとる。ならば、造られた創造主でも真の創造主と言い得る事にはならんかね？」

「…知るか」

沖田は力なくつぶやいた。

「さあ、それでも夢を閉じこめてしまうつもりか」神様は、おもしろそうに訊いた。「人間どもの未来と引き換えにしてまで、夢を封じ込めてしまう気か」

「沖田、やめないか？」

腰をおろしていた榊が立ち上がる。

「もし今のままで、夢が現実のままなら、その方がおもしろいんじゃないか？」

「あの手のバカ騒ぎ趣味じゃねェ」

「でもさ、今のままの方が——夢が全部現実になってる今のままなら、現実に戻るよりよっぽど楽だぜ」

「やめろ」

「その通りだ」

「やめろってんだよ！」

沖田が喚くのも聞かずに神様は続けた。

「もし夢がすべて現実になるとしたら、それはすばらしい世界じゃないかね？」

「やめろお！」沖田はヤケになって箱のふたに手をかけた。「夢なんか——忘れちまえ！」

ばたんと大きな音をたてて、箱が閉じられた。と同時に、それまでかすかに明るかった岩室はまるでブラインドを下ろしたように闇に閉ざされた。

かまわずに、沖田は差し込んであった鍵に手をかけた。背中に誰かが抱きついてくる。

「いいの」

沖田は一瞬、息を止めた。陽子だった。

「忘れて…」

沖田は、鍵を回した。

沖田は闇の中を落ちていた。落ち続けながら、沖田はなぜ自分がここにいるのか考えようとしていた。

「や、助かりました」

闇の中から案内人が現れた。片手に、沖田が持っていた糸巻きの糸のはじを持っている。

「危うく、夢と現実のバランスがひっくりかえるところでした。もう少し箱を閉じるのが遅かったら……考えただけでもぞっとしますね」

「あの箱は、どうなるんだ？」

思い通りにものを考えられない自分の頭にいらいらしながら、沖田は言った。案内人は軽く両手を上げてみせた。

「非常用の錠前くらいでいつまでも閉じておけるような箱じゃありません。中に詰まってるもの、

のパワーが違いますからね。明日の朝までにはまた錠ひきちぎって開いちまいます」
「また開くんなら、なぜ？」
「一瞬でも、みなさんに夢を見るのを止めていただかないと、暴走をはじめた夢が止まらないんですよ。しかも、止めるようにしむけるのは夢を見ている人間自身じゃないと困るんです。夢ってのは、結局あなた方人間が生み出したものですから。
やー、しかし、今回は疲れました。あの箱に直接手を出さなきゃならないような事態なんて、あたしがこの仕事はじめて初めてですよ。では…」
行きかけた案内人は、しかしまた何か思い出したように戻ってきた。
「申し訳ありません。お約束の件ですが、やっぱりだめでした。氷島陽子さんは戻れません」
「戻れませんって――なぜ!?」
「死んでから時間がたちすぎています。まだこちら側をさまよっていらっしゃるならともかく、一度は完全に向こう側の住人になられましたし、遺体も火葬に付されてしまいましたし」
「だって、ずっといたじゃねえか。実体だったし、体もあったぞ」
「ああ、お気づきになってませんでしたか」
案内人は微笑を浮かべた。
「彼女は、あなたの夢として出現したんです。あなたが呼び寄せたんですよ」
案内人は握手を求めて手袋をはめた右手を出した。
「誠に申し訳ありません。今度こそ本当にお別れです」

「このやろお」沖田は案内人の手を握った。「今度人の頭の中いじったら…あいつが何と言おーとだ、今度小細工したらただじゃおかねェぞ！」

「覚えておきます」

案内人は軽く手を振って、去ろうとして――何かを思い出したように戻ってきた。

「大切なことを忘れてた。約束を破ってしまったお詫び、と言っちゃ何ですが、あなた輪廻転生（リーインカーネーション）て、信じますか？　今度の彼女のリーインカーネーションの時に、ちょっとした細工をしておきました。五年か十年か、それとも百年後になるかわかりませんが、楽しみにしてて下さい。じゃ、あたしはこれで」

D・DAYプラス2　PM11：00

離れていった相手が誰だか思い出せずにもう一度その顔を見ようとして、沖田は、はっとして我に返った。

女子部の校庭の真ン中に、再使用が不能になった建材やゴミを積み上げて作ったファイアストームが巨大な炎を噴き上げている。

大音量スピーカーから流れている「オクラホマミキサー」が終わった。フォークダンスの次の相手とともに、モンキーズの古い曲「デイ・ドリーム・ビリーバー」がはじまる。

二日間ぶっ続けだった文化祭の後夜祭――力一杯騒いだ疲れと、ろくに寝てないための寝不足で、まだ夢を見ているような気分の沖田は、回ってきた次のパートナーの顔を見て、今度こそ完

全に正気に戻った。
「てめ…」
ほとんど条件反射的に声をあげかけて、沖田はやめた。つばさは珍しく無表情のまま沖田に手を伸ばした。
「沖田でもフォークダンスなんかするの」
型通りに組みながら、沖田はぶっきらぼうに返事をした。
「新聞部主催のアカデミー賞一つもとれなかったバツゲームだ。てめーは？」
「各部の部長は委員会命令で強制参加」
しばらく、双方仏頂面のままで、三重の円陣の一番内側でダンスを続ける。これだけ火勢が強いと、さすがに内側は結構暑い。止まってパートナーをターンさせるついでに、沖田は炎にじっと目を据えた。
「終わった、な」
誰に言うともなくつぶやく。くるりと回ったつばさが、不思議そうな顔で沖田を見上げた。
「夢オチって、安易じゃない？」
仕上げをして戻った案内人にやっと追いついた陽子が訊いた。
「そう思ってるのは本人だけですよ。だいたい辻褄合わせるのにどれだけ苦労したか、知ってるんですか？」

「時間までいじったんでしょ。大天使みたいな人が言ってたけど」
「時間の流れを逆流させるなんて、ここしばらくなかったんですから――じゃ、帰りましょうか」
「ん。――ね、教えて。こんな夢の逆襲って、よく起こるの？」
「そうそう起こってたまりますか！　けど、まあ時たまね、逆流みたいな形であったりしますけど、こんな大掛かりなのはあんまりね」
「次、いつごろ？」
「あなた、起きてほしいんですか、こんなこと。…そうですねえ、まあ、また新しい夢がたまってから、でしょうね」
「終わりね、これで」陽子は振り返った。
「なんて事言ってんですか。これでまた一から始まるんですよ」

『ハレーション・ゴースト』完

作中に借用させていただいたイメージ・タイトルを
創造したすべてのクリエーターに
この本に関わって下さった皆様に
そして、ビューティフル・ドリーマーに
ありったけの感謝をこめて。

著　者

あとがき

某誌で怪作と評され、一時期の売り上げが第一作を上回っていたという、問題の第二作がこれです。

今だから白状するが、デビュー作の時のプレッシャーというのは一切ありませんでした。なにせゼロからのデビューでしたので、成功すればめでたしめでたし、失敗したところで失うものは何もない。そこらへん、開き直ってたわけですが、第一作は意外にも静かに好評だったのです。

だったら似たような路線で次を狙えばいいものを、第二弾でこのネタをやってしまうか笹本！こんなネタはそう何度も使えないぞ、いいのかそれで!?　おまけに時事ネタだらけだ、将来どうする気だ!?

時事ネタに関しては、実はこのころからおぼろげな解決策が見えていました。つまり、最新のものを出すとあっという間に古くなるが、あらかじめ古いものを出せば古いままで済む。クラシックになれるかどうかはまた別の問題ですが。

今回、新装版のための本文チェックを行って、ちりばめたり引用したりしているネタの数々をどうするか、実は一応悩んだのです。日本ではほとんどの流行が文化として定着する前に流され

て行ってしまう。それでも、あのころあれが面白かったのは事実だし、今さら書き直したくもない。

そういうわけで、今読み返すと懐かしくも恥ずかしい数々のネタがそっくりそのまま、ほとんど全部残されています。再調査して思い出に浸るもよし、知らない方はそのうちどこかで出会った時に、ああこれが元ネタだったのかと笑って下さい。

実は、この話には基になった原稿が存在します。

話の前半、パターンAは、デビューする前の年の某誌の新人賞に応募したものが原型となっております。

残念なことにこの回の新人賞にはハシにも棒にもかからず（不思議なことにその次の回の新人賞に第一次選考通過作品として名前が載った）、おかげで笹本は放射性元素作家としてデビューするチャンスを逃したわけですが。

書き直すにあたり、その原稿を探したのだが発見できず（つい最近も似たよーなことをしている）、しかたなく記憶を頼りに作業を再開しているあたり、オレって進歩がないなあ。

作家というのが、実は非常に精神衛生上よくない職業だということに気付いたのは最近です。書き下ろしがメインの仕事なのに加えて、書くのが遅い笹本の場合、今日やった仕事が正しいのか間違っているのかわかるのはその本が完成し、刊行された数カ月後。しかも、昨日やった仕

事が正しいのか間違っているのか不明のまま、今日も明日もその続きを書かなければならない。
本能と反射だけで書けるような才能があればいいんでしょうが、残念ながら笹本はその域には達していない。
完成しちまえば楽になるかと思っても、そのころには次の仕事がはじまってるし、時々、こんなこと今さらやっていいのかいけないのかわからないような仕事まで来てしまう。
いつまでたっても安心できないあたり、ホント、オレって進歩ないわあ。

さて、『妖精作戦』はあと二作続きます。
次回、再始動したＳＣＦに学生と平沢探偵はどう戦うか。アクション路線に戻っての第三作を、どうぞお楽しみに。

一九九四年、夏　笹本祐一

あのころの仕事風景

ハレーション・ゴーストは１９８４年の秋に作られました。

そのころの笹本の執筆道具は学生時代から使っていた０・５ミリのシャーペンに大学生協で売っていたＢ５サイズの４００字詰め原稿用紙。

原稿用紙は横書き用のものを縦書きに使っておりました。

作家なら紀伊国屋辺りに特注した専用の名入り原稿用紙に万年筆で、なんてのがステロタイプだった時代です。もちろん笹本だってモンブランだのウォーターマンだのの万年筆で華麗なる原稿執筆なんてスタイルを夢見ていなかったわけではありませんが、そうは行かない事情があった。

まず、生来の悪筆。

今もそうですが、あんまり字がうまい方じゃない笹本の肉筆原稿ってのはお世辞にもきれいとは言えないものでした。これに修正を繰り返すとなると、出来るうちはシャーペン書き、消しゴムで修正ってほうがまだましになる。

それから、縦書きという日本特有の事情。

万年筆もボールペンも、文章は左から右、上から下に書く西洋で開発され、発達しました。右から左に縦書きしていく日本でこれを使うと、まだ乾いていない前の行を右手でこすりながら次の行を書いていくことになります。

アラビア語は右から左に横書きだから、書いたばかりの文字をすぐに手で刷っていくことになるんで大変だそうな。

シャーペンだって右手の原稿に当たる面が黒くなるけど、それでも原稿の汚れ具合はインクよりましし。さらに、シャーペンは学生時代から使い慣れてることもあり、コンピューターで原稿を書くようになるまではこの体制が続きました。

シャーペンは、BOXYという三菱鉛筆のブランドで出していた太めの安物。太くて軽くて、注射器みたいな先端とノックするところがT字で軽め穴四つ開いてるみたいな世間一般のシャーペンのイメージからは大きくかけ離れたものでしたが、これが書きやすくてねえ。あるうちにと思ってスペアも一本買ったけど、今やそれもどこに行ってしまったやら。

原稿用紙はもっと大きいものなら縦書き専用がありましたが、大学ノートと同サイズとなるとほとんどが横書き指定になります。だけど、向きを変えて書き込む分には問題ないし、文庫本一冊となると最低３００枚くらいの原稿を一度に扱うことになるからかさばらない方が都合がよろしい。

原稿用紙はだいたい５０枚一冊で売られています。３００枚から４００枚で文庫本一冊となると、完成前には大学ノート６冊分とか８冊分とかの束を持ち歩かなければならないわけで、分厚いまんが雑誌くらいの量にはなってしまう。
他に創作メモとか資料とかいっぱい必要で、あの当時は自宅の外に仕事に出掛けていくなんて余裕なかったなあ。

その年の夏に出たデビュー作の印税で、人生初のビデオデッキを買ったのが１９８４年の年末商戦。サンヨーのビデオデッキ、それもベータマックスを買って自室に置いた頃、ハレーション・ゴーストが本屋に並びました。
寒い冬には部屋にはストーブ入れたけど、夏は扇風機だけ、部屋に冷房を入れたのは９０年過ぎてからだったはず。

ずっと手書きだった笹本がコンピューターでの執筆に移行したのは９０年代前半になってからの話です。それまでは、シャーペンとB5サイズの原稿用紙を縦書きに使ってという執筆体制でした。
いまからじゃもう戻れないだろうなあ。

２０１１年１１月３０日、笹本祐一

笹本務

2011.11.30.

ISBN4-257-76698-0

C0193 P500E

9784257766988

19101930050 05

学園祭で上映する自主映画の撮影中に異変が起きた。直下型地震が撮影現場の建物のみを襲い、スタッフの目の前で標本室の始祖鳥がはばたき、大温室にはなんとドラキュラが出現した。そしてこれが、間近に迫った学園祭の準備で大混乱の星南高校のみならず、日本全国を狂乱状態に陥れた一連の怪奇現象の皮切りだったのだ。——快テンポでおくる、ＳＦ青春活劇、妖精作戦PARTII！

定価500円
（本体485円）